

放課後に成長する子どもたち

三重こどもわかもの育成財団

平成 24 年度 青少年育成調査研究事業

「放課後児童クラブの『遊びと成長』に関する研究」 報告書

平成 2 5 年 2 月

川又俊則・渋谷郁子・石川拓次

放課後に成長する子どもたち

三重こどもわかもの育成財団

平成 24 年度青少年育成調査研究事業研究報告書

—放課後児童クラブの『遊びと成長』に関する研究—

目 次

はじめに	川又俊則・・・・・・・・・・	3
第 1 章 「遊びと成長」調査の概要と実施内容	川又俊則・・・・・・・・・・	7
第 2 章 鈴鹿市内7クラブの遊びの実態と指導員の遊びに対する意識 ——質問紙調査から	石川拓次・渋谷郁子・・・・・・・・	13
第 3 章 津市内3クラブの特色ある活動 ——遊びの観察と指導員へのインタビュー調査から	渋谷郁子・石川拓次・川又俊則・・	25
第 4 章 郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する低学年児童の体力と異年齢交流 による遊びに関する報告	石川拓次・渋谷郁子・・・・・・・・	41
第 5 章 郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する低学年児童の遊びの特徴と 協調運動の発達	渋谷郁子・石川拓次・・・・・・・・	59
第 6 章 学童指導員の語りにみる「遊びと成長」	川又俊則・渋谷郁子・・・・・・・・	75
補章 教育制度改革と放課後児童クラブに関する一考察 ——養護教諭志望者がクラブ指導員を経験する意義を中心に	川又俊則・・・・・・・・・・	93
おわりに	渋谷郁子・・・・・・・・・・	105

はじめに

川又 俊則

1. 研究の背景

本調査は、前年度に実施した共同調査を基礎に置いている。本調査研究同様、三重こどもわかもの育成財団から助成金を認めていただき、『三重県の放課後児童クラブの現在——鈴鹿短期大学生生活コミュニケーション学研究所共同調査報告』（2012 年 3 月刊行）にまとめられた調査である。

その調査メンバーは、放課後児童クラブ（以後、児童クラブと略すこともある。本書では同じ意味で施設や対象を指すものとして、章によっては、学童保育や学童という語句も用いる）を異年齢交流の機会と考え、その実態を質問紙調査によって把握し（三重県下すべてのクラブが対象）、実際に参与観察行って実態を確認した。同時に、クラブを「生活の場」と考えたとき、小中学校で実施されている「食育」が、そこでどのような現状にあるのかを、本学食物栄養学・生活コミュニケーション学専攻の教員たちによるアクション・リサーチの手法による調査実践で試みた。

1950 年代東京・大阪から始まった放課後児童クラブは、1997 年の児童福祉法の法制化以降、「子育て支援」「仕事と子育ての両立支援」を目指している政府方針もあり、存在意義はますます高まっている。

その法制化以降、15 年を経るが、共働きや一人親家庭の急増もあって、施設数・利用児童数ともに法制化前と比べて 2 倍以上の数になっている。2012 年 5 月現在、全国で約 2 万か所、利用児童約 85 万人の規模である（さらに潜在的待機児童は約 50 万人と推定されている：いずれも全国学童保育連絡協議会、2012 年 5 月調べ）。

三重県内でも、約 300 の施設に約 1 万人の児童が利用している。全国の小学 1 年生の約 4 分の 1 が利用するに至っており、彼女ら・彼らにとって、そこは「生活の場」であり、さらに「異年齢交流」の場とも言えよう。

このような放課後児童クラブを理解していくために、前年の調査では、3 つのアプローチで課題に切り込んだ。①三重県下すべてのクラブの現況および「異年齢交流」「食育」に関する質問紙調査（指導員、保護者）、②クラブ（学校施設内・学校外施設）の現況の観察および、幾つかの特徴的なクラブでの参与観察や指導員へのインタビュー調査、③食育活動に関する「食育」教育の実践アクション・リサーチである。

たいへん短い期間だったものの、3 グループに分かれて調査研究を進めた。研究会を開催し、成果を報告し合い、報告書作成は、それぞれの読み合わせ草稿について、短くない時間の議論を費やし報告書を完成させた。そして、放課後児童クラブの現況について、三重県の全体像を見出し、典型的な事例を観察し、「食育」に焦点をあてた調査を行った。そして、地域の特性と指導員の力量、および保護者たちの協力が、児童の発達に大きな影響を与えていることなどを見出したのである。

2. 研究の目的と方法

このような背景のもと、筆者らは「放課後児童クラブの『遊びと成長』」に関する研究

という新たなテーマを見出した。

小学生たちの多様な成長について、小学校ばかりでなく、クラブが有意義であるという仮説を筆者らは持っている。そこで、「異年齢遊び」を軸に幾つかのポイントで調査し実証することを目指した。

クラブは「生活の場」であり、さまざまな「遊び」が伝承されている。また、クラス・学年単位で行動することが多い小学生は、クラブで異学年の児童と深い交流を持ち、屋内外での「遊び」を通じた異年齢交流で多くを学ぶ。そこで、①「異年齢遊び」の重要性を、「夏休み」前後の体力測定・協調運動のスキルに関する調査で比較し、異年齢集団で夏休みを過ごす経験が子どもたちに与える変化を考察すること、②運営主体・規模・設置場所が異なるクラブにおいて、「異年齢遊び」の特徴と、低学年児童の成長を指導員へのインタビューや質問紙調査、また、クラブでの観察を通じて考察すること、これが本調査の目的である。

方法としては、①体力測定、運動スキル調査、②学童児童へのアンケート（遊びに関する簡単な質問紙調査）、③調査者・クラブ指導員アルバイト生たちによる夏休みの遊び観察、④複数のクラブの「遊び」の観察、⑤指導員へのインタビュー、⑥指導員への質問紙調査、を中心に行った。3名の共同調査者がこれまで、それぞれの専門分野で培った方法をもとに、本調査における適切な方法を検討した結果が上記の方法である。もちろん、調査の進行状況に応じて、調査前の計画を若干変更させて進めた点もある。

本報告書はそれらの調査で得られた成果を、資料提出およびそれらの考察ということでもとめたものになる。

3. 本報告書の構成

報告書各章の概要は、以下の通りである。

第1章『遊びと成長』調査の概要と実施内容」は、1年弱にわたる共同調査の概要を示したものである。

第2章「鈴鹿市内7クラブの遊びの実態と指導員の遊びに対する意識」は、鈴鹿市内で歴史ある7つクラブの指導員を対象にした「遊びと成長」に関する質問紙調査とそれに基づいたインタビューの考察である。主にベテラン指導員への調査を行ったが、クラブがどのように児童の成長を見てきたのか、対応してきたのかがわかるだろう。

第3章「津市内3クラブの特色ある活動」は、津市内の3つのクラブの見学および指導員へのインタビューを通じた特色ある活動として、幾つかの「遊び」の取り組みをまとめたものである。各クラブで調査者が見学し、図や写真にて示した児童たちの生き生きとした姿を背景に、指導員へのインタビューから、各クラブで長年実践されてきたユニークな取り組みが紹介されている。

第4・5章は鈴鹿市のある放課後児童クラブで実施された調査にもとづく。第4章「郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する低学年児童の体力と異年齢交流による遊びに関する報告」は、低学年児童の運動能力の向上に関する測定結果の分析とおもに夏休みの「遊び」を中心にした過ごし方の観察記録の考察である。クラブでの遊びが、彼女ら・彼らの運動能力を向上させるのではないかという仮説のもとに、7月、9月、11月の3回運動テストを実施した。その結果を考察している。

第5章「郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する低学年児童の遊びの特徴と協調運動の発達」は、同じ調査のうち、MABC 実技検査と児童への質問紙調査を考察している。3回の調査で、「ボールスキル」「静的・動的バランス」領域の下位検査5項目を分析し、また、2回実施した質問紙調査から、同クラブでの遊びの特徴も示唆している。

第6章「学童指導員の語りにみる『遊びと成長』」は、今回の調査で重要な知見を筆者らに与えてくれた二人の指導員に対するインタビューを、小テーマごとに整理し再構成したものである。実際の語りは収録内容の数倍にも及ぶ。紙幅の制限やテーマ設定を鑑み、そのなかで本報告書の「遊びと成長」に関するもののみを編集している。

補章「教育制度改革と放課後児童クラブに関する一考察」は、養護教諭免許を目指す学生や免許状を取得した卒業生たちがクラブでアルバイト指導員をしていることから、養護教諭と指導員の関係について考察したものである。指導員の公的資格がない現状では、以前より、保育士経験者や、幼稚園教諭・小学校教諭免許所持者などが指導員に望まれている。しかし調査者は、保健室で児童と触れ合う養護教諭免許所持者は、指導員として適切なのではないかと考えている。そこで、その適合性を彼女たちの語りや、指導員自身の先行研究などを検討して考察した。本調査とは別調査であるが、関連するものとして補章に収録した。

基本的に各章独立させた内容で構成した。タイトル等に関心を持っていただいた章からご覧いただければ幸いである。

1年弱で得られた成果は決して少なくなかった。その前の1年間で得られたことを基礎に行った今年度の調査は、筆者たちにとって、たいへん大きな歩みを持つことができたと思っている。筆者らは、本調査で得られた成果をもとに、すでに、次年度、更なるテーマによる調査も検討している。

今回の研究では、幾つものクラブの指導員や関係部署の方々のご協力が大きな力となり、このような形で成果としてまとめることができたことを、心より感謝申し上げます。また、昨年に引き続き、私たちの研究に助成金をお認め頂きました三重こどもわかもの育成財団の皆様にも、改めまして御礼申し上げます。三重県の子どもたちのために本研究が少しでも役立つことを願っております。

平成25年2月

第1章 「遊びと成長」調査の概要と実施内容

川又 俊則

1. 概要

筆者らは、昨年度、「学童保育の『異学年交流』と『食育』に関する研究」で三重こどもわかもの育成財団から助成金をいただき、三重県下の全ての放課後児童クラブ（以下クラブと略すこともある）を対象にした質問紙調査、規模・タイプの異なる6クラブでのインタビュー・参与観察等を実施した。それら研究成果は、『三重県の放課後児童クラブの現在——鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学研究所共同調査報告』にまとめ、「異学年交流」と「食育」を考察した。本研究はそれを発展させたものである。

本書は、「異年齢」交流の重要性を、「遊び」を中心にした新たなテーマで実施した調査結果で示すものである。

「生活の場を与えて健全な育成を図る」という放課後児童クラブの設立目的からも、クラブは児童にとって、単なる遊び場ではなく、成長過程に必要な能力等が得られる場になり得ることが期待されている。東京等では「学習の場」として、企業等がクラブに参入する例もあるが、筆者らは、昨年度の参与観察などを踏まえ、三重県では、むしろ、「生活の場」として「遊び」を通じた成長を見出せるのではないかと考えた。

筆者らが調べた限りにおいては、従来の先行研究（制度変遷、指導員の専門性、施設建築構造等の研究が多い）において、「遊び」に関する研究は、決して多くはなかった。それらを検討したところ、異年齢での屋内外の遊びを通じ、下級生は多くを学び成長していることも示されていた。本調査は、これらを基礎に企画された。

筆者らは、まず、「異年齢の遊び」の効果を見るために、何らかの数値等で示すことを考えた。そこで、いわゆる体力測定（走・投・跳力）や微細運動・粗大運動を含む協調運動のスキルの調査（ボールの扱い・全身のバランス運動など）を行って、その結果を数値化して捕捉を試みることにした。そして、変化を追うため、夏休み前と後、さらにその数ヵ月後という3回にわたって、体力測定と運動のスキル調査を実施することにした。その際、調査に適切な規模のクラブを検討し、全面的な協力を得られるクラブを選定した。

すでに、小中学校等のスポーツテスト結果等の結果や先行研究などから、運動をする児童としない児童の二極化が、よく指摘されている。筆者らは、身体能力の発達において、「異年齢の遊び」は効果があるのではないかと考えた。そして、多様な「遊び」が展開されるクラブでの「遊び」経験は、子どもたちの運動スキルをも向上させるとの仮説を持った。その意味で、上級生と外遊び等をよくする子とそうしない子とでは、これらの期間の前後で、個々の能力の発達に違いが見られるのではないかと予想し、調査を開始した（第4章、5章ではその詳細が考察されている）。

本調査は、「社会学」（川又）、「心理学」（渋谷）、「養護教育学」（石川）という3名で行った。3名の専門分野は異なっている。だがこれは、本調査でマイナスに働かず、逆にプラスに働いた。インタビューに二者以上が同席した場合、それぞれの関心からの質問を重ね合わせ、対象者の語りが、より立体的なものとなったのではないかと考えている。また、研究会を通じてそれぞれの専門分野での知見が共有されるに至った。

昨年から継続して調査をしているため、鈴鹿市や津市のクラブへは調査がスムーズに実施できた。鈴鹿市内で設立後 10 年以上を経たクラブの指導員に対する「異年齢間の遊び」に関する質問紙調査とそれにもとづいたインタビューは興味深いものとなった（第 2 章参照）。津市では、「特徴ある遊び」「伝承遊び」を実施している 3 つのクラブで、参与観察とインタビューを行い、見学記録としてまとめた（第 3 章参照）。さらに、独自の見解を持ち、子ども達と向き合っている男女二人の指導員に対して、長時間にわたるインタビューができた。「成長と遊び」に関するそれぞれの意見を詳しくうかがい、筆者たちなりの観点でまとめた（第 6 章参照）。

これらの調査を通じて、子どもたちが「放課後」「異年齢の遊び」を通じて成長している姿が浮き彫りにできるとの調査前の予想は、本書を通じて示すことができたと思われる。

筆者らは、本調査で得られた結果を、個別の学会発表や、シンポジウムもしくはミニシンポジウム等の開催することでアウトプットしていきたい。そして、今後、県下クラブの指導者・保護者たちとともに、一緒にクラブの意義を再考し、一般社会へ広く問いかけたいと考えている。これらの試みによって、「放課後児童クラブ」の存在自体を社会全体で考えることが、本調査の間接的成果となるだろう。

なお、本研究の調査に際しては、前年度同様、対象・施設への同意を得、常に倫理的配慮をもって進めた。さらに、調査の研究（勉強）会は、参加メンバーにより 1 ヶ月に一度程度開催し、中間報告や他の議論を参照していった。そして、本研究は、本報告書としてまとめ、関係者へ配布する予定である。

以下、本書各章で引用・参照された、主要参考文献のリストを挙げる。

■主要参考文献

- 古城健一・川内敬介, 2008, 「学童保育クラブにおける遊びの研究——運動遊びを中心として」, 『大分大学教育福祉科学部研究紀要』, 30(1), 71-86.
- 池本美香編著, 2009, 『子どもの放課後を考える——諸外国との比較でみる学童保育問題』 勁草書房
- 門脇厚司, 2010, 『社会力を育てる——新しい「学び」の構想』, 岩波新書
- 「鹿児島県学童保育白書」編集委員会編, 2011, 『かごしまの学童はいく』, 南方ブックレット 4
- 「学童保育」編集委員会編, 1998-1999, 『シリーズ学童保育』 1~5, 大月書店
- 川上敬二郎, 2011, 『子どもたちの放課後を救え!』, 文藝春秋
- 川又俊則, 2012a, 「放課後児童クラブと学校教育に関する一考察」, 『鈴鹿短期大学紀要』 32, 51-69.
- 川又俊則, 2012b, 「答志の寝屋制度と『放課後』」, 『生活コミュニケーション学』 3, 35-42.
- 川又俊則編著, 2012, 『三重県の放課後児童クラブの現在——鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学研究所共同調査報告』, 鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学専攻川又研究室
- こども未来財団, 2007, 『平成 18 年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 放課後児童クラブにおけるガイドラインに関する調査研究報告書』, こども未来財団,
- 国民生活センター, 2009, 『学童保育の安全に関する調査研究——求められる放課後の安全

な生活空間、格差の解消、保険への加入』, 国民生活センター
 国民生活センター, 2010, 『学童保育サービスの環境整備に関する調査研究——都道府県の取り組みに大きな格差』, 国民生活センター
 河野伸枝, 2009, 『わたしは学童保育指導員』, 高文研
 丸山啓史・石原剛志・中山徹, 2011, 『学童保育と子ども・子育て新システム』, かもがわブックレット 181
 三好正彦, 2012, 『連携と協働の学童保育論——ソーシャル・インクルージョンに向けた「放課後」の可能性』, 解放出版社
 宮原洋一, 2006, 『もうひとつの学校——ここに子どもの声がある』, 新評論
 宮崎隆史編, 2010, 『協働の子育てと学童保育——共同学童保育で育つ札幌の子どもたち』, かもがわ出版
 森崎照子, 2012, 『磨き耕す保育者のまなざし——学童保育カンファレンス』, かもがわ出版
 中山芳一, 2012, 『学童保育実践入門——かかわりとふり返りを深める』, かもがわ出版
 日本学童保育学会編, 2012, 『現代日本の学童保育』, 旬報社
 四方則行, 2004, 『こまワールドであそぼう』, かもがわ出版
 下浦忠治, 2007, 『放課後の居場所を考える』 岩波ブックレット No. 701
 住野好久・中山芳一, 2009, 『学童保育実践力を高める——記録の書き方・生かし方、実践検討会のすすめ方』, かもがわ出版
 高橋ひとみ, 2006, 「学童保育と『子どもの遊び』に関する一考察」, 『桃山学院大学人間科学』, 31, 21-40.
 田丸敏高・河崎道夫・浜谷道人編著, 2011, 『子どもの発達と学童保育——子ども理解・遊び・気になる子』, 福村出版
 全国学童保育連絡協議会, 2006, 『学童保育ハンドブック』, ぎょうせい
 全国学童保育連絡協議会, 2007, 『学童保育の実態と課題 2007 年版実態調査のまとめ』, 全国学童保育連絡協議会
 全国学童保育連絡協議会, 2012, 『学童保育情報 2012-2013』, 全国学童保育連絡協議会
 全国私立保育園連盟経営強化委員会編, 1999, 『学童保育の創設と経営』, 筒井書房
 『学童保育研究』 1~13, かもがわ出版 (2001~2012)
 日本子どもを守る会編, 2012, 『子ども白書 2012』 草土文化
 『日本の学童はいく』 各号 (1979~2012), 全国学童保育連絡協議会
 「学童ナビ」, 『広報すずか』, 2010 年 7 月 20 日号~2013 年 1 月 20 号 (鈴鹿市内の放課後児童クラブの紹介)

2. 実施内容

本調査は、以下のようなスケジュールで展開した。

4 月、本調査を計画した。川又と石川は前回の共同調査にも関わったため、周辺のクラブ等への結果報告を含めた調査の挨拶を行った。三重こどもわかもの育成財団への助成金エントリーを検討し、上記二者では扱いきれない分野について、心理学や障害者研究に携わってきた渋谷に共同調査を打診した。学齢期前の調査を行ってきた渋谷は、学齢期の児童へ興味を持っていたことから、3 名での共同調査を計画した。

続いて、調査対象クラブを検討した。昨年度の経緯を踏まえ、鈴鹿市・津市のクラブを規模や歴史等を鑑みて検討した結果、筆者らの勤務校の近隣にあり、昨年の調査でもたいへん誠実にご協力いただいた、サンキッズⅠ・Ⅱ（以下、サンキッズと略す）での調査打診を経て、正式に依頼した。今回の調査では3回にわたる運動測定などを実施させていただいた、指導員杉野先生とは、調査依頼して依頼、何度も打ち合わせをさせていただいた。また、助成金への申請書も作成した。

5月から6月は研究会を実施した。昨年度からの継続調査だった川又・石川が、新たに加わった渋谷に昨年の調査をレクチャーした。また、それぞれ先行研究の検討が必要ということで、勉強会を兼ねた研究会を開催した（以後、毎月1回程度の研究会を重ねて知見を深めた）。前節末に記載した主要参照文献等を各自で読み込み、テーマ設定やその背景にある知見を深めていった。助成金に採用されたらすぐに実施すべく調査日を検討した。

7月、助成金採択が決定し、調査準備が本格化した。

本調査の大きな柱として、「夏休みの『異年齢遊び』による体力と運動スキルの成長」がある。夏休み期間は、クラブで長時間を過ごすことから、平常時より多くの「遊び」が可能になる。低学年児童が高学年児童とともに多様な「遊び」を行うことで、身体の多面的要素の向上を予想した。

屋外遊びを多様に展開する鈴鹿市内のサンキッズで、7月と9月に体力測定および協調運動スキル調査を行い、結果を比較分析することにした。

初回調査日は7月24日に設定した。その前の週より、担当指導員と調整を重ねた。調査実施については保護者の了解も得た。児童への簡単な質問紙調査も実施すべく、作成し、文言その他での調整も重ねた。

24日当日は30度超のたいへん暑い日で、子どもたちの体調を配慮し、屋外での測定は、予定内容の半分の分量で実施した。夏休みの「遊び」は、調査員およびアルバイト指導員の学生が交替で、午前と午後の二回、時間帯を決めて、屋内・屋外での様子を記録に取った（考察は第4・5章を参照）。

8月は上記調査を継続した。また、夏休みの様子を知るために、鈴鹿市内の放課後児童クラブを見学した。指導員の先生方に簡単なインタビューも行い、夏休みの過ごし方をうかがったそれぞれの取り組みも見ていただいた。これらの見学を通じて知見を深めた筆者らは、指導員たちの詳しい指導や「遊び」の実態について、後日、質問紙調査を行うことにした。そして、鈴鹿市内では合計7ヵ所の実態を検討することができた。

9月は小学校校長経験者へインタビューを行った。勤務校の小学校区内で放課後児童クラブが設立された直後の状況などをうかがい、過去の状況などについて、知見を深めた。また、9月20日にサンキッズで体力測定を実施した。7月から9月にかけて、調査員は、学内メールで打ち合わせを頻繁に行った。月に2回程度は研究会を行い、調査の修正や調査結果に関する検討、先行研究の分析の議論などを進めた。

10月から12月にかけて、主に指導員調査を進めた。そのなかで「遊びと成長」を考察した。まず、昨年度もインタビュー・参与観察を行った津市立育生小学校区学童くるみ会の末廣充子指導員を訪ね、今年度の状況などをうかがいつつ、本調査の進展を説明し、他の「遊び」に関してユニークな取り組みをしている指導員の紹介を依頼した。そこで紹介していただいた3クラブおよび指導員へ連絡を取り、順次調査を実施した（第3章参照）。

いずれもたいへん興味深い事例だった。

11月8日、鈴鹿市子育て支援課へ、今年度の調査の報告と鈴鹿市のクラブの現況についてお伺いした。また、「遊び」に関して、市内でクラブ設立が古いところへの質問紙調査でご協力いただいた。12月上旬に質問紙を配布し、中下旬の回収の際、各指導員へインタビューを実施した（第2章参照）。

11月20日にサッキズで3回目の体力測定を実施した。夕方、日が沈むのが早い時期になるので、測定項目を絞って実施した。

11月30日にくるみ会の末廣充子指導員、12月4日に藤っ子会の中根大祐指導員に、「遊びと成長」に関するテーマで、長時間にわたるインタビューを実施した（第6章参照）。たいへん興味深いお話で、そのテーマの隣接部分についても長年の指導での具体的なお話をうかがい、筆者らは大いに学ばせていただいた。当初、インタビューで得られたものは分析で役立てるつもりであったが、むしろ、整理し直して記録として報告書に収録した方がいいのではないかと考え直し、両者のご承諾を得て掲載した。

12月中下旬には、鈴鹿市内で設立後10年以上を経た7つのクラブにおいて、指導員対象の質問紙調査を実施した。さらに、中旬に開催されていた、鈴鹿市内での研修会には石川が参加し、指導員の先生方から簡単なヒアリングをさせていただいた。

12月から1月にかけては、報告書作成の準備・原稿執筆を調査と並行して行った。ミーティングを重ね、1月15日に原稿案を作成した。全体討論を重ね、2月末刊行を目指し、現在作業を進めている。

なお、本調査とは別の費用（短大研究費、私費等）で、川又は、熊野市・紀宝町・南伊勢町などの放課後児童クラブを見学し、それぞれの指導員へ簡単なインタビューも試みている。また、日本学童保育学会第3回大会（2012年6月）、第47回全国学童保育研究集会（2012年10月）、第8回学童保育指導員専門性研究大会（2013年1月）にもそれぞれ参加した。興味深い数多くの発表を聴講し、見聞を深めた。さらに、養護教諭志望者（短期大学在学学生、卒業生等）でクラブ指導員経験者にインタビュー調査も実施した（その結果は補章参照）。

このようにして調査が計画、実施され、3名の筆者らによって本書が編まれたのである。

第2章 鈴鹿市内7クラブの遊びの実態と指導員の

遊びに対する意識－質問紙調査から－

石川 拓次・渋谷 郁子

キーワード：遊び 電子ゲーム 外遊び 異年齢交流

はじめに

子どもにとって遊びは、心身の成長に欠かすことの出来ないものである。特に、放課後の多くの時間を過ごし、様々な年齢の子どもが在籍する放課後児童クラブではさまざまな遊びが行われている。時間、空間、仲間の「3間」不足が言われている¹⁾現在においては、ある意味、貴重な存在となっている。放課後児童クラブにおける遊びの位置づけについて、高橋²⁾は、保護者や指導員にとっては、「保育」や「教育」の場であっても、子どもにとっては「遊び」の場でなければならず、子どもは「遊び」を通して知育・徳育・体育を身につけ、それらを伸ばすと考え、放課後児童クラブは、そのような「遊び」の場を保障する場でなくてはならないと述べている。また、古城ら³⁾は、放課後児童クラブにおける遊びの実践指導を通して、低学年児童の遊びはスポーツのように制度化・形式化された遊びと異なると報告している。つまり、放課後児童クラブにおける遊びは、子ども達の生活の一部であり、楽しく、充実した生活を送る一つ的手段であると考えることができる。

しかし、それぞれの放課後児童クラブの遊びについては、それぞれの指導員や子どもたちの中で決められていることが多く、他の放課後児童クラブや指導員が遊びについてどのような考えを持ち、遊びの実践を行っているかを知ることは少ない。特に、本年度に行った調査の中で、指導員の遊びについての考え方が、その放課後児童クラブの遊びについての基本的な考え方になっていることを多く経験した。そこで、今回、鈴鹿市内において設立10年以上の放課後児童クラブの指導員に、遊びに関する質問紙調査を行い、指導員の遊びについての考え方を伺うことにより、放課後児童クラブにおける遊びについての基礎的な資料を得ることを目的に調査を行った。

1. 鈴鹿市内放課後児童クラブについて

鈴鹿市内の放課後児童クラブの概要を表1に示した。放課後児童クラブの目的として、共働き、一人親家庭の小学生の放課後および土曜日や春・夏・冬休みなどの学校休業日の生活を保障すること、そのことを通して親が働き続けることとその家族の生活を守り、あわせて児童の健全育成の向上を図ることとされている。鈴鹿市で最初に放課後児童クラブが設置されたのは、石薬師小学校地区（昭和54年）であり、当初は、公設民営の設立が進められてきた。しかし、平成15年以降、放課後児童クラブの需要に供給が追いつかない状態となり、公設の設立を待てない保護者や社会福祉法人が各々で放課後児童クラブを立ち上げた。平成25年2月現在、公設民営が20カ所、民設民営が14カ所である。30小学校区中27校区34カ所で設置されている（小学校区に対する設置率は90%）。放課後児童クラブに通う児童数（登録児童数）は、平成20年度から軒並み増加していたが、平成24年度は

1,337名であった。指導員の登録は、167名（平成24年度）であり、常勤職員、非常勤職員・臨時職員など雇用形態はさまざまである。平成24年度の事業予算は、総額175,315,000円（県支出金96,843,000円、一般財源78,472,000円）となっている。

表1．鈴鹿市放課後児童クラブの概要⁴⁾

項 目	内 容	
初設置場所	石薬師小学校地区（金太郎学童保育所）	
初設置年月日	昭和54年4月1日	
設置数	34ヵ所	
設置率（対小学校区）	27小学校区	90%
運営主体	公設民営	20ヵ所
	民設民営	14ヵ所
登録児童数	小学校1～3年	1,021名
	小学校4～6年	316名
	総計	1,337名
登録指導員数	167名（平均5.1人）	
事業費予算額	175,315,000円	

2．鈴鹿市放課後児童クラブにおける遊びについて（質問紙調査）

2・1．調査対象と時期

対象とした放課後児童クラブは鈴鹿市内にある設立10年以上の7つの放課後児童クラブである。調査用紙の配布は、鈴鹿市へ調査依頼の承諾がおりた後、平成24年の12月上旬に担当部署より各放課後児童クラブへ配布していただいた。回収は、12月中旬から下旬にかけて、筆者らが直接回収した。その際、不足している箇所については、再度質問を行った。

2・2．調査方法

2・2・1．質問内容

放課後児童クラブでの遊びに関する調査の質問紙を図1に示す。フェイスシートとして、名前、性別、指導員の経験年数を調査した。遊びに関する設問は、6項目であった。設問内容は、1．電子ゲームの位置づけについて、2．子どもに人気のあるある遊びについて（低・中・高学年、性別）、3．遊ぶための環境の確保について、4．子どもの遊びへの指導員の関わりについて、5．遊びの中の異年齢交流について、6．発達面で「気になる児童」についてであった。

学童保育での遊びに関する調査

あなたのお名前、性別、年齢、指導員と入しての経験年数をお答えください。

お名前 () 性別 (男 ・ 女)

指導員としての経験年数 (約 年)

○ 以下の質問に順にお答えください。

1 電子ゲームなどの遊びを学童保育の中でどのように位置づけておられますか。

2 子どもに人気のある遊びを教えてください。

	低学年	中学年	高学年
男子			
女子			

3 遊ぶための環境（場所・道具など）を確保するために、何か工夫されていることはありますか。

4 子どもの遊びに指導員はどのようにかかわっていますか。（例：遊びを提案する、中に入って一緒に遊ぶ、外から見ているなど）

5 学童保育の中ではどの程度異年齢の子ども同士が遊んでいますか。また、異年齢の子ども同士が遊ぶように働きかけたりしていることがあれば教えてください。

6 現在、学童保育に在籍している子どもの中に、発達面で“気になる子”はいますか。また、「いる」と回答していただいた場合、その理由も書いてください。“気になる子”が複数いる場合、できるだけすべての子どもについて、理由をお答えください。

(いる ・ いない)

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

図1. 学童保育における遊びに関する質問紙調査

2・3. 結果

2・3・1. 回答者

回答は、その放課後児童クラブの中心となる指導員に依頼した。回答者は、すべて女性であり、指導員経験年数は平均 13.5 ± 4.7 年（9年～20年）であった。

2・3・2. 電子ゲームの位置づけについて

今回調査した放課後児童クラブすべてで電子ゲームは禁止されていた。一部、放課後児童クラブでの合宿時や運営委員会の時、保護者を待っている時のみ利用可能という放課後児童クラブもあったが、基本的には全面的に禁止であった。また、以前は、長期休暇中などに時間を決めて使用を認めていた放課後児童クラブもあったが、使用時間外も隠れて使用していたり、ゲームソフトを紛失したりなどのトラブルも多くなり、使用禁止にしたとの放課後児童クラブは2カ所あった。使用禁止の理由としては、下記の通りである。

○電子ゲーム禁止の理由

- ・ 学童保育の中で何を大事にしていくかを考えた場合、ゲームを通して友達関係を作るのではなく、いろいろな遊び（伝承、自然、ごっこ遊びなど）を経験し、その中で、お互いを理解し、関係を築いて欲しいと感じている。
- ・ 電子ゲームで遊ぶのではなく、子ども同士、頭や身体を使ってもっと遊んで欲しいため。
- ・ 外遊びを中心にしたいという思いがある。
- ・ 個人的には、禁止にしてよかったと思っている。トランプなど会話があって遊ぶ方がよい。
- ・ 電子ゲームは子どもにとって良くないと考える。

2・3・3. 人気のある遊び

子どもに人気のある遊びについての結果を表2～4に示した。男児においては、どの学年区分でも、室外で行う「サッカー」「ドッジボール」のスポーツ系や「鬼ごっこ」などが多かった。室内遊びでは、低学年は「コマ回し」や「けん玉」などの伝承遊び、中学年および高学年は「将棋」などのボードゲームが多かった。女児については、低学年および中学年では、室内で行う伝承遊びやごっこ遊びが多く、高学年では、室内で行う「トランプ」などのカードゲームが多かった。室外遊びでは、低学年および中学年は、「鬼ごっこ」や「なわとび」などが多かったが、高学年は、「ドッジボール」や「バレーボール」、「バドミントン」など、低学年および中学年では見られなかったスポーツが回答されていた。

表 2. 放課後児童クラブで人気の遊び（低学年）

性別	室外・室内	分類	遊び内容	件数	性別	室外・室内	分類	遊び内容	件数
男子	室外	スポーツ系	サッカー（ごっこ含む）	5	室外	スポーツ系	ころがしドッチ	1	
			ドッチボール	3			鬼ごっこ	鬼ごっこ	2
			野球	1				笛鬼	1
			キャッチボール	1				ポコペン	1
			キックベース	1				氷鬼	1
			三歩あて	1		遊具		一輪車	1
		鬼ごっこ	鬼ごっこ	2			なわとび	1	
			縄取り	1			鉄棒	1	
			当て鬼	1		砂場遊び	砂場遊び	1	
			豆鬼	1		伝承遊び	だるまさんがころんだ	1	
	遊具	大縄跳び	1	その他	色水あそび	1			
		固定遊具	1	室内	ドボン	1			
	砂場	穴掘り	1		カード	トランプ	1		
		砂場遊び	2		お絵かき	お絵描き	2		
	カード	ポケモンカード	1			塗り絵	1		
		お絵描き	1			絵本作り	1		
	室内	お絵かき	塗り絵			1	ごっこ遊び	おままごと	2
			こま			2		ごっこあそび	2
		伝承遊び	けんだま		2	お店屋さんごっこ		1	
			かまぼこおとし		1	シルヴァニアファミリー		1	
お手玉			1		家族ごっこ	1			
すごろく		すごろく	1	伝承遊び	あやとり	1			
		折り紙	1		毛糸遊び	1			
工作系		物づくり	1	工作系	フェルト作り	1			
ボードゲーム		ボードゲーム	1		ミサンガ作り	1			
		ブロック	ブロック		1	ビーズ作り	1		
レゴ	1		細かい製作		1				
その他	ジョイントゲーム	1	ブロック		レゴ	1			
					ボードゲーム	マンカラ	2		
					折り紙	折り紙	1		

表 3. 放課後児童クラブで人気の遊び（中学年）

性別	室外・室内	分類	遊び内容	件数	性別	室外・室内	分類	遊び内容	件数
男子	室外	スポーツ系	サッカー	4	女子	室外	スポーツ系	ドッジボール	1
			ドッチボール	2				鬼ごっこ	ポコペン
			キックベース	2			くつとり		1
			野球	1			へび鬼		1
			ティールボール	1			田んぼ		1
		鬼ごっこ	くつとり	1			遊具		長縄
			ケイドロ	1				なわとび	1
			缶けり	1			砂場遊び	砂場遊び	1
			鬼ごっこ	1				ゴムとび	1
			戦闘中（逃走中）	1			伝承遊び	つるかめおやじ	1
	田んぼ		1	室内		カード		ウノ	1
	当て鬼		1				トランプ	1	
	遊具		固定遊具			1	読書	読書	1
		砂場遊び	砂場遊び			1		漫画本	1
	室内	読書	漫画本			1	お絵かき	お絵かき	2
			塗り絵			1		絵本作り	1
		伝承遊び	かまぼこおとし			1	ごっこ遊び	家族ごっこ（おままごと）	2
			けんだま			1		コンサートごっこ※1	1
			お手玉			1		ごっこ遊び	1
			こま			1	伝承遊び	かまぼこおとし	1
		工作系	工作	1		工作系		工作	1
			ブロック	ブロック			1	指あみ	1
		レゴ		1		ブロック	細かい製作	1	
		ボードゲーム	将棋	2			ブロック	1	
			ゲームあそび	1		レゴ	1		
		折り紙	ボードゲーム	1		折り紙	折り紙	2	
			折り紙	1					

※1. コンサートごっこ（3年が中心になって、台本作り、作曲、ふりつけ、ペンライト作成などをこなす／観客は指導員）

表 4. 放課後児童クラブで人気の遊び（高学年）

性別	室内・室外	分類	遊び内容	件数
男子	室外	スポーツ系	キックベース	1
			サッカー	2
			ティーボール	1
			ドッチボール	3
		鬼ごっこ	鬼ごっこ	1
	室内	読書	読書	1
		伝承遊び	こま	2
			剣玉	2
		ブロック	レゴ	1
		ボードゲーム	将棋	3
			カロム	1
女子	室外	スポーツ系	ドッチボール	3
			バドミントン	1
			バレーボール	1
		鬼ごっこ	Sケン	1
			ポコペン	1
			鬼ごっこ	1
		遊具	長縄（ダブルダッチ）	1
	室内	カードゲーム	ウノ	1
			セブンブリッジ	1
			トランプ	1
			大富豪	1
			花札	1
		読書	読書	1
		伝承遊び	コマ	1
		工作系	手作りミサンガ	1
		ブロック	レゴ	1
		ボードゲーム	ボードゲーム	1
		折り紙	折り紙	2

<聞き取りによる補足>

- ・ 17 時からは室内に子どもたちを入れる。訪問した日はテレビ画面でビデオを見せていた。
- ・ 部屋は 2 室あり、広い方の部屋では動的な活動を行い、狭い方の部屋では宿題やマンガ、ボードゲーム（将棋）など、静的な活動を行う。
- ・ 建物の外に砂利をひいているスペースがあり、砂場、鉄棒、滑り台などがある。
- ・ マンガがかなり多くあったが、「宿題からおやつまでの時間帯」「17:00 からの時間帯」に限り閲覧可としているとのこと。長期休暇中も制限つきで許可している。
- ・ 雨の日はお絵描きやカレンダー作り、マンガ読みなどがはやっている。
- ・ 高学年は 5 年生が 1 名、6 年生が 3 名しか在籍していないため、ほとんど実態がない。

2・3・4. 遊ぶための環境の確保

遊ぶための環境の確保の設問について、多くの指導員が遊ぶ環境を整え、児童が快適に遊ぶ環境を作っている姿がうかがえる。回答には、「どこでどういう風に遊べばみんなが快適に遊べるか考え、臨機応変、交通整理ならぬ場所整理をしている」、「専用のグラウンドなどがないので、公園内の整備（草刈り）などを気にかけている。年 2 回保護者だけによる草刈りを行っている。また、公共の施設なので、学童保育を利用する子ども以外も

利用する。同じように公園内で使い方が乱暴なときは注意をしている」や「学校のグラウンドや近くの神社などを借りている。神社では椎の実を拾って学童で焼いて食べたりしている。長期休暇中は学校の体育館を借りることもある」、「保育園併設のため、遊具などの幼児サイズなので取り扱いに注意するようにしている」などがみられた。また、遊具や玩具の確保にも苦心している姿もみられる。回答には、「本やおもちゃなどは寄付をしてもらったり、使わなくなったものをもらったりしている」や「使わなくなったおもちゃや、家で余っている毛糸、紙などを寄付をしてもらえるようにお便りと呼びかけている」などがみられた。

一方で、「道具を使うというより、身体や頭を使って皆で遊ぶことが多い」との回答もみられた。

2・3・5. 子どもの遊びへの指導員の関わり方

子どもたちの遊びへの指導員の関わり方の設問について、指導員の姿勢として、一緒に遊ぶことを基本にしているとの回答が多くみられた。

回答には、「まずは一緒に遊ぶことを基本にしている。楽しさや遊びのやり方（ルール）を伝え、子どもたち同士でも遊びが成立する場合は、状況を見て中に入ったりする。指導員が遊びを提案する場合は、年間を通じて集団遊び（複数でルールのあるもの）を心かけている」、「多くの人数で遊べるような遊びを指導員が意図的に提案することもあるば、すでに遊びが始まっている中に入って一緒に遊ぶこともある」や「その時の子どもたちの状態、様子で変わってくるが、子どもたちが提案した遊びの中に入ったり、一人でポツンという子には声かけをして、遊びを提案することもある」などがみられた。その理由として、「基本的には、一緒に遊び、楽しさを共感し、同じ体験をすることで、一体感や信頼関係も得られると思う」と述べられていた。

また、気をつけていることとして、「一緒に遊んでいる子どもたちだけでなく、他のところで他の遊びをしている子どもたちの様子にも目を配りアンテナは広げておくことに気をつけている」や「指導員は見守っている状態で、何かトラブルがあれば問題解決の手助けをする」との回答がみられた。

一方で、問題点として、「子ども 10 名で 1 名の指導員なので、いつも子どもたちのなかに入って遊ぶことが出来ない」との回答もあり、指導員の人数不足の実態も垣間見られた。

市内の研修は、それぞれの指導員の間で情報交換の場として機能しており、他の放課後児童クラブの情報を得る手段となっている。また、その研修での内容を放課後児童クラブに還元し、子どもたちに紹介をし、一緒に楽しんでいるとの回答もみられた。

2・3・6. 遊びの中の異年齢交流

遊びの中での異年齢交流の設問について、放課後児童クラブでは自然に異年齢での交流が行われており、「学童は異年齢と遊ぶのが当たり前で働きかけなどない」や「低学年が高学年を頼りにして自然と高学年を中心に遊んでいる」、「異年齢の子どもと自然に関わりを持っている」との回答がみられた。

一方で、「鬼ごっこなど集団遊び的な遊びに発展するよう意図的に働きかける」や「指導員が入っている場合は、声かけをしていく。また、異年齢同士で遊ぶきっかけになるよ

うに、片付けなど、当番活動などの活動の中で関わりが持てるように考える」など、指導員が異年齢交流を促すとの意見もみられた。

また、回答の中には、「ドッチボールや鬼ごっこなど集団あそびの時も1年～6年まで遊ぶこともある。小さい子には手加減をしたりできるようになる」や「オセロなどのゲームやトランプでのゲームも小さい子が負けることがあるが、「次頑張れる」ように声掛けをする。同じところで半年以上一緒に過ごすと大きい子たちが小さい子を自然とかばってくれるようになる」など、異年齢交流での子どもたちの成長についての意見もみられた。

反対に、異年齢交流の難しさについての意見もいくつかみられた。回答の中には、「男女とも、学年関係なく、よく遊ぶが、やはり上級生は強く言ったり、きつい言葉を使っているのもたびたび耳にする」や「大規模の放課後児童クラブにおいては、どうしても同じ学年同士で遊ぶことが多くなる」、「掃除の班はあるが、他には班はない。おやつするときなどは好きな者同士で食べている。班にすると子どもたちから反発がある」、そして、「女子は上級生になってくると下級生を気にするようになるが、男子ではそうした傾向に乏しい」などがあつた。これらの対策として、「指導員からの提案による実力に配慮した暗黙のルールの設定」や「遊びの中での雰囲気作り」、「月に1度、お誕生会ということで、その月のお誕生月の子どもたちで相談し、提案した遊びを全員で遊んでいる」、そして、「クリスマス会などでは在籍している子どもたちの名前を使ってビンゴゲームをするなど、互いの存在を意識するような工夫をしている」などの回答がみられ、指導員が工夫をして異年齢交流を勧めていることがわかる。

また、「自分さえよければいい、面倒くさい、というような現代っ子特有の感じがあると思う」や「指導員を始めた頃は子どもの数も21～22人くらいで、みんなで遊んでいたが、今はイベント時などにこちらで設定しないと、なかなか一緒には遊べなくなっている」などの意見もみられた。

2・3・7. 発達面で「気になる児童」

発達面で気になる児童の設問については、各放課後児童クラブから意見が寄せられた。その中には、学習面でのこと、遊びの場面でのこと、友達関係のことに分けられる。

学習面でのことでは、「計算が不得意」「字を読むのが苦手」などの回答がみられた。また、遊びの場面では、「遊びが継続せず、すぐに他の遊びに移ってしまう」「簡単なルールの理解に乏しい」「遊びが大勢になると抜けて、少人数で遊ぶのを好む」との回答がみられた。

また、子ども全体の傾向として「遊びを発展させたり、新しい遊びの工夫や作る力が低下している」との意見もみられた。

そして、友達関係のことについては、「友達とトラブルになると前後の見境がつかなくなり、手を出してしまうことがある」、「前後の見境がつかなくなると、物を投げる、蹴る」などの回答がみられた。発達面で、「多動」、「かんしゃく」、「発達障害」との回答もみられた。それらの子どもたちへの対応には小学校との連携が必要であると考えられる。現況として、「連携は頻繁に行っており、毎週水曜日の一斉下校時には、学校の教員と放課後児童クラブの指導員が顔を合わせ、ちょっとした情報交換をしている」や「学習面で支援が必要な子は学校の担任の先生と連携している」との回答がみられた。このように、お互いの情報交換を行う時間を作ることが今後より一層重要となっ

てくるものと考えられる。

3. まとめ

以上、鈴鹿市内にある設立 10 年以上の放課後児童クラブの主任指導員に対して、遊びについての質問紙調査を行い、以下の知見を得た。

1. 電子ゲームについては、すべての放課後児童クラブで持ち込みを禁止していた。その理由として、指導員が持つ放課後児童クラブでの遊びについての考え方が強く影響するものであった。
2. 人気のある遊びについては、学年区別、性別で違いがみられた。男児は、室外遊びの中でも、スポーツ系や鬼ごっこを行うことが多く、低学年および中学年の女兒は、室内遊びを好んで行っていた。また、高学年の女兒では、低・中学年ではみられなかったスポーツ系の遊びも回答されていた。
3. 遊ぶための環境整備の設問について、多くの指導員が遊ぶ環境を整え、児童が快適に遊ぶ環境を作っている姿がうかがわれた。
4. 遊びへの指導員の関わり方については、多くの回答で、一緒に遊ぶことを基本にし、子どもとの信頼関係や一体感を得ることを重要と考えていた。一方、一緒に遊びたいが、指導員不足により一緒に遊ぶことが出来ない実態もみられた。
5. 市内の研修は、それぞれの指導員の間で情報交換の場として機能しており、他の放課後児童クラブの情報を得る手段となっている。また、その研修での内容を放課後児童クラブに還元し、子どもたちに紹介をし、一緒に楽しんでいる。
6. 異年齢交流については、自然に異年齢交流が行われおり、指導員が直接働きかけることは少ないとの回答がみられた反面、集団的な遊びでは声掛けをしてみんなで遊ぶように働きかけることもあるという回答もみられた。
7. 異年齢交流による高学年児童の成長についての回答も多くみられた。一方で、異年齢交流の難しさを指摘する回答もみられた。その対策として、指導員の工夫により異年齢交流が進められている実態がみられた。
8. 発達面で気になる児童の存在については、多くの放課後児童クラブで確認され、それぞれの放課後児童クラブで学校との連携などの対策を講じていた。

4. 考察

遊びは、放課後児童クラブの中心活動である。昨年度から放課後児童クラブの調査をするにあたり、生活の場としての放課後児童クラブを考えた時に、この中心活動である遊びをさまざまな視点から考えていくことは重要なことであると考えた。また、それぞれの放課後児童クラブの指導員がどのように遊びについて意識し、子ども達に提供しているかは不明な点も多く、それぞれの放課後児童クラブで試行錯誤しながら、遊びを行っていることが多いことも知ることが出来た。そこで、今回、鈴鹿市内にある設立 10 年以上の放課後児童クラブの主任指導員に遊びについての質問紙調査を行い、遊びの実態と指導員の遊びについての意識を調査した。結果として、今回調査したそれぞれの放課後児童クラブで指導員がこれまでの経験などからさまざまなことを考え、放課後児童クラブとしての遊びを模索していることがうかがわれた。

まず、電子ゲームについてである。電子ゲームは、高橋の調査によると約 78%の子ど

もが携帯用ゲームを所有していると報告⁵⁾し、現代の子ども達の遊びの主要なものの一つである。しかし、今回の調査ではすべての放課後児童クラブが電子ゲームの持ち込みを禁止していた。以前は認めていたが、機器やゲームソフトの貸し借りによる問題などにより禁止にしたという放課後児童クラブもいくつか見られた。このようにトラブルの原因になることを禁止の理由にしているところもあったが、それよりも、放課後児童クラブでできない遊びをさせたいとの指導員の考え方が出ていると感じられた。

児童に人気のある遊びを挙げてもらうと、遊びの内容は多岐にわたり、性別、学年により遊び内容に違いがみられた。男児は、スポーツ・運動系が多く、女児は、室内遊びを好んで行っていた。高学年の女児では、低学年および中学年ではみられなかったスポーツ系の遊びも回答されていた。伝承遊びも人気があり、今では行われることの少なくなったけん玉やコマ廻しも学年や性別に関係なく、多くの放課後児童クラブで行われていた。また、少数であるが、子ども達が遊びを考え、それを指導員が見守るという回答もみられた。現代の生活の中では、これまで多種多様な遊びを経験することは少なくなっているため、この経験が子ども達の成長に大きな影響を与えることは大いに考えられる。

遊び場所などの環境は指導員が積極的に作り、子ども達の遊びを整理し、子ども達が遊びやすい環境を作っているとの回答が多かった。また、指導員の子ども達との遊びへの関わり方についても、多くの放課後児童クラブで一緒に遊ぶことを基本としており、子ども達との関わりの中で一体感を得ること必要であるという意見が多かった。遊具などを集めることにも苦勞しているという意見もみられたが、指導員の工夫や周囲の協力により、寄付などがあるとのことであった。一方で、遊具だけでなく、頭や体を使って遊ぶことを考えるという意見もあり、ここでも指導員や子ども達の工夫により遊びを作り出すことにより、放課後児童クラブでの遊びの存在が大きくなるものと考えられる。

放課後児童クラブの特徴の一つである異年齢での遊びについても、多くの放課後児童クラブで自然に行われているとの回答がある一方で、指導員の促しによって異年齢交流を勧めているとの回答もみられた。いずれにしても、放課後児童クラブでは、異年齢で同じ遊びをすることも多く、異年齢交流は積極的に行われていると考えられる。異年齢による高学年の成長についての回答も多くみられたが、反対に、異年齢交流の難しさを指摘する回答もみられた。回答の中には、「自分さえよければいい、面倒くさい、というような現代っ子特有の感じがあると思う」との意見もみられ、現代の子どもたちの姿がそのまま放課後児童クラブにも表れていると考えられる。

放課後児童クラブにおける発達面で「気になる子」の有無については、多くの放課後児童クラブでその存在が報告された。その対応として、学校と連携し、連絡を密に取っているケースもあった。今後、発達面で「気になる子」の対応については、小学校との連携はもちろんのこと、他の機関との連携も必要になってくとも考えられる。また、小学校との連携は、発達面で「気になる子」の対応だけではなく、その他の場面でもこれから一層綿密にとることが重要になると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 武藤芳照：第1章 児童・生徒の体力・運動能力およびスポーツ傷害の実態，1．児童・生徒の生活習慣の現状と体力・運動能力の実態，学校における運動器検診ハンドブック 発育期のスポーツ傷害の予防，「運動器の10年」日本委員会編，1-8，東京，2007

- 2) 高橋ひとみ：学童保育と「子どもの遊び」に関する一考察，桃山学院大学人間科学，31，21-40，2006
- 3) 古城健一，川内敬介：学童保育クラブにおける遊びの研究―運動遊びを中心として，大分大学教育福祉科学部研究紀要，30(1)，71-86，2008
- 4) 鈴鹿市放課後児童クラブ概要
- 5) 高橋ひとみ：子どもの就寝時刻に関する一考察(II)：テレビゲーム・携帯ゲーム・テレビ視聴との関連，桃山学院大学人間科学 30，1-27，2006

第3章 津市内3クラブにおける特色ある活動 —遊びの観察と指導員へのインタビュー調査から—

渋谷 郁子・石川 拓次・川又 俊則

1. 問題の背景と目的

児童福祉法において、放課後児童健全育成事業は「（児童に）適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る事業」と位置づけられる。しかし「適切な遊び及び生活の場」とは何か、実際の保育のあり方や指導員の活動などについての明確な指針は示されておらず、運営方法については、それぞれの「放課後児童クラブ」（以下、通称の「学童保育」や「学童保育所」を用いる）の裁量に委ねられている。

目の前にいる子どもたちに、どのような生活の場や遊びを提供することが必要なのか、学童保育にかかわる人々の間では、古くから探求が続けられてきた。たとえば、1974年に創刊された、学童保育を利用する保護者や指導員向けの月刊誌である『日本の学童ほいく』誌では、何度も食事に関する特集が組まれている。話題は主に、学童保育で提供する「おやつ」のことで、手作りおやつのレシピや、おやつの種類、おやつ時間の報告や、指導員や保護者がおやつをどう考えているかの意見文・エッセイなどの記事が掲載されている（川又，2012）。このように、生活に深くかかわる食事については、検討が重ねられてきたことがわかる。

他方、遊びに関しては、小学校1年生から3年生、中には6年生まで、さまざまな学年の児童が同じ場を共有するという学童保育の特性に着目し、異年齢集団での遊び場として学童保育をとらえる動きが散見される。前述の『日本の学童ほいく』誌上では、数回にわたり異年齢集団に焦点を当てた特集が組まれ、異年齢集団の重要性やその問題などに関する、保護者や指導員の声を取り上げられている（川又，2012）。学童での異年齢集団は、かつての自然発生的な遊び仲間集団とは異なり、子どもの中に大人である指導員が存在し、意図的かつ組織的な展開が図られることになる。このように、大人が子どもの遊びを指導・援助することについて、「子どもの自主性に任せなければ遊びではない」という批判が存在する一方、子どもの遊び世界が衰退・変質してきた社会状況の下、学童保育が、異年齢集団の豊かな遊びを復活、再建、あるいは再創造していく役割を担っていると考える立場もある（河崎，2011）。

三重県では、1966年に最初の学童保育所が設置された津市において、長年にわたる活動実践が蓄積されてきている。50年近い歴史を背景に、独自の観点から異年齢遊びを展開する学童保育所が、津市内に複数あることが、筆者らが調査を進める中でわかってきた。そうした学童保育所では、いわゆる「伝承遊び」を活動の軸に据えたり、既存の遊びに新たなルールを加えて多くの子どもたちを遊びに誘い込んだりと、創意工夫を凝らして遊びに取り組んでいるようであった。

そこで筆者らは、特色ある活動を展開するこれらの学童保育所について、観察や聞き取りを行い、遊びをめぐる物的・人的環境や、異年齢集団の組織のされ方、子どもたちの遊びの様子など、詳細を調べることにした。これによって、現代の子どもたちにとっての「適切な遊び及び生活の場」がどのようなものなのか、検討するための手がかりを得たいと考えた。

2. 方法

2. 1. 調査対象

「育生地区放課後児童クラブくるみ会」の末廣指導員に、津市内で特色ある活動を展開する学童保育所を複数提示してもらった。その中で、観察調査に対する了承が得られた、「一身田地区放課後児童クラブつくし会」「南立誠地区放課後児童クラブひまわり会」「藤水地区放課後児童クラブ藤っ子会」の3施設を対象とした。

2. 2. 手続き

調査者1名が各学童保育所にて、施設内設備の配置や利用法などの物的環境や、在籍児童や指導員の人数などの人的環境を把握した。また、子どもたちが遊んでいる様子を観察し、遊びの種類や遊んでいる場所、遊びに加わっている人数などを記録した。さらに、遊びに関する指導・援助の取り組みの実際や、重視していることなどを、指導員から聞き取った。各施設の訪問日時および聞き取りの対象となった指導員を表1に示す。

表1 各施設の訪問日時と聞き取り対象者

施設	訪問日時と天気	聞き取り対象者
一身田地区放課後児童クラブつくし会 (以下、つくし会と記す)	2012年10月15日(月) 13:00～14:00 曇時々晴れ 2012年10月17日(水) 15:30～16:30 雨	五十右指導員
南立誠地区放課後児童クラブひまわり会 (以下、ひまわり会と記す)	2012年10月15日(月) 15:50～17:15 晴れ	山口指導員
藤水地区放課後児童クラブ藤っ子会 (以下、藤っ子会と記す)	2012年11月7日(水) 14:00～16:30 晴れ時々曇	中根指導員

3. 結果

3. 1. つくし会

3. 1. 1. 施設概要

一身田小学校区内に1975年に設立し、今年で設立38年目の公設民営の学童保育である。1年生から6年生まで96名が在籍している。指導員は、正規2名、非常勤4名の計6名である。一身田小学校に隣接する土地に2棟の生活スペースがある。3年前に児童数の増加により分割された。遊ぶ場所は、学校の校庭、地域のグラウンドゴルフ場、学童保育内の庭、そして、週に1回小学校の体育館を使用する。

3. 1. 2. 遊びの観察

つくし会では、毎週水曜日に一身田小学校の体育館を借りて2年生から6年生まで合同で伝承遊びとスーパードッジボールの練習を行っている。スーパードッジボールは、定期的にかかれるドッジボールの交流大会にも出場をしている。



体育館に集まった児童たちは、それぞれ 写真1 みんなでウォーミングアップ

れ準備をし、学年ごとに整列をする。そこから、ウォーミングアップとして、ダッシュや往復走、横走りなどを数本ずつ繰り返す。これは、先のインタビューでも話のあったみんなで同じことをして、その中から楽しいことを見出すという考え方から行っているものであり、子どもたちはそれぞれが個人の体力に合わせて、ダッシュなどを繰り返していた。

一通りのウォーミングアップが終わると、低学年の女児たちはゴムとびや毬つきの伝承遊びへ男児や上級生の女児はスーパードッジボールの練習へと移る。スーパードッジボールの練習は、さらに準備体操やストレッチをした後、2チームに分かれて試合形式の練習を行う。ここに指導員が審判役として1名つき、児童たちの様子をみている。審判役も兼ねているため、的確に判断をし、試合を進めていた。児童たちは、男女、学年入り混じったチームを組み、上級生の指示でフォーメーションを確認しながら、試合を行っていた。また、スーパードッジボールを行っている隣では、下級生の男児たちがスーパードッジボールに入るための練習として、キャッチボールを行っていた。指導員の方に何うと、上級生のボールがまだ受

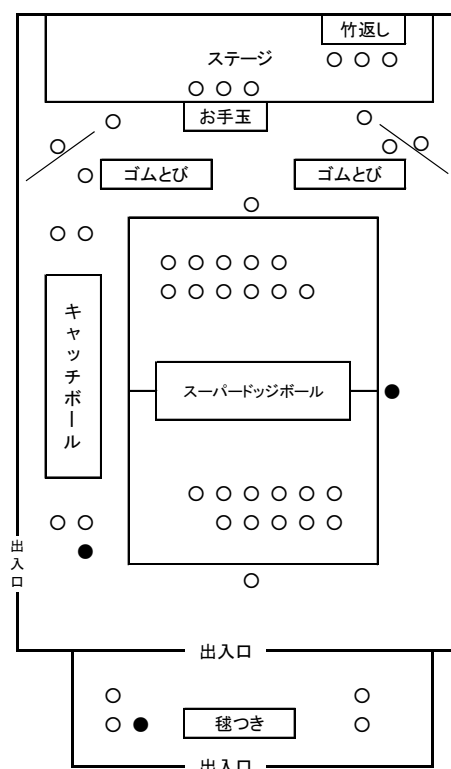


図1. 見学時の体育館配置

○ 児童 ● 指導員

けられない下級生は、こちらで練習をして自信をつけてから中に入るようにしているとのことであった。また、上級生（5,6年生）の女兒たちは、伝承遊びを終えて、スーパードッジボールをしたいと希望のある児童たちはスーパードッジボールを行っていた。



写真2 スーパードッジボール

一方、伝承遊びを行っている下級生の女兒たちは、ゴムとびと毬つきを行っていた。毬つきの方は、指導員の方が1名つき、一緒に童謡を口ずさみながら練習を行っていた。また、ゴムとびは、体育館の端隅を使い、3～4人組を作って、それぞれ童謡や唱歌を歌いながら、ゴムとびを行っていた。子どもたちからは、「伝承遊びは、できなかった技が段々できていくのが楽しい」との声も聞かれた。ここでも、指導員から子どもたちへ、そして、子どもたち同士での童謡や唱歌を歌いながら伝えていく姿が見られた。



写真3 指導員と毬つき

約1時間であったが、子どもたちはそれぞれ思いっきり身体を動かし、伝承遊びやスーパードッジボールを楽しんでいた。

伝承遊びは、つくし会で26年もの長きに渡り継続して行われているものであり、それを続けていくことは、学童保育所での遊びに対する一つの想いであり、指導員の情熱を感じた。そして、児童たちは、伝承遊びとスーパードッジボールが行える毎週水曜日を楽しみにしている。

3. 1. 3. 指導員へのインタビュー

つくし会では、26年もの間、継続的に子どもたちの遊びに伝承遊びを取り入れてきた。伝承遊びとは、昔から受け継がれてきた日本古来の遊びのことである。代表的なものとして、コマ回し、お手玉、けん玉、あやとり、折り紙、竹馬、ゴムとび、百人一首、竹返しなどがある。

つくし会では、期間限定で、1つの伝承遊びをみんなでするように指導員が促している。好きな遊びをするのではなく、一つの決まった遊びをする中で、その遊びの楽しさを見つけていけるように指導している。現代は、場所、仲間などがなくなり、遊びをする機会が減っている。学童保育は、そのなくなっている場所や仲間があり、遊びを行うのには絶好の環境であり、日本の遊び文化を伝承していきたいと考えている。その中で、昔ながらの遊びである伝承遊びを取り入れ、いろいろな遊びを伝えていきたいという思いがある。子どもたちは、その期間限定の伝承遊びを各々に異年齢集団を作って、遊んでいる。その際、上級生が下級生にその遊びの方法や規則、そ

して、技などを教えて、楽しみながら遊んでいる。異年齢集団で遊ぶ効果として、下級生が、上級生が行っている遊びの中で、技や行動を見ることによって、その上級生のようにになりたいや真似をしたいと思うことがあげられる。また、伝承遊びを取り入れる理由として、コマ回しやけん玉など多くの伝承遊びは、さまざまな技に挑戦する形式のものが多く、それらの技を行っていく上で、上級の技を極めていく楽しさを伝えたいと考えている。また、その技が難しくてできない場合も当然あるが、その中で生じる出来ないことへの辛さなどからも目を背けないで欲しいと思っている。実際に繰り返して練習していくと出来なかった技が出来るようになっていく。例えば、1年生から伝承遊びを続けていて、4年生で急に上手くなる子どももいる。コマ回し、けん玉は技の検定を行う。また、百人一首も和歌の読み合わせを行い、段々と暗記できるようになり、それを子どもたちのやる気の源にしている。伝承遊びの中でゴムとびのように童謡や唱歌を歌いながら行うものがある。その童謡や唱歌も指導員から子どもたちに、そして、上級生から下級生へと実際に歌って伝えていくということを大切にしている。また、基本的には、雨の日以外は外遊びを勧めている。外遊びでも特にみんなで行えるものを選ぶことにしており、その遊びの集団から生まれる協調性を大切にしていきたいと考えている。なお、毎週水曜日は、小学校の体育館を借りて、2～6年生までみんなでスーパードッジボールと伝承遊び（ゴムとび・毬つき・お手玉・竹返し）をしている。筆者が見学に行った時には、伝承遊びは、女兒中心でゴムとびと毬つきを行っていた。

3. 2. ひまわり会

3. 2. 1. 物的・人的環境

1970年に設立され、創立40周年を経た学童である。公設民営で南立誠小学校内に二棟の部屋がある。クラス分けは、毎年5月頃、その年の子どもたちの様子を1ヵ月ほど見てから、学年・男女などが偏らないように行っている。

2013年1月現在、1～6年の在籍児童は86名である。指導員は正規職員3名、非常勤職員7名である。

遊ぶ場所は小学校校庭が中心で、体育館を借りて遊ぶこともできる。



写真4 「おやつ」後の出番を待つ一輪車と竹馬

3. 2. 2. 特色ある遊び

3. 2. 2. 1. 地区運動会 への参加

この学童の特徴は、小学校区で開催される地区運動会の昼どきに、毎年、「ひまわり会演技」が披露されていることである（2012年は10月28日（日）の開催予定だったが、雨天のため11月

18 日に変更された)。

筆者が見学を訪れたのは運動会のちょうど 2 週間前であり、外遊びではその練習のちょうど仕上げの段階だった。

演技の内容は、竹馬 (1, 2 年女子、全男子) と一輪車 (3 年以上女子) の 2 つである。

見学した内容は、16 時 10 分から竹馬の通し稽古、その後、16 時 30 分から一輪車の通し稽古だった。

筆者が見る限り、音楽に合わせた演技は、だいたいきれいにできていたように思われる。

山口指導員の話では、6 年生を中心に、その年の演技の内容・曲などを考え、指導員が助言をしつつ、決定し、それにもとづいて指導しているとのことであった。演技していくなかで、若干の変更も加えていくという。笛を吹いて他の児童へ指示するのも 6 年生が行っていた。

見学した日はちょうど早退した児童も多かったらしいが、竹馬練習には 35 名、一輪車練習には 15 名くらいが参加していた。

指導員はその日は 4 名が、それぞれの練習で、児童のそばについて指導していた。

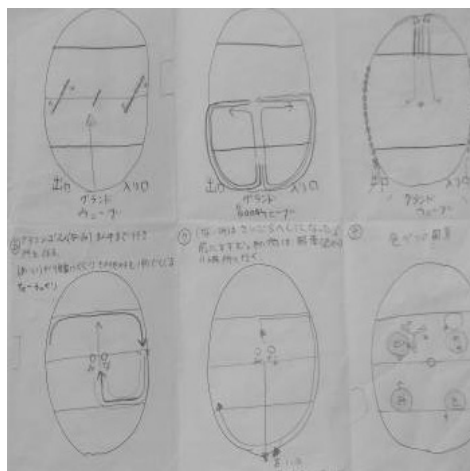


写真 5 女の子たちが考えた一輪車の動きの図

3. 2. 2. 2. 一輪車

ひまわり会で「一輪車」は、山口指導員の赴任前から、児童たちに人気の遊びだったそうだ。赴任以降、子どもたちの体格が大きくなってきたこともあり、22 インチサイズを追加購入したという。そして、「ロングフラミング」という種類の背の高いサイズ (写真 6 参照) も、「6 年生が乗れる一輪車」として、運動会の演技にも中心的な役割を果たしている (5 台あり)。一輪車は全部で 55 台ほどある。女の子は、年中これで遊んで、追いかっこなどをしている子も多い。



写真 6 「ロングフラミング」を含む一輪車の演技の練習

一輪車は、動き出したらそのままだが、一度止まって校庭に降りた後、その場所から再び乗るのには技術が必要で、難しいということであった。そこで、その技量がないと運動会での演技は

許可されない。夏休みに、その確認をしている（竹馬も同様）。

下級生は上級生の運動会（やその練習の）演技を見て、自分たちもあなりたいと思うらしい。一輪車の演技は竹馬より難しいため、運動会での演技は３年から参加可能としてある。「ロングフラミング」に乗ることが許されるのは６年生と決められている。下級生にとってそれらをできる上級生があこがれであり、身近な目標となっているようである。

3. 2. 2. 3. 竹馬



写真 7 竹馬の演技の練習

同じく、山口指導員赴任前から子どもたちは竹馬でも遊んでいたという。現在、55 台を管理している。かつては、脚立を立ててそこから乗るようなことも認めていたが、たいへん高い位置に足台を設定する子もいて、危険性が高いということもあって、現在では足台の設置場所を、自分一人で、脚立などを使わずにその場で乗れる高さで決めているという。

運動会演技のリーダーは６年生であり、彼一人が６年生の演技者である。彼は低学年で最初、竹馬に乗っていた頃は、足が曲がったような体勢で乗っていたという。練習を積み重ね、３年生頃には、うまい乗り方をマスターし、現在では、1m位の高さに足台を設定しても、竹馬を自由自在に操っているとのことだった。筆者が見学したときも、たしかに、スムーズに動いて、たいへんうまく演技していた。

山口指導員によると、子どもたちにとって、自分の普段の視界から 10cm でも 20cm でも上の位置からの視界となることで、驚きを持っているとのこと。ただし、一輪車とは異なり、運動会までは多くの児童が利用しているものの、その後は、利用されず、年中の利用はあまりないという。

3. 2. 2. 4. スーパードッジボールとサッカー

ひまわり会では、昨年までしばらく、遊びの一つとして、スーパードッジボールに力を入れていたそうである。だが、男の子たちはサッカー好きが多く、保護者で指導できる人もいたということもあり、保護者たちと相談した結果、今年度は水曜日に「サッカー講習」を行うことにしたという。その結果、男の子たちはその「サッカー講習」に参加し、ふだんの曜日もサッカーをする子が多いという。

女の子たちは、外遊びとしては一輪車遊びを中心にしているようである。

たしかに、見学時、竹馬の練習が終わった後、ほぼ全員の男子はサッカーに興じていた。校庭

全体の各所で 5, 6 グループくらいに分かれ、ボールを蹴っていた。同年齢らしきグループもあれば、明らかに異年齢と思われるグループでのボール蹴りもみられた。また、女の子たちは竹馬演技の後に一輪車で追いかけてっこをする低学年児童もいた（一輪車演技は 3 年生以上のため、1, 2 年生の女子は竹馬演技のあとは自由な外遊びだった）。

3. 2. 3. その他

筆者が見学に着いた時刻は、ちょうど、おやつが終わりかけの頃であった。もともと、特色ある遊びをしている児童の姿を見学したいと申し出ていたので、その時間帯を見学時間に設定していただいたということでもある。

すでにおやつを終え、外で遊んでいる子も 10 名弱いた。それ以外の児童は学童施設内にいた。16 時になると指導員の先生方が、「練習始めます」と言って、二つの棟に声かけしていた。ほぼ全員の児童が外に出て、竹馬に乗り、あるいは一輪車に乗り、演技する入場場所へ向かった。入場から演技へと進み、音楽に合わせて、また、途中で適宜、指導を受けながら、全体練習が、竹馬、一輪車の順に行われた。

16 時 45 分に、校庭全体で、鉦を鳴らして歩き回っていた指導員がいた。それは、外遊びはその時間までで、その後、「帰りの会」を行うからである。その「帰りの会」の後、17 時から、帰る方向が一緒の子たちで、集団下校を行う。

18 時 30 分までの延長保育もある。それは 15 名程度であり、他は 17 時までの学童での基本となっている。もちろん、場合によっては、17 時前に保護者が迎えに来ていたケースもある。見学時にも 3, 4 人の児童は、保護者の迎えを受けて、一緒に帰宅していた。

3. 2. 4. まとめ

地区運動会参加が、子どもたちと指導員にとって大きな行事であることを理解した。そしてそれが長い間続けられてきたことで、就学時前の児童がその様子を見て「ひまわり会」がどんなところかを想像し、1, 2 年生になると実際に竹馬に乗り、さらに上の学年になると、普段、遊んでいる竹馬や一輪車で、祖父母などの前で演技できるのだと期待し、さらに上級生まで学童にいる子たちにとっては「ロングフラミンゴ」や、演技内容を自ら考えたり、リーダーとしてふるまったりという体験もできるような仕組みになっている。

ある意味で伝統の継承ということになるのだろう。もちろん、そのためには、山口指導員だけではなく、指導員全体で夏休みから秋まで指導をしていた。子どもたちが、竹馬や一輪車にそれぞれうまく乗れるようになり、演技がうまくできていく成長の様子を見守っていく喜びがあるという。筆者は、わずかな時間しか滞在できていなかったが、子どもたちと指導員の会話や動きなどを観察し、「生活」として特色ある行事を行っていることが理解できたように思った。

3. 3. 藤っ子会

3. 3. 1. 施設概要

藤水小学校内に1982年に設立し、本年度で設立32年目の公設民営の学童保育である。1年生から6年生まで101名が在籍している。指導員は、正規4名、非常勤6名の計10名である。

3. 3. 2. 環境

施設建物は小学校の敷地内に2棟あり（図1を参照）、各棟に4名ずつ指導員がいる。在籍児童数は現在101名で、性別や学年を考慮した上で、まんべんなく各棟に分けられている。「クラス替え」は年に一度、3月に行うことになっている。おやつの内容は棟ごとに異なっており、観察した日には、A棟では袋菓子、B棟では手作りのドーナツが出されていた。

小学校の校庭は、普段は自由に使うことができ、どちらの棟に所属しているかに関係なく、子どもたちが一緒に遊んでいる。観察した日は曇天だったため、多くの子どもが校庭で遊んでいたが、雨天時は体育館を借りて遊ぶことになっている。校庭は十分に広く、ブランコ、滑り台、ロッククライミング、タイヤなどの遊具を備えている。この他に、ドッボールやサッカーボール、一輪車など、遊びに必要な道具が学童の備品として用意されていた。

3. 3. 3. 活動時間

14時30分を過ぎた頃から、高学年児童らが下校し始めた。彼らの多くは、学校の宿題や復習をすることなく、指導員と話をしたり外に遊びに出て行ったりした。中根指導員によれば、宿題を終えるには概ね10～30分程度を要する。低学年では学習習慣を身につけさせるために、宿題に取り組むための十分な時間を確保するようにしているが、高学年に対しては、下校が遅く、遊ぶ時間がとても短いため、宿題を家でするか家庭でするか、各自の段取りに任せているということであった。

おやつの時間は15時45分からとなっている。指導員が性別や学年を考慮した上で、くじ引きで決められた班に、各自が分かれて食べる。

通常17時に帰宅することになっているが、季節によって帰宅時間は変わる。冬期の帰宅時間は16時45分である。

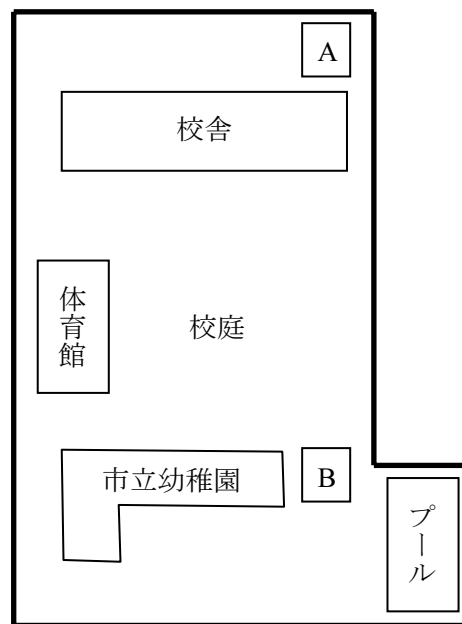


図2 小学校敷地内にある藤っ子会の2棟
※AおよびBの棟が藤っ子会が使用する建物

3. 3. 4. 遊びの観察

外遊びとして、ドッジボールやサッカーの他、「うどん」、リレーなどが観察された。ドッジボールは、指導員 1 名を含む 15 名程度で行われていた。サッカーは、指導員 1 名を含む 17 名で開始されたが、ドッジボール終了と同時に参加者が増え、最終的に複数の学年の男女合わせて 34 名となった。参加者はオレンジや青などのチーム分けベストを着用していた。



写真 8 帰宅前：今日の活動をふりかえる

藤っ子会では、ドッジボールやサッカー等の遊びにおいて、それらが苦手な子どもでも活躍でき、楽しめる工夫として、指導員が独自のルールを設定し、全員で遊べるようにしている。たとえば、サッカーで適用される「1,000 点ルール」は、6 年生は 1 ゴール 1 点、3 年生は 5 点、2 年生は 10 点、1 年生は 100 点、女子なら学年を問わず 1,000 点というように、その日集まった子どもの学年や性別ごとに、一人ずつ得点を変えろというものである。また、サッカーに直接的には参加していない子どもであっても、応援団としてサッカーに参加している児童に対して声援を送るという参加形態も見られた。調査者が遊びの様子を写真におさめっていると、応援団であった小学校 4, 5 年生の女児らは、6 年生の男児を指差し、「あの子はもうすぐ卒業していなくなってしまうから、ぜひ写真にとっておいてほしい」と話しかけてきた。違う学年、違う性別の児童においても、仲間意識が共有されているようであった。

ドッジボールやサッカーよりも少人数でできる「うどん」は、2 チームに分かれて行う遊びである。各チームのメンバーは、1 名ずつ自陣から出発し、出会い頭にジャンケンをして少しずつ相手の陣地に近づいていく。最終的に相手の陣地に先に到着したチームが勝ちとなる。この日は、低学年児童がこの遊びをしており、指導員 1 名がそこに加わっていた。

こうした遊びに加わらない低学年児童は、指導員の援助の下、低学年だけのドッジボールやリレーを楽しんでいた。リレーには少数だが 6 年生も混ざっていた。さらに、少人数でブランコや滑り台などの遊具で遊んでいる低学年児童もいた。他に、どの遊びにも加わらず、一人でぶらぶら歩いている児童も 2 名ほどいた。

室内をのぞくと、いずれの棟にもさまざまな学年の児童が数名残っていたが、今回は外遊びを中心に観察したため、室内でどのような遊びが行われているのかについては詳細を記録することができなかった。

3. 3. 5. 指導員へのインタビュー

児童が下校する前の時間帯に、中根指導員から、学童保育所での集団遊びについて、どのような思いや考えを持って組織されているのか聞き取った。中根指導員については、他日、より詳細

なインタビュー調査に協力していただいた。その結果を第6章に示しているため、ここでは簡潔にまとめる。

1) 子どもの遊びの変化

遊び集団のリーダーの決まり方が、昔と違うのではないかと感じる。学童外の時間や休日にも子どもたちは一緒に遊んでいるが、遊びの種類はもっぱらゲームやカードを使ったものである。すると、ゲームやカードを多く持っている子どもが、集団のボスになることがある。昔は、各自の技や腕前など、遊びの中で発揮される実力によって、リーダーが決まっていたように思う。今の子どもたちの、ゲームやカードを使った遊びの中で決まる序列は、ゲーム以外の遊び（ドッジボールやサッカーなど）や生活の中にも反映されることがある。そういう意味で、ゲームを中心に置いた人間関係は望ましくないし、体を使って遊ぶ、人と遊ぶことに重きを置いているので、藤っ子会では、ゲーム類は持ち込み禁止にしている。

2) 遊びに関して工夫していること

苦手な子が歓迎されるような遊びを生み出そうと努力している。たとえば、ドッジボールをしている最中、なかなかボールに触れられない女兒のために、女子用のボールを用意し、2つのボールを使ってゲームをしたり、（前述の）1,000点ルールを導入したりするなどの工夫をしている。

3) 異年齢遊びを展開させるのに必要なこと

異年齢の子どもどうしの遊びをつなげるためには、魅力ある遊び、憧れや目標となる上級生の存在などが必要だと思う。はじめて行う遊びを導入する時には、指導員が思い切り楽しむ姿を子どもに見せることを心がけている。様々な得意分野を持つ大人が何人もいることで、子どもは遊びの選択肢を複数持つことができると考えている。また、低学年児童や女兒に対しては、あえて負けてみせるときもあるが、サッカーチームに入っているなど、真剣に「スポーツ」をしている児童に対しては、勝負に挑んで簡単には勝たせないなど、子どもを遊びに引きこむためには、相手の年齢や実力によって対応を変える必要もあると考えている。

4) 室内での遊び

自分の番が回ってくるまで、子どもを待たせなくてよい遊びが必要だと思う。待たせなくてよい遊びとして考案したのが4人将棋である。通常の将棋板の左右に、縦3列×横9列の陣地をくっつけて、4人で将棋をできるようにした。正面の相手だけではなく、横合いから別の相手に攻



写真9 キャンプにて鶏の丸焼きを作る



写真10 サイクリングにいざ出発！

められるなど、先の展開が読めないスリルがあり、なかなかおもしろい。こうした新しい遊びを提案する時は、まずは子どもたちに提示してみる。子どもが面白いと思えば、遊び文化のひとつとして、その遊びは定着し、受け継がれ、発展させられていく。指導員が躍起になって取り組んだり、はやらせようとしても、子どもにとって面白くなかったら「させられている」と感じるのか、その場限りのことが多い。

5) 行事について

4～6年生の合同行事として、数班に分かれて大人の引率なしに、JRの青春18切符を使った1日旅行を体験している。5年生では、長距離をサイクリングしてみかん狩りなどに出かける。6年生は夏休みに、松阪でキャンプを行い、鶏の丸焼きを作ったり、巨大な筒花火を楽しんだり肝試しをする。こうした行事では、普段とは違う子どもの顔を見ることができ、その後の人間関係に変化をもたらすこともある。卒業時には、京都市内をサイクリングする「卒会旅行」を行っている。

3. 3. 6. 学童保育と家庭をつなぐ「おたより」

中根指導員のご厚意により、藤っ子会が保護者に向けて発行している「ふじっこだより」をお借りした。学童での遊びや、子どもたちどうしの関わりの様子が、丁寧に書き込まれている。また、近接するさまざまな行事のことなどにも触れられている。児童名がわからぬよう修正を加えた上で、調査日に近い2012年10月12日発行のNo. 26および、11月9日発行のNo. 30を、資料として章末に掲載した。

4. 考察

「遊びの指導・援助」というとき、「遊び」と「指導」ということばの響きが相容れないためか、矛盾しているように感じられる。しかし、特色ある活動を展開する3クラブの調査を通して、現代の子どもに多様な遊びや異年齢集団を経験させたいと願うなら、大人による遊びの方向づけや提案、決定など、指導的と呼べるようなかわりが必要であることがわかった。

つくし会では、期間を決めて、一つの伝承遊びにみんなで取り組むように指導員が促していた。伝承遊びには、さまざまな技に挑戦する形式のものが多く、上級の技をきわめていく楽しさがあるという。一つの遊びに向かい合い続けることで、はじめはうまくいかなくとも、その楽しさを見出してほしいという指導員の思いがある。また、みんなで取り組むことにより、上級生と下級生の間に、教え教えられるという関係が生じ、上級生が下級生の憧れの存在として映るようになる。これなどは、かなり積極的に、大人が遊びをリードしている例であろう。

ひまわり会では、毎年、地区運動会で竹馬と一輪車の演技を披露している。演技の内容、曲などは6年生が中心となって決め、演技中に笛を吹いて支持するのも6年生だという。竹馬には低

学年女兒と全学年の男児、一輪車には3年生以上の女兒が出場する。このように6年生を中心に異年齢集団が組織・統率され、整然と練習が行われていた。この場合、大人は、地区運動会での演技という行事を導入し、その枠組みの中で子どものアイディアやリーダーシップを尊重しながら、異年齢集団で同じ目的に向かっていく機会を提供しているといえる。

藤っ子会では、サッカーやドッジボール、将棋などの既存の遊びに、指導員がさまざまなアレンジを加えていた。これは、実力の差にかかわらず、いろいろな子どもと一緒に遊びのための、そしてまた、いろいろな仲間がいることそのものを楽しめるようにするための工夫である。しかし、これらの取り組みは、決して大人が強制的に導入したものではなく、大人が提案したものを、子どもがおもしろいと感じ、取り入れてきたという経緯がある。そのためには、子どもの心をとらえられる、魅力あるモデルとして、指導員自ら積極的に遊ぶことが重要である。このとき大人は、子どもの中に入って一緒に遊びを動かしながら、多くの仲間と遊ぶ楽しさに子どもを引き込んでいっていると考えられる。

こうした取り組みは、当事者である子どもにどのように受け止められているのだろうか。本調査ではこの点については把握できなかったが、一般的に高学年になって一人で留守番できるようになると、学童保育を退会していく児童が多い中、3クラブとも高学年児童が多く在籍していた。これは、学童での遊びや人間関係、行事などが、高学年児童の目から見ても、魅力的で心躍るものになっていることの証左ではないだろうか。

以上のことから、現代の子どもたちにとっての「適切な遊び及び生活の場」とは、多様な遊びを経験し、縦横ななめ、いろいろな人間関係の楽しさに気づく場であると考えた。そしてそれは、現代にあっては、家庭と学校だけではなかなか保障できず、子どもの自発性に委ねるだけでも実現されにくいようである。毎日一定の時間が確保され、少しずつでも経験を蓄積していくことのできる学童保育所において、思いを持った大人が意図的に子ども集団にはたらきかけ、遊びをリードしていくことが必要であり、手間暇をかけて体現されていく場であることが示唆された。

5. 文献

河崎道夫（2011）. 遊びを豊かに—学童保育における遊びの理論と実際. 田丸敏高・河崎道夫・浜谷直人（編）. 子どもの発達と学童保育—子ども理解・遊び・気になる子. 福村出版, 64-142.
川又俊則（2012）. 放課後児童クラブと学校教育に関する一考察. 鈴鹿短期大学紀要, 32, 51-70.

11-9-會議 1:2...

2012.10.12(金)
No.26 (1350) 発行
No.26 (1350) 発行
No.26 (1350) 発行

フットボール交流会が終わり、二週間がたちました。みんなが同じ目標を持って団結して戦った交流会。保護者の皆さんも応援に声をからし、熱狂と感動の余韻に浸りながら、来年の20日が来るのや、もう待ち切れはい/という熱い声をもたつくさんい/ころとどい/う。そのドッジ熱は子どもたちの中にもまだ冷めず、交流会の終わった今、まだまだ、ますます盛んなのです。毎日、多/い時には30人も40人も、男女学生問わず、わんさか集まって遊んでいます。以前に紹介した、1000点ルールにさらに工夫をして、女の子が投げられる2つのボールを使った、ダブルボールドッジが、今では人気です。この新ルールの中では、たいてい交流会がバットバット相手と当てていた6年生の男の子たちと、女の子は後ろからボールと低学年の女の子に当てられしています。それに、女の子の中にも、大砲のような勢いのボールを投げる子もいますから、まったく油断ができません。内野と外野から、ダブルボールで投げ込まれたら、大騒ぎで逃げ回ったり、仲間と背をくつ付けて背後を守り合ったりして、いびきです。そのスリルや、誰かが活躍するチャンスがやってくるのが、魅力なのではないでしょうか。増え、顔ぶれ(学年、男女)も多様になっていきます。幅広く友だちをつくり、関わりを深めることは、子どもたちやその学校や地域での生活の中にも生かされることだと思います。氣にかきた、駆け合う仲間になることはい/う。だから、敵の子では、大と遊び、関わることを大切にしていきます。「入れて」と言う子がみんな入って、みんなが楽しみ活

10月(水)にリリダー会議を行いました。各大臣(係)の報告や、固(こ)たこととほい合う
中で、1年生が話を聞(き)くのがアツい。話(わ)の最(も)中(ちゆう)にお茶を飲(の)みたり、荷物
を落(お)する2年生がいて、困(こ)る。という悩みがあります。確かに間違(まちが)てはおらず、
そんな様子が見られる日もあります。ただ、その報告を聞(き)くと違和感(ごわかん)を感じました。
アツい、たり、よき事(こと)として、子(こ)たちは、むしろ高学年(こうがくねん)の肩(かた)や、堂(どう)々と自立(りっぴ)
つのに、それと違(ちが)いなやつにからず。なぜ?と聞(き)うと、上級生(じょうきゅうせい)には勝(か)てず、ま
ん」と答(こた)えられました。嘘(うそ)のない、素直(すじく)な気持ちだと思(おも)います。ですが、不平等(ふびんどう)がま
る通(と)る集団(しゅうだん)で、ほくほくはあります。ゲームなどにゲームとさせる数気(かずけ)でまなげれば、
強(つよ)い力を食(く)して、道(みち)でずから、よく分(わ)かると思(おも)います。「敵(たか)いふ」という気持ち(きもち)は、
上級生(じょうきゅうせい)も、かつ通(と)って、道(みち)でずから、よく分(わ)かると思(おも)います。いれど、事の良(よ)い思(おも)いも
分(わ)かると思(おも)います。下級生(じょうきゅうせい)に、流(なが)れさせることをしないのはもちろん、人に集(あ)まる
安心(あんしん)も与(あた)えられるリリダーで、ほしいと思(おも)います。今まで出(で)会(あ)った、優(よ)い、上級生(じょうきゅうせい)、
頼(たの)もい、リリダーは?と聞(き)いて、誰(だれ)の顔(かお)が浮か(う)びましたか?先輩(せんぱい)友(とも)だちの良(よ)いところを
たくさん吸(あ)け、自(みづか)身の持(も)ち味(あじ)に、して下さい。そして、優(よ)い、頼(たの)もい、リリダーは?
と聞(き)いた、下級生(じょうきゅうせい)が、あんなの、名前(な)を、思(おも)い、出(で)して、くれれば、素直(すじく)に、いいと思(おも)い
ます。

平福

5年生は、インキングを練習し、
かみ組によって偶木着組の
におまわりがけをし、中止しま
す。他校と交流します。

6年生は、インキングにて
各々の希望がかなひ、高
日誌を交更します。後日連絡
します。

10/9(金) 実行委員会 19:00

役員会 19:30

27(土) 藤水小・授業所観-"バザ"

その後保育
一、二歳

日^ひが早^{はや}ま^まて^てま^まじ^じに^にの^のて^て
10%^{10%}(^{10%}月^{10%})^{10%}から16:45^{16:45}歩き^{歩き}帰^帰り^り

おまかせにいたします

お迎え(17:15まで無料)延長
保育(18:30まで)は変わらな

第4章 郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する 低学年児童の体力と異年齢交流による遊びに関する報告

石川 拓次・渋谷 郁子

キーワード：体力 遊び 異年齢交流

はじめに

放課後児童クラブとは、労働などの事情により昼間保護者が家庭にいない小学生の児童に対し、放課後や長期休暇中、保護者に代わって保育を行う場である。

設置の歴史的背景としては、1950年ごろから東京や大阪の大都市圏において、働きながらの子育てを実現させることを目的にその設置活動が始まった。1962年には新聞紙上に用いられ、その存在感は増していく。しかし、その制度化については、幾たびもの請願にもかかわらず、長い年月がかかり、ようやく1997年6月の児童福祉法の改正により、厚生労働省管轄の「放課後児童健全育成事業」として、法律の中に位置付けられた。また、2007年3月には、「放課後子どもプラン」で文科省と厚労省で行っていた施策を一本化・連携化された。

放課後児童クラブの特徴の1つに、異年齢交流があげられる。放課後児童クラブは、小学校1年生から6年生まで（地域によっては学年の制限もある）の児童が放課後をともに過ごす場であるため、通常の学校教育にみられる横割りの関係よりも縦割りの関係が強くなる。また、現代の家族は、核家族化が進み、合計特殊出生率も1.37（平成22年）¹⁾と少子化の傾向は止まらず、一人っ子の割合も高くなっていることを考えると、小学校時における日常の生活で異年齢交流が行われることは少なくなっている。

一方、持永は、放課後児童クラブの異年齢交流について、子どもの要求や必要によって生まれた集団ではなく、大人たちの必要や要求によって作られたものであると述べている²⁾。そのため、それぞれの放課後児童クラブでは、年齢が異なるという子ども達の実を直視し、子ども相互に生じる葛藤や矛盾を教育的な行為へ引き上げるために努力を続けてきた。そこから、「伝えあい、教えあい、学びあう」という、異年齢の子どもたちが持つ教育力を発見してきたと述べられている³⁾。これらのことから、放課後児童クラブにおいて、頻繁に異年齢交流が行われていることは、子どもの成長過程になんらかの影響を与えるものと考えられる。

一方、近年、子どもの体力低下が問題になっている。時間、仲間、場所の不足により、外遊びや身体を動かす体験が減少していることが、体力・運動能力の低下の原因として考えられている。

昨年度、放課後児童クラブの参与観察の調査をしていく中で、遊びの中での異年齢交流が子どもも体力に大きな影響を与えているのではないかとこの着想にいたった。つまり、高学年が低学年の児童と一緒に遊ぶことにより、高学年が低学年に体力的なことだけではなく、技術的

なことや規範的なことを教え、また、低学年は高学年に追いつきたいという意識が芽生えることにより、体力・運動能力の向上がみられるのではないかと考えたのである。

そこで、今回、放課後児童クラブにおける低学年児童の体力と異年齢交流による遊びに関する調査を行うこととした。

1. 郡山地区児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱについて

郡山地区放課後児童クラブサンキッズ（以下、サンキッズと記す）の概要について、表1に示した。サンキッズⅠは、平成12年に設立され、今年度で設立12年目である。所在地は、鈴鹿市郡山町、郡山小学校近くにある学校外施設である。在籍児童数の増加により、平成21年にサンキッズⅡが設立され、現在は、同じ敷地内にサンキッズⅠ・Ⅱの2クラブある。サンキッズの運営は、公設民営であり、保護者、ボランティア、地域の方々および指導員から構成させる運営委員会によってされている。年3回運営委員会および年1回の総会を開き、サンキッズの運営方針を決めている。本年度の在籍児童数は、1年生～3年生が71名、4年生～6年生が61名の132名である。2クラブ合わせて10名の指導員がおり、ローテーションで1日6～7人で運営している。指導員は、全員女性で、年齢層は20歳代から50歳代である。保育士の経験者などがある。長期休暇中は、学生のアルバイトを雇う。本年度は4名の学生（内1名は4月から）が夏期休暇中のアルバイトとして勤務した。設備・備品は、生活ルーム2室、指導員室、調理場、トイレ、専用グラウンド、砂場、机、個人用ロッカー、テレビ、エアコン、ボードゲーム（将棋・オセロ・人生ゲームなど）、漫画、本、ブロック、バスケットゴール、サッカーゴール、卓球台がある。

表1. 放課後児童クラブサンキッズの概要

クラブ名	郡山地区放課後児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱ			
運営主体	公設民営（運営委員会による）			
開設日	Ⅰ：平成12年4月1日		Ⅱ：平成21年4月1日	
設置場所	鈴鹿市郡山町（小学校外専用施設）			
児童数	132人			
	1年～3年：71名		4年～6年：61名	
指導員数	10人			
設備	部屋（2室） グラウンド テレビ 漫画	指導員室 砂場 エアコン 本	調理場 机 ボードゲーム ブロック	トイレ 個人ロッカー （将棋・オセロ等） 卓球台
	バスケットゴール	サッカーゴール		

2. 研究方法

2・1. 体力測定

2・1・1. 調査対象

対象は、三重県鈴鹿市にある放課後児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに在籍する小学校1・2年生の男女39名であった。対象の身体特性を表1に示す。放課後児童クラブに研究の概要

および方法について口頭および文書により説明を行い、指導員、保護者および地域の代表から構成される運営委員会の承認を得たのち、対象となる児童の保護者あてに文書を配布し、研究協力についての承諾を得た。

表 2. 身体特性

		N	年齢 (才)	身長 (cm)	体重 (kg)	ローレル指数 (kg/cm ³)
異年齢	交流群	24	6.5 ± 0.5	118.5 ± 5.9	21.8 ± 3.2	131.3 ± 12.9
	非交流群	15	6.7 ± 0.5	123.5 ± 6.2	23.9 ± 4.7	125.9 ± 13.9
遊び 種類	多種類	17	6.7 ± 0.4	121.6 ± 4.7	22.5 ± 2.5	125.7 ± 14.5
	少種類	22	6.4 ± 0.5	119.5 ± 7.5	22.7 ± 4.8	131.9 ± 12.1
プール 参加	参加群	18	6.6 ± 0.5	121.1 ± 7.8	24.3 ± 5.2	131.3 ± 14.8
	非参加群	19	6.6 ± 0.5	120.1 ± 5.2	21.9 ± 2.8	126.1 ± 10.7
	全体	39	6.6 ± 0.5	120.4 ± 6.5	23.4 ± 4.3	129.2 ± 13.4

2・1・2. 研究プロトコール

研究プロトコールを図 1 に示す。7 月 24 日に 1 回目（以下、調査前と記す）の体格・体力測定および質問紙調査を行った。その後、夏休み中に遊びを中心とした参与観察を行った。また、この時期は、地域の小学校のプール開放（全 9 回）が行われており、その参加回数の記録も調査に使用した。9 月 20 日に 2 回目（以下、調査中と記す）の体格・体力測定を行った。そして、11 月 20 日に 3 回目（以下、調査後と記す）の体格・体力測定を行った。

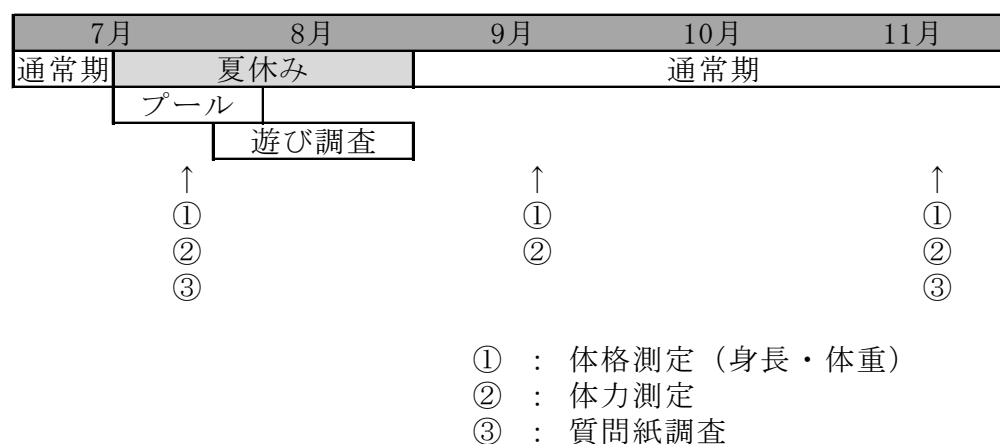


図 1. 研究プロトコール

2・1・3. 調査・測定項目

2・1・3・1. 体格測定

対象の身長および体重を測定した。身長は専用の身長計にて、また体重は、体重体脂肪計（TANITA 製）により計測した。また計測した身長および体重よりローレル指数を算出した。

2・1・3・2. 体力測定

2・1・3・2・1. 20m 走

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにて 20m 走を行った。スタートは、スタン

ディングスタートの要領で行った。また、スタートの合図は、「位置について」、「用意」の後、音または声を発すると同時に旗を下から上へ振り上げることによって行った。記録は、スタートの合図からゴールライン上に胴が到達するまでに要した時間をストップウォッチにて計測した。

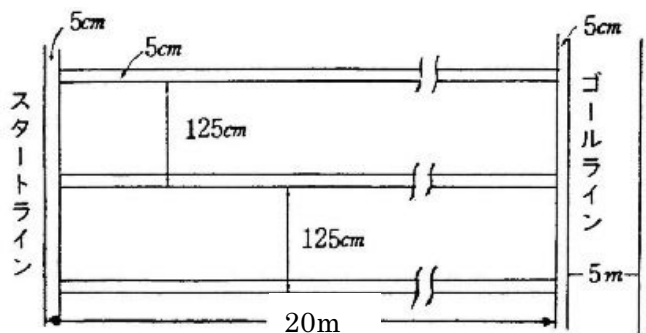


図 2. 20m 走

記録は 1 / 10 秒単位とし、1 / 10 秒未満は切り上げた。

2・1・3・2・2. ドッジボール投げ

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにてドッジボール投げを行った。今回は、放課後児童クラブにて盛んに行われている遊びの中にドッジボールあり、普段投げる機会が多いことから測定項目として採用した。投球は、投球線の 2 m 後方より行う。投球中または投球後、投球線を踏んだり、越したりして線外に出てはならないように指示をした。記録は、ボールが落下した地点までの距離を、あらかじめ 1 m 間隔に描かれた線によって計測した。記録はメートル単位とし、メートル未満は切り捨てた。

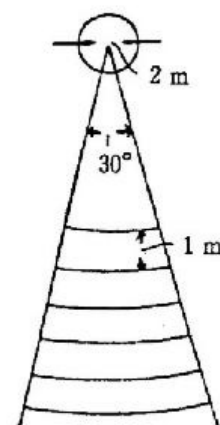


図 3. ドッジボール投げ

2・1・3・2・3. 立ち幅跳び

放課後児童クラブサンキッズの専用のグラウンドにある砂場にて立ち幅跳びを行った。測定は、両足を軽く開いて、つま先が踏み切り線の前端にそろうように立たせ、両足で同時に踏み切って前方へとぶように指示をした。記録は、身体が砂場に触れた位置のうち、最も踏み切り線に近い位置と、踏み切り前の両足の中央位置

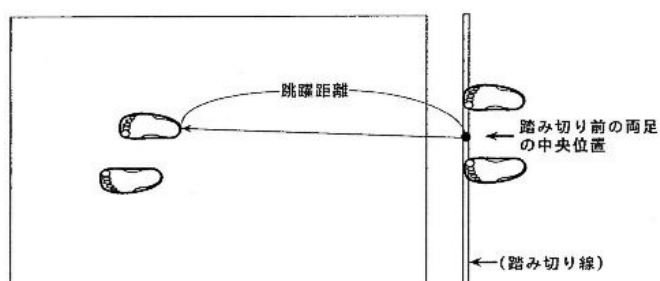


図 4. 立ち幅跳び

央の位置とを結ぶ直線の距離を計測した。記録はセンチメートル単位とし、センチメートル未満は切り捨てた。

2・2. 遊びについての参与観察

夏休み期間中、遊びについての参与観察を行った。参与観察とは、定性的な社会調査法の一つであり、その社会のメンバーの一員として生活しながら、対象社会を直接観察し、その社会生活についての聞き取りなどを行うものである。

参与観察では、図 5 に示す観察シートを使用し、調査を行った。調査内容は、月日、観察時間、天気、気温、室内・室外、遊びの種類、人数、性別、学年、異年齢交流の有無についてであった。観察日数は、全 16 日間 19 回であった。

2・3. 異年齢交流と遊びに関する質問紙調査

異年齢交流と遊びに関する質問紙調査を図に示す。質問紙調査は、1回目と3回目の体格・体力測定時に自記式にて行った。調査内容は、外遊びは好きか？、異年齢交流の有無、外遊びの種類、室内遊びの種類、異学年と遊ぶ遊びの種類（外遊び・室内遊び）であった。質問紙調査の結果から、異年齢交流を盛んに行う群（交流群）と異年齢交流をあまり行わない群（非交流群）に分類し、比較検討を行った。また、異年齢と遊びの種類が多い群（多種類群）と遊びの種類の少ない群（少種類群）に分類し、比較検討を行った。そして、夏休み期間中における、地域のプール開放の参加日数について調査し、参加日数の多い群（参加群）と参加日数の少ない群（非参加群）に分類し、比較検討を行った。

放課後児童クラブ研究2012

参与観察シート

平成 24 年 8 月 日 () 時間 時 分 天気 気温 ℃

指導員室
入口
入口
トイレ
門

砂場

バスケットゴール

特記事項 _____

記録者 _____

図5. 参与観察シート

運動・遊びについての調査		学年	名前
放課後児童クラブサンキッズでの遊びについてお聞かせください。			
①外で遊ぶのは好きですか？あてはまる答えに○印をつけてください。			
1. とっても好き 2. まあまあ好き 3. あんまり好きではない 4. ぜんぜん好きでない			
②サンキッズでの外遊びは、何をすることが多いですか？○印をつけてください。（いくつ○印をつけても良いです）			
1. ドッジボール 2. サッカー 3. バスケットボール 4. 野球 5. キックベース			
6. 鬼ごっこ 7. 砂場遊び 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）			
③サンキッズでの室内遊びは、何をすることが多いですか？○印をつけてください。（いくつ○印をつけても良いです）			
1. お絵かき（ぬり絵） 2. カードゲーム（トランプ） 3. 携帯ゲーム（DSなど）			
4. ボードゲーム（将棋・オセロ） 5. ブロック 6. 本（漫画）読み			
7. テレビ（ビデオ）をみる 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）			
④サンキッズで遊ぶとき、3年生から6年生のお兄さん、お姉さんとよく遊びますか？あてはまる答えに○印をつけてください。			
1. よく遊ぶ 2. まあまあよく遊ぶ 3. あんまり遊ばない 4. ぜんぜん遊ばない			
⑤3年生から6年生のお兄さん、お姉さんと遊ぶとき、どんな遊びをしますか？			
《外遊び》			
1. ドッジボール 2. サッカー 3. バスケットボール 4. 野球 5. キックベース			
6. 鬼ごっこ 7. 砂場遊び 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）			
《室内遊び》			
1. お絵かき（ぬり絵） 2. カードゲーム（トランプ） 3. 携帯ゲーム（DSなど）			
4. ボードゲーム（将棋・オセロ） 5. ブロック 6. 本（漫画）読み			
7. テレビ（ビデオ）をみる 8. ごっこ遊び 9. その他（ ）			
これでおわりです。ありがとうございました。			

図6. 遊びと異年齢交流に関する質問紙調査用紙

3. 結果

3・1. 体力測定結果

3・1・1. 全体の結果

3・1・1・1. 体重測定

全体の体重測定の結果を男女別・学年別にて表3に示した。7月測定において、1年生男児は、 $20.9 \pm 2.6\text{kg}$ 、1年生女児は、 $20.6 \pm 3.2\text{kg}$ であり、2年生男児は、 $24.9 \pm 2.8\text{kg}$ 、全体の

平均は $22.7 \pm 5.5\text{kg}$ であった。9 月測定において、1 年生男児は、 $22.1 \pm 2.4\text{kg}$ 、1 年生女児は、 $21.5 \pm 3.3\text{kg}$ であり、2 年生男児は、 $25.8 \pm 5.2\text{kg}$ 、2 年生女児は、 $23.2 \pm 3.9\text{kg}$ であり、全体の平均は、 $23.6 \pm 5.8\text{kg}$ であった。11 月測定において、1 年生男児は、 $22.3 \pm 2.1\text{kg}$ 、1 年生女児は、 $21.8 \pm 3.3\text{kg}$ 、2 年生男児は、 $25.9 \pm 3.9\text{kg}$ 、2 年生女児は、 $24.5 \pm 3.9\text{kg}$ であり、全体の平均は、 $24.0 \pm 5.6\text{kg}$ であった。

表 3. 体重

学年	性別	7月測定 (kg)		9月測定 (kg)		11月測定 (kg)	
1 年生	男児	20.9	± 2.6	22.1	± 2.4	22.3	± 2.1
	女児	20.6	± 3.2	21.5	± 3.3	21.8	± 3.3
2 年生	男児	24.9	± 4.5	25.8	± 5.2	25.9	± 4.4
	女児	22.8	± 3.6	23.2	± 3.9	24.5	± 3.9
全体		22.7	± 5.5	23.6	± 5.8	24.0	± 5.6

3・1・1・2. 20m 走

全体の 20m 走の結果を男女別・学年別にて表 4 に示した。7 月測定において、1 年生男児は、 $4.9 \pm 0.2 \text{ sec}$ 、1 年生女児は、 $5.2 \pm 0.2\text{sec}$ であり、2 年生男児は、 $4.8 \pm 0.2\text{sec}$ 、2 年生女児は、 $5.1 \pm 0.3\text{sec}$ であり、全体の平均は、 $5.0 \pm 0.9\text{sec}$ であった。9 月測定において、1 年生男児は、 $4.8 \pm 0.5\text{sec}$ 、1 年生女児は、 $5.6 \pm 0.7\text{sec}$ であり、2 年生男児は、 $5.0 \pm 0.4\text{sec}$ 、2 年生女児は、 $4.9 \pm 0.6\text{sec}$ であり、全体の平均は、 $5.1 \pm 1.0\text{sec}$ あった。11 月測定において、1 年生男児は、 $5.0 \pm 0.3\text{sec}$ 、1 年生女児は、 $5.2 \pm 0.4\text{sec}$ 、1 年生男児は、 $4.8 \pm 0.2\text{sec}$ 、2 年生女児は、 $5.0 \pm 0.2\text{sec}$ であり、全体の平均は、 $5.0 \pm 0.9\text{sec}$ であった。

表 4. 20m 走

学年	性別	7月測定 (sec)		9月測定 (sec)		11月測定 (sec)	
1 年生	男児	4.9	± 0.2	4.8	± 0.5	5.0	± 0.3
	女児	5.2	± 0.2	5.6	± 0.7	5.2	± 0.4
2 年生	男児	4.8	± 0.2	5.0	± 0.4	4.8	± 0.2
	女児	5.1	± 0.3	4.9	± 0.6	5.0	± 0.2
全体		5.0	± 0.9	5.1	± 1.0	5.0	± 0.9

3・1・1・3. ドッジボール投げ

全体のドッジボール投げの結果を男女別・学年別にて表 5 に示した。7 月測定において、1 年生男児は、 $4.4 \pm 1.8\text{m}$ 、1 年生女児は、 $4.2 \pm 1.0\text{m}$ であり、2 年生男児は、 $9.7 \pm 2.7\text{m}$ 、2 年生女児は、 $5.3 \pm 1.8\text{m}$ であり、全体の平均は、 $6.5 \pm 3.3\text{m}$ であった。9 月測定において、1 年生男児は、 $5.3 \pm 1.3\text{m}$ 、1 年生女児は、 $4.8 \pm 1.1\text{m}$ であり、2 年生男児は、 $9.9 \pm 2.4\text{m}$ 、2 年生女児は、 $5.1 \pm 1.5\text{m}$ であり、全体の平均は、 $6.9 \pm 3.2\text{m}$ であった。11 月測定において、1 年生男児は、 $5.6 \pm 2.1\text{m}$ 、1 年生女児は、 $5.1 \pm 1.5\text{m}$ 、2 年生男児は、 $9.8 \pm 3.0\text{m}$ 、2 年生女児は、 $6.6 \pm 1.5 \text{ m}$ であり、全体の平均は、 $7.3 \pm 3.2\text{m}$ であった。

表 5. ドッジボール投げ

学年	性別	7月測定 (m)		9月測定 (m)		11月測定 (m)	
1年生	男児	4.4 ±	1.8	5.3 ±	1.3	5.6 ±	2.1
	女児	4.2 ±	1.0	4.8 ±	1.1	5.1 ±	1.5
2年生	男児	9.7 ±	2.7	9.9 ±	2.4	9.8 ±	3.0
	女児	5.3 ±	1.8	5.1 ±	1.5	6.6 ±	1.5
全体		6.5 ±	3.3	6.9 ±	3.2	7.3 ±	3.2

3・1・1・4. 立ち幅跳び

全体の立ち幅跳び体重測定の結果を男女別・学年別にて表 6 に示した。7 月測定において、1 年生男児は、 $113.8 \pm 14.0\text{cm}$ 、1 年生女児は、 $114.0 \pm 12.7\text{cm}$ であり、2 年生男児は、 $130.2 \pm 13.8\text{cm}$ 、2 年生女児は、 $128.8 \pm 17.9\text{cm}$ であり、全体の平均は、 $123.6 \pm 26.1\text{cm}$ であった。9 月測定において、1 年生男児は、 $95.7 \pm 17.6\text{cm}$ 、1 年生女児は、 $115.8 \pm 11.1\text{cm}$ であり、2 年生男児は、 $113.3 \pm 17.8\text{cm}$ 、2 年生女児は、 $124.1 \pm 24.4\text{cm}$ であり、全体の平均は、 $115.0 \pm 27.1\text{cm}$ であった。11 月測定において、1 年生男児は、 $115.2 \pm 13.9\text{cm}$ 、1 年生女児は、 $114.4 \pm 17.1\text{cm}$ 、2 年生男児は、 $125.1 \pm 16.4\text{cm}$ 、2 年生女児は、 $129.9 \pm 21.4\text{cm}$ であり、全体の平均は、 $122.0 \pm 26.9\text{cm}$ であった。

表 6. 立ち幅跳び

学年	性別	7月測定 (cm)		9月測定 (cm)		11月測定 (cm)	
1年生	男児	113.8 ±	14.0	95.7 ±	17.6	115.2 ±	13.9
	女児	114.0 ±	12.7	115.8 ±	11.1	114.4 ±	17.1
2年生	男児	130.2 ±	13.8	113.3 ±	17.8	125.1 ±	16.4
	女児	128.8 ±	17.9	124.1 ±	24.4	129.9 ±	21.4
全体		123.6 ±	26.1	115.0 ±	27.1	122.0 ±	26.9

3・1・2. 異年齢交流による比較

3・1・2・1. 20m 走

20m走における異年齢交流での比較の結果を表 7-1・2 に示した。交流群について、調査前 5.0 ± 0.3 秒、調査中 5.1 ± 0.6 秒、そして、調査後 5.0 ± 0.3 秒であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前 5.0 ± 0.4 秒、調査中 5.1 ± 0.6 秒、そして、調査後 5.0 ± 0.3 秒であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有意差はみられなかった。

3・1・2・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおける異年齢交流での比較の結果を表 7-1・2 に示した。交流群について、調査前 $6.5 \pm 3.3\text{m}$ 、調査中 $6.6 \pm 3.0\text{m}$ 、そして、調査後 $7.5 \pm 3.2\text{m}$ であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前 $6.0 \pm 2.9\text{m}$ 、調査中 $6.6 \pm 3.2\text{m}$ 、そして、調査後 $7.0 \pm 2.7\text{m}$ であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有

意差はみられなかった。

3・1・2・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおける異年齢交流での比較の結果を表7-1・2に示した。交流群について、調査前 124.9±16.1cm、調査中 117.0±21.6cm、そして、調査後 122.6±17.1cm であり、有意差はみられなかった。非交流群について、調査前 122.1±14.6cm、調査中 114.1±16.7cm、そして、調査後 120.6±19.1cm であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、交流群と非交流群の変化率に有意差はみられなかった。

表7-1. 異年齢交流による体力測定結果（群内比較）

	測定項目	測定値			有意差		
		調査前	調査中	調査後	前→中	前→後	中→後
交流群	20m走	5.0 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	5.0 ± 0.3 秒	n. s.	n. s.	n. s.
	ドッジボール投げ	6.5 ± 3.3 m	6.6 ± 3.0 m	7.5 ± 3.2 m	n. s.	n. s.	n. s.
	立ち幅跳び	124.9 ± 16.1 cm	117.0 ± 21.6 cm	122.6 ± 17.1 cm	n. s.	n. s.	n. s.
非交流群	20m走	5.0 ± 0.4 秒	5.1 ± 0.6 秒	5.0 ± 0.3 秒	n. s.	n. s.	n. s.
	ドッジボール投げ	6.0 ± 2.9 m	6.6 ± 3.2 m	7.0 ± 2.7 m	n. s.	n. s.	n. s.
	立ち幅跳び	122.1 ± 14.6 cm	114.1 ± 16.7 cm	120.6 ± 19.1 cm	n. s.	n. s.	n. s.

表7-2. 異年齢交流による体力測定結果（群間比較）

	群	変化率			有意差		
		前→中	前→後	中→後	前→中	前→後	中→後
20m走	交流群	1.2 ± 0.1 %	0.2 ± 0.0 %	-3.0 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	2.0 ± 0.1 %	0.7 ± 0.1 %	-1.7 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
ドッジ	交流群	2.2 ± 0.3 %	9.5 ± 0.2 %	5.8 ± 0.3 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	3.6 ± 0.3 %	12.4 ± 0.2 %	-4.3 ± 0.3 %	n. s.	n. s.	n. s.
立幅跳	交流群	-9.1 ± 0.2 %	-2.8 ± 0.1 %	4.5 ± 0.1 %	n. s.	n. s.	n. s.
	非交流群	-8.5 ± 0.2 %	-3.0 ± 0.1 %	5.6 ± 0.2 %	n. s.	n. s.	n. s.

3・1・3. 異年齢交流の遊びの種類による比較

3・1・3・1. 20m 走

20m走における異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表8に示した。群間比較において、多種類群 4.9±0.2 秒、非参加群 5.1±0.4 秒であり、有意差はみられなかった。

3・1・3・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおける異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表8に示した。群間比較において、多種類群 7.0±3.5m、非参加群 5.7±2.8m であり、有意差はみられなかった。

3・1・3・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおける異年齢交流の遊びの種類による比較の結果を表8に示した。群間比較において、多種類群 129.8±16.1cm、非参加群 119.0±13.4cm であり、有意に多種類群の方が記録が高かった（ $p<0.05$ ）。

表 8. 異年齢交流における遊びの種類による体力測定結果 (群間比較)

	群	測定値	有意差
20m走	多種類群	4.9 ± 0.2 秒	n. s.
	少種類群	5.1 ± 0.4 秒	
ドッジ	多種類群	7.0 ± 3.5 m	n. s.
	少種類群	5.7 ± 2.8 m	
立ち幅跳	多種類群	129.8 ± 16.1 cm	*
	少種類群	119.0 ± 13.4 cm	

* : $p < 0.05$

3・1・4. プール参加回数による比較

3・1・4・1. 20m 走

20m走におけるプール参加回数での比較の結果を表 9-1・2 に示した。参加群について、調査前 5.1 ± 0.3 秒、調査中 5.1 ± 0.6 秒であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前 5.0 ± 0.3 秒、調査中 5.1 ± 0.6 秒であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

3・1・4・2. ドッジボール投げ

ドッジボール投げにおけるプール参加回数での比較の結果を表 9-1・2 に示した。参加群について、調査前 5.9 ± 3.0 m、調査中 6.6 ± 2.8 m であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前 6.6 ± 3.4 m、調査中 6.6 ± 3.3 m であり、有意差はみられなかった。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

3・1・4・3. 立ち幅跳び

立ち幅跳びにおけるプール参加回数での比較の結果を表 9-1・2 に示した。参加群について、調査前 126.4 ± 17.1 cm、調査中 121.9 ± 18.7 cm であり、有意差はみられなかった。非参加群について、調査前 122.0 ± 17.1 cm、調査中 110.5 ± 19.4 cm であり、有意に記録が低下した ($p < 0.05$)。群間比較においては、参加群と非参加群の変化率に有意差はみられなかった。

表 9-1. プール参加回数による体力測定結果 (群内比較)

	項目	測定値		有意差
		調査前	調査中	
参加群	20m走	5.1 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	n. s.
	ドッジボール投げ	5.9 ± 3.0 m	6.6 ± 2.8 m	n. s.
	立ち幅跳び	126.4 ± 12.9 cm	121.9 ± 18.7 cm	n. s.
非参加群	20m走	5.0 ± 0.3 秒	5.1 ± 0.6 秒	n. s.
	ドッジボール投げ	6.6 ± 3.4 m	6.6 ± 3.3 m	n. s.
	立ち幅跳び	122.0 ± 17.1 cm	110.5 ± 19.4 cm	*

* : $p < 0.05$

表9-2. プール参加回数による体力測定結果（群間比較）

	群	変化率 前→中	有意差
20m走	参加群	0.2 ± 0.1 %	n. s.
	非参加群	2.6 ± 0.1 %	n. s.
ドッジ	参加群	9.1 ± 0.3 %	n. s.
	非参加群	-3.3 ± 0.3 %	n. s.
立幅跳	参加群	-5.1 ± 0.1 %	n. s.
	非参加群	-12.3 ± 0.2 %	n. s.

3・2. 遊びの種類と異年齢交流

3・2・1. 遊びの種類について

3・2・1・1. 遊びの種類

遊びの種類の結果を表10に示した。今回の参与観察では、室外遊び3種類29件、室外遊び6種類84件が観察された。室外遊びは、サッカー6件、バスケットボール3件、バレーボール3件、フラフープ2件、砂場遊び2件などが観察された。室内遊びは、カードゲーム25件、シール交換17件、TV視聴5件、ボードゲーム4件、ままごと4件などが観察された。

表10. 遊びの種類

表10. 遊びの種類			
	遊びの種類	遊びの内容	件数
室外遊び	スポーツ・運動	サッカー	6
		バスケットボール	3
		バレーボール	3
		ボールあて	2
		ドッジボール	2
		シュートの練習	1
		ボール投げ	1
		ハンドボール	1
	室外遊具	フラフープ	2
		なわとび	1
		ひものひっぱりあい	1
		大なわ	1
	その他	砂場遊び	2
虫取り		1	
おしゃべり		1	
		不明	1
室外遊び 合計			29
		</	

3・2・1・2. 性別

性別による遊びの種類についての結果を表11に示した。室外は、男児はサッカーやバスケットボールなどのスポーツ系の遊びが多く観察された。女児は、バレーボールやバスケットボールなどのスポーツ系およびなわとびやフラフープの遊具での遊びが多く観察された。室内は、男児はカードゲームが多く観察された。女児は、シール交換、ままごとなど

のごっこ遊びが多く観察された。男女混合で行う遊びも複数観察され、室外ではサッカー、バレーボール、ドッジボールのスポーツ系、室内では、TV視聴、UNO、ジェンガでみられた。

表11. 性別による遊びの種類

	遊びの種類	遊びの内容	男児	女児	混合	不明	総計	
室 外	スポーツ・運動	サッカー	5		1		6	
		バスケットボール	2	1			3	
		バレーボール		2	1		3	
		ボールあて	2				2	
		ドッジボール	1		1		2	
		シュートの練習	1				1	
		ボール投げ		1			1	
		ハンドボール		1			1	
	室外遊具	フラフープ		1	1		2	
		なわとび			1		1	
ひものひっぱりあい			1			1		
大なわ			1			1		
その他	砂場遊び	1		1		2		
	虫取り				1	1		
	おしゃべり		1			1		
	不明			1		1		
室外遊び 合計			12	9	7	1	29	
室 内	カードゲーム	カードゲーム	24	1			25	
		UNO	2		1		3	
		トランプ	1	1			2	
	ボードゲーム	ボードゲーム	2	2			4	
		将棋（将棋崩し）	1	1			2	
		ジェンガ			1		1	
	視聴覚	T V 視聴	1		3	1	5	
		漫画		1		1	2	
		読書			2		2	
		映画鑑賞			1		1	
	調理実習	調理実習			3		3	
	ごっこ遊び	おままごと		4			4	
		人形遊び		1			1	
	室内遊具	シール交換		17				17
		ブロック	2	1				3
		お絵かき		3				3
パズルゲーム			2				2	
折り紙			1				1	
塗り絵			1				1	
ドミノ			1				1	
手芸			1				1	
室内遊び 合計			33	38	11	2	84	
総計			45	47	18	3	113	

3・2・1・3. 異年齢遊び

異年齢交流の有無による遊びの種類についての結果を表12に示した。異年齢交流が行われていた遊びは、室外は、スポーツ・運動でサッカー3件、ドッジボール1件、ハンドボール1件

などであった。室内は、カードゲーム 11 件、シール交換 8 件、TV 視聴 3 件などであった。

表12. 異年齢交流の有無による遊びの種類

	遊びの種類	遊びの内容	あり	なし	不明	総計
室 外	スポーツ・運動	サッカー	3	2	1	6
		バスケットボール		1	2	3
		バレーボール		2	1	3
		ボールあて	1		1	2
		ドッジボール	1		1	2
		シュートの練習			1	1
		ボール投げ		1		1
		ハンドボール	1			1
	室外遊具	フラフープ			2	2
		なわとび	1			1
		ひものひっぱりあい			1	1
		大なわ			1	1
室 内	その他	砂場遊び		1	1	2
		虫取り	1			1
		おしゃべり	1			1
		不明		1		1
	室外遊び 合計		9	8	11	29
	カードゲーム	カードゲーム	11	8	6	25
		UNO	2	1		3
		トランプ	1	1		2
	ボードゲーム	ボードゲーム	1	2	1	4
		将棋（将棋崩し）	2			2
		ジェンガ		1		1
	視聴覚	TV 視聴	3		2	5
		漫画			2	2
		読書	1	1		2
		映画鑑賞	1			1
	調理実習	調理実習		3		3
	ごっこ遊び	おままごと		3	1	4
		人形遊び			1	1
	その他	シール交換	8	1	8	17
		ブロック		1	2	3
		お絵かき		1	2	3
		パズルゲーム	1		1	2
		折り紙			1	1
		塗り絵			1	1
		ドミノ		1		1
		手芸	1			1
	室内遊び 合計		32	24	28	84
	総計		41	32	40	113

4. 考察

本調査において、4 ヶ月間の調査期間の中ですべての体力測定で大きな測定値の向上はみられなかった。体力測定の結果を詳細にみていくと、異年齢交流の参加および水泳の参加回数の比較では、すべての測定項目において、期間内で測定記録の向上はみられたものの、群内比較

および群間比較で有意差はみられなかった。一方、異年齢交流の遊びの種類での比較においては、すべての測定項目において異年齢交流の際に多くの遊びを行う児童の方が記録が高く、特に、立ち幅跳びにおいて有意差がみられた。このように本調査においては、体力の向上について、予想する結果とはならなかった。その理由として、本調査は、夏季休暇からその後 11 月後半までの期間で行われたが、特に、夏季休暇中においては、熱中症への対策として、屋外で遊ぶ時間を決め、屋外の遊びよりも室内の遊びを中心とし、身体活動は少なかったことが挙げられる。このことが、体力測定項目の記録の向上として表れなかった一因と考える。また、今回測定した項目の体力要素である、「走る」、「跳ぶ」、「投げる」を本調査の遊びの内容として考えると、参与観察によってみられた室外での遊びと水泳では、この体力要素を向上させるのに不十分であった可能性も考えられる。

近年、子どもの体力・運動能力の低下が問題になっている。武藤⁴⁾は、小中学生の体力・運動能力を 20 年前の同年代と比較し、走る力、投げる力、跳ぶ力、握力のいずれも、現在の児童生徒の方が低く、全体的な低下現象の中にあって、体力・運動能力の低下は、運動・スポーツをしない子どものほうがより大きいことも示されていると述べている。その理由として、時間、空間、そして、仲間の「3 間」の不足が指摘されている。しかし、昨年度からの調査を通して、放課後児童クラブにおいては、この「3 間」の問題が解消され、子どもたちが遊びに熱中する姿を見てきた。

まず、時間について考えると、川又⁵⁾は、放課後児童クラブを児童が放課後を過ごす「生活の場」として捉えている。児童は、放課後および長期休暇中の多くの時間を放課後児童クラブで過ごす。全国学童保育連絡協議会の調査によると、低学年の児童において、小学校で過ごす時間は、年間 1140 時間であり、一方、放課後児童クラブで過ごす時間は、年間 1650 時間であると報告している⁶⁾。つまり、低学年の児童は年間を通して、学校に行っているよりも明らかに多い時間を放課後児童クラブで過ごすこととなる。

次に空間、つまり、遊び場所の問題について考える。全国学童保育連絡協議会の調査によると、放課後児童クラブの設置場所について、全体の過半数である 51.8%が学校施設内であると報告している⁷⁾。福永らは、三重県内の放課後児童クラブの施設について調査した結果、学校施設内が 32%であったと報告している⁸⁾。学校内施設である場合、多くは学校の校庭を遊び場として使用している例は多い。また、今回調査の対象としたサンキッズⅠ・Ⅱは専用のグラウンドを備えており、外遊びをする環境は整っていた。

そして、最後に仲間について考える。1 年生から 6 年生までがいる放課後児童クラブにおいては日常的に遊びの場面でも、その他の生活の場面でも異年齢交流が行われている。本調査で行った夏季休暇中における遊びと異年齢交流の調査においても、約 36%の遊びで異年齢交流が行われていた。福永らは、異年齢交流の指導員の促しについて調査をし、大規模および中規模の放課後児童クラブにおいては、小規模の放課後児童クラブと比較して、指導員が異年齢交流を促すことが多いと報告している⁸⁾。しかし、本調査の対象であるサンキッズはⅠ・Ⅱを合わ

せて在籍児童が130名を超える大規模な放課後児童クラブであったが、指導員の方への聞き取り調査によると、指導員としてあまり異年齢交流を促すことはなく、自然な流れの中でグループが形成されると述べられている⁹⁾。つまり、それくらい自然な流れの中で異年齢交流が進められており、仲間の不足により、遊びの機会が減っているということもないと考えられる。以上のことから、放課後児童クラブにおいては、子どもたちが身体を動かす環境が整っていることが伺われる。

放課後児童クラブにおける遊びの位置づけについて、高橋¹⁰⁾は、保護者や指導員にとっては、「保育」や「教育」の場であっても、子どもにとっては「遊び」の場でなければならず、子どもは「遊び」を通して知育・徳育・体育を身につけ、それらを伸ばすと考え、放課後児童クラブは、そのような「遊び」の場を保障する場でなくてはならないと述べている。また、古城¹¹⁾は、放課後児童クラブにおける遊びの実践指導を通して、低学年児童の遊びはスポーツのように制度化・形式化された遊びと異なると報告している。つまり、放課後児童クラブにおける遊びは、子ども達の生活の一部であり、楽しく、充実した生活を送る一つの手段であると考えることができる。その中で、山崎¹²⁾や三河¹³⁾が示すように、異年齢の仲間が関わる生活の中で成長する子ども達の姿を目の当たりにするのである。低学年の児童は、上級生と一緒に遊ぶことによって、上級生を尊敬し、憧れの眼差しでみて、一歩でも近づきたいと思うようになり、上級生の児童は、低学年の児童と一緒に遊ぶことによって、情緒的な成長をみせることがある。また、日常的に外遊びを提供できる場としての放課後児童クラブの役割も重要であると考え。本調査の質問紙調査においても外遊びが好きかの問いに対して、すべての児童が「とても好き」もしくは「まあまあ好き」と回答している。放課後児童クラブという児童にとって日常生活の中に組み入れられた外遊びの経験は、運動・スポーツをする児童としない児童の二極化が進む現在において重要な役割を示すものであると考える。国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センターによると、青少年の自然体験について、昆虫を捕まえた経験、海や川での貝取りや魚釣りの経験、大きな木に登った経験、太陽が昇るところおよび沈むところを観た経験は平成10年と平成17年の比較において、平成17年の方がどの項目も「ほとんどない」の割合が増加していると報告している¹⁴⁾。このような自然体験を含めた外遊びを小学校低学年から日常生活の中で習慣づけることは、運動嫌いをなくす上での一つの方策となると考える。また、体力と生活習慣の関係においても、朝食を摂取している群は20mシャトルランの結果が摂取していない群と比べて高い傾向にあると報告されていること¹⁵⁾からも、正しい生活習慣の確立は、体力面の充実からも必要であると考え。一方で、スポーツを過剰に行い、いわゆる「使い過ぎ症候群」とよばれる、スポーツ障害を患う児童も後を絶たない¹⁶⁾。そこで、小学校低学年においては、一つの運動・スポーツに固執するのではなく、さまざまな外遊び（運動・スポーツ）を行うことが、そのような障害の予防にも効果があると考え。放課後児童クラブを生活の場として考えた時、正しい生活習慣の確立、仲間づくり、そして、さまざまな外遊び（運動・スポーツ）を経験する場としても大きく関わっていくことが可能であり、放課後

児童クラブで出来ることの可能性は大きく広がっていくものとする。

おわりに

以上のように、4 ヶ月間の調査期間で大きな体力の向上はみられなかったが、時間・空間・仲間が揃った放課後児童クラブという環境では、異年齢交流での遊びが行われており、小学校低学年の時期にさまざまな外遊びを経験し、習慣化することは、その後の心身の成長に大きな影響を与えるものと考えられる。放課後児童クラブを生活の場として考えた時、正しい生活習慣の確立、仲間づくり、そして、さまざまな外遊びの経験に関わっていくことが可能であり、放課後児童クラブで出来ることの可能性は大きく広がっていくものとする。

引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 22 年（2010）人口動態統計（確定数）の概況，
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei10/dl/09_h5.pdf, 2011
- 2) 持永正夫：我が子が歩んだ異年齢集団 特集／生活づくりと異年齢集団，日本の学童保育，90，24-27，1983
- 3) 日本の学童はいく編集部：学童保育の異年齢集団とは―そのたしかめのために― 特集／学童保育の異年齢集団を学ぶ，78，8-9，1982
- 4) 武藤芳照：第 1 章 児童・生徒の体力・運動能力およびスポーツ傷害の実態，1. 児童・生徒の生活習慣の現状と体力・運動能力の実態，学校における運動器検診ハンドブック 発育期のスポーツ傷害の予防，「運動器の 10 年」日本委員会編，1-8，東京，2007
- 5) 川又俊則：放課後児童クラブと学校教育に関する一考察，鈴鹿短期大学紀要，32，51-70，2012
- 6) 全国学童保育連絡協議会：学童保育の実施状況調査，2011
- 7) 全国学童保育連絡協議会：学童保育の実施状況調査（2012 年 5 月 1 日現在），
http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/2012kasyosuu_.pdf, 2012
- 8) 福永峰子，永石喜代子：第 2 章 放課後児童クラブにおけるおやつと生活活動に関する調査，「学童保育の『異年齢交流』と『食育』に関する研究」報告書，21-53，2012
- 9) 石川拓次：第 3 章 放課後児童クラブにおける異学年交流と食育に関する研究―三重県内の放課後児童クラブの聞き取り調査と参与観察を通して―，「学童保育の『異年齢交流』と『食育』に関する研究」報告書，54-69，2012
- 10) 高橋ひとみ：学童保育と「子どもの遊び」に関する一考察，桃山学院大学人間科学，31，21-40，2006
- 11) 古城健一，川内敬介：学童保育クラブにおける遊びの研究―運動遊びを中心として，大分大学教育福祉科学部研究紀要，30(1)，71-86，2008
- 12) 山崎素裕：三年生ってすごいなあ―児童館内の学童クラブで過ごす子どもたち 特集／学童保育―異年齢の子どもたち，日本の学童はいく，415，6-9，2010

- 13) 三河孝子：異年齢集団のなかでよみがえる子どもたち 特集／学童保育の異年齢集団を学ぶ，日本の学童はいく，78，28-30，1982
- 14) 国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センター：青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書，2006
- 15) 文部科学省：児童・生徒の体力・運動能力，体力・運動能力の概要，2006
- 16) 松瀬学：「スポーツにとかく痛みはつきものだ」をなくすために，学校における運動器検診ハンドブック 発育期のスポーツ傷害の予防，「運動器の10年」日本委員会編，68-69，東京，2007

第5章 郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱに所属する 低学年児童の遊びの特徴と協調運動の発達

渋谷 郁子・石川 拓次

1. 問題の背景と目的

しなやかに身体を動かし、目当ての行為を確実に達成する人を見たとき、私たちはその動作を「器用だ」「巧みだ」などと表現する。このような動作は、適切な筋を、適切な時刻に、適切な強さで活動させることによって実現される。協調運動とよばれるこうした運動は、箸を使う、靴ひもを結ぶといった細かな手作業から、障害物をよけて歩く、揺れるバスの中で立つなど、歩行や姿勢制御に関わることまで、日常生活のあらゆる場面で求められる。

もちろん、学校生活を送る上でも協調運動を円滑に遂行することが欠かせない。授業場面为例にとると、運動そのものが中心となる体育の他、手先の器用さを必要とする音楽、技術や家庭、図工、そして、正確な書字が要求される国語などがある。就学に伴って大きく変化することは、こうした運動のスキルが、直接・間接に成績評価の対象となることである。まわりの同年齢児童と比較されるためか、学年が上がるほど、子どもは自らの身体的有能さを低く見積もる傾向がある（岡澤・木谷・木谷，2001）。また、小学生では、休み時間の余暇活動に加え、放課後や休日の運動クラブなど、仲間と一緒に運動あそびやスポーツを行う時間が増加し、それが友達関係を育む重要な場となる。協調運動を遂行する水準が低い場合には、そうした活動で活躍することができず、結果的に仲間から孤立してしまう危険性がある（Smyth & Anderson, 2000）。このように、協調運動を遂行する水準の高低は、教科学習および仲間関係の両方に影響を与えるといえよう。なにより問題なのは、これらの諸条件によって、子どもがいわゆる「運動嫌い」となって、自ら積極的に身体を動かさなくなり、苦手な運動課題を練習する機会を逸してしまうことである。

「運動嫌い」の生成機序について、大学生を対象に事例研究を行った波多野・中村（1981）によれば、運動嫌いになるには複数の要因が関連している。そのうちの一つに、運動の楽しさや喜びを感じた経験が少ないことが挙げられる。何に運動の楽しさを見出すかは、年齢によって異なる。森（2003）は、幼児期と児童期の接続の観点から、以下のような考察を行っている。幼児や児童期前期の子どもたちは、身体を動かす活動それ自体を楽しんでいるが、児童期後半ぐらいになると、運動の流れの結末まで見越したプロセスを「楽しい」と感じるようになる。さらに、幼児期や児童期前期の子どもたちでは、将来できるようになるための練習をするよりも、運動すること自体が楽しいという経験を十分

に積むことが重要であり、この積み重ねが、児童期後期の練習プロセスの先にある「楽しさ」を引き出してくれることになるという。以上をふまえると、就学児が、自らの身体的有能さを低く見積もったり、「運動嫌い」になったりしてしまうのは、児童期前期、すなわち小学校低学年の間に、身体活動を純粋に楽しむという体験が不足しているからではないだろうか。前述したように、学校生活の中で行われる身体活動は、評価の対象となったり、クラス内の友達関係に影響を与えたりすることが多い。したがって、身体活動それ自体を楽しむという経験は、学校生活においては得られにくいものなのかもしれない。

それでは、学校外の生活、すなわち放課後や休日はどうであろうか。文部科学省が 2008 年に発表した『子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告について』によれば、2007 年の時点で、放課後に、学習塾、家庭教師、通信添削、習い事などを取り入れている家庭の割合は、小学生全体でみて 81.6%に達し、1985 年の 76%から増加している。また、学習形態別にみると、1993 年から 2007 年にかけて、習い事による学習が低下し、学習塾や通信添削での学習が上昇している。子どもたちは放課後や休日も勉強に追われ、心のおもむくままに、ただ身体を動かして遊ぶという時間は減少傾向にあることが推察される。

このような現状の中、保護者が労働などで不在の児童に対し、放課後の保育を引き受ける放課後児童クラブ（以下、通称の学童保育と記す）は、宿題以外の勉強を求められることのない、放課後の自由な数時間を保障する場として存在している。小学校の校庭など、子どもたちが身体をのびのびと動かせる場所を確保している学童保育も多く、身体活動を楽しむには最適な環境であるといえよう。また、学童保育には、学校におけるクラスのような枠組みがなく、人間関係の面で比較的自由である。在籍児の学年も、小学校 1 年生から 3 年生、ときには 6 年生までと幅広く、個人の實力もさまざまである。ゆえに、同年齢児童と並べられ評価される場面は、学校と比較してはるかに少ないだろう。学童保育には、子どもが純粋に身体を動かして遊ぶことのできる、物的・人的環境が整っていると考えられる。小学生になって間がない低学年児童が、学童保育の中で豊かな身体活動を経験することは、協調運動遂行の水準を高めたり、「運動嫌い」になるのを阻止するために、大変重要なことである。

そこで、本調査では、低学年児童が学童保育の中で経験している身体活動にはどのようなものがあるのか、子どもへの質問紙調査によって調べ、まずはその実態を把握することにした。それに加え、低学年児童において協調運動遂行の水準がどのように発達していくのか、協調運動の遂行度を測るための運動検査である Movement Assessment Battery for Children (Henderson & Sugden, 1992; 以下 MABC と記す) の実技検査を用いて、学童保育で過ごす時間が増える夏休みに焦点を絞り、その前後で縦断的な調査を行った。

2. 方法

2. 1. 調査対象

三重県鈴鹿市にある放課後児童クラブ「郡山児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱ」に所属する、小学校1・2年生の男女43名であった。その内訳は、1年生18名（男児5名、女児13名）、2年生25名（男児14名、女児11名）であった。このうち、3回すべての調査に参加した児童は、1年生12名（男児4名、女児8名）、2年生20名（男児13名、女児7名）の計32名であった。以後は、この32名の結果について述べる。対象児の身長や体重などの身体特性、および児童クラブの詳細については、第4章の図1、2を参照されたい。

2. 2. 調査時期

2012年7～11月にかけて、計3回の調査を行った。1回目は夏休みに入った直後の7月24日、2回目と3回目は夏休み終了後の9月20日と11月20日であった。後述する質問紙を使用した調査は、1回目と3回目に、計2回、実施した。

2. 3. 調査項目

2. 3. 1. 「運動・遊びについての調査」の質問紙

学童保育における遊びに関する質問紙を作成した。質問紙は、①外遊びをよく行うか、②外遊びの種類、③室内遊びの種類、④上級生（3～6年生）と遊ぶ頻度、⑤上級生（3～6年生）と遊ぶ時の遊びの種類（外遊び、室内遊び）について問うものであった。①は「とっても好き」から「ぜんぜん好きでない」まで、④は「よく遊ぶ」から「ぜんぜん遊ばない」まで、それぞれ4件法で尋ねた。また、②③⑤については、遊びの種類として、あらかじめ複数の選択肢を用意し、その中から対象児に選んでもらった。外遊びの種類には、「1. ドッジボール、2. サッカー、3. バスケットボール、4. 野球、5. キックベース、6. 鬼ごっこ、7. 砂場遊び、8. ごっこ遊び、9. その他」を、室内遊びの種類には「1. お絵かき（ぬり絵を含む）、2. カードゲーム（トランプなど）、3. 携帯ゲーム（DS など）、4. ボードゲーム（将棋、オセロなど）、5. ブロック 6. 本（漫画）読み、7. テレビ（ビデオ）をみる、8. ごっこ遊び、9. その他」を、それぞれ取り上げた。なお、サンキッズでは、夏休みの期間中だけ、DS など携帯ゲームの持ち込みを許可しているため、11月に行われた3回目の調査では、室内遊びの選択肢として挙げられている「3. 携帯ゲーム（DS など）」を除いた。回答する際は、複数選択可とした。質問紙の体裁については、第4章の図6を参照されたい。

表1 MABC第2年齢層における実技検査の詳細

検査名	検査の詳細
検査領域：手先の器用さ	
ペグさし	ペグ板に12個のペグを差し込んでいく課題である。課題遂行に要した秒数を粗点とする。
ひも通し	丸い小さな穴が6箇所開いた木の板に、ひもを通していく課題である。課題遂行に要した秒数を粗点とする。
お花迷路	お花迷路課題用紙に描かれた2本線の間をはみ出さないように、ペンで1本の連続線を描く課題である。線からはみ出た回数を粗点とする。
検査領域：ボールスキル	
片手ボールつき捕球	立位のまま、片手でテニスボールを握って床にバウンドさせ、同じ手でとらえる。左右どちらの手でも行う。10試行中、ボールをとらえた回数を粗点とする。
お手玉の投げ入れ	立位のまま、片手でお手玉を持ち、2m離れた木箱の中に投げ入れる。10試行中、木箱に入った回数を粗点とする。
検査領域：静的・動的バランス	
ツル形開眼片足立ち	片方の足を屈曲させて反対側の足につけ、腰に手を当てて20秒間静止する。左右どちらの足でも行う。静止することができた秒数が粗点となる。
連続両足跳び	床に描かれた6個の四角形の中を連続して、両足をそろえて跳ぶ。連続して跳べた四角形の個数を数えて粗点とする。
つま先・かかと歩き	床上に引かれた4.5mの直線の上を歩く。その際、片方の足のつま先に、もう片方の足のかかとを当てるようにする。正しい方法で歩くことができた歩数を粗点とする。

2. 3. 2. MABC 実技検査

MABC 実技検査には、「手先の器用さ」「ボールスキル」「静的・動的バランス」の検査領域があり、それぞれ、手先の微細運動、全身での対象の操作、全身の粗大運動を取り扱っている。各々が3、2、3の計8下位検査を有するが、第1年齢層（4～6歳）から第4年齢層（11～12歳）までの各年齢層に対応し、その内容が異なっている。今回は小学校低学年児童を対象としたため、第2年齢層（7～8歳）の検査項目を用いた（表1）。検査用具の個数が足りないため、「手先の器用さ」領域の検査項目は、集団で一斉に実施することが困難であった。そこで「手先の器用さ」領域を省いて、「ボールスキル」「静的・動的バランス」領域の下位検査5項目のみを実施した。これらの検査項目においては、粗点の値が高いほど、協調運動を遂行する水準が高いことを意味する。

2. 4. 手続き

第1回目の7月24日は夏休み中であつたので、午前中の自由時間に、一斉に調査を行った。自分の名前が書かれた記録用紙を対象児が持ち、各検査項目の実施場所を順に巡って

いくという方法を用いた。MABC 実技検査、質問紙とも、室内で実施した。質問紙の文章中に、子どもにとって意味のわかりにくい箇所がある場合は、指導員の先生に補助をお願いした。第2、3回目はいずれも平日であったので、14時過ぎより下校した児童から、順に調査を行った。学童保育の生活リズムを損ねないよう、可能な限り、所要時間の短縮を図った。

3. 結果

3. 1. 質問紙

3. 1. 1. 第1回目調査 (2012年7月24日)

「①外で遊ぶのは好きですか？」に対して、「1. とっても好き」と回答した児童が24名(1年生10名, 2年生14名)、「2. まあまあ好き」が8名(1年生2名, 2年生6名)で、「3. あんまり好きではない」「4. ぜんぜん好きでない」はどちらも0名であった。全体的に、低学年児童では外遊びが好まれているようである。

表2 選択された遊びの個数

②外遊びについて			③室内遊びについて		
選択数	1年	2年	選択数	1年	2年
1個	7	2	1個以下	7	1
2個	2	5	2個	2	3
3個以上	3	13	3個以上	3	11

続いて、「②サンキッズでの外遊びは、何をすることが多いですか?」「③サンキッズでの室内遊びは、何をすることが多いですか?」という質問に対し、各遊びを選択した人数を学年ごとに割り出し、図1、2に示した。外遊びでは、ドッジボールを選択した子どもが最も多く、続けて砂場遊び、鬼ごっこの順であった。1年生では、野球やキックベースを選択した者がいなかった。「その他」が選ばれた場合には、なわとび(1年生2名, 2年生1名)、フラフープ(1年生1名)、バレーボール(2年生2名)、キャッチボール(2年生1名)、ポケモン(2年生1名)が挙げられた。一方、室内遊びでは、DSなどの携帯ゲームを選択した子どもが最も多く、続いてカードゲーム、本(漫画)読みの順であった。「その他」が選ばれた場合には、シール交換(1年生4名, 2年生1名)、折り紙(2年生1名)、パズル(2年生1名)が挙げられた。

また、各人が選択した遊びの個数をそれぞれ算出し、学年ごとに分けて、表2に示した。②の結果について、カイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった($\chi^2(2)=8.868$, $p<.05$)。残差分析の結果、遊びの個数が1個だった人数が、1年生で2年生より多く、遊びの個数が3個以上であった人数が、2年生で1年生より多いことが示された。同様に、③の結果についてカイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった($\chi^2(2)=9.050$, $p<.05$)。残差分析の結果、遊びの個数が1個以下だった人数が、1年生で2年生より多く、

遊びの個数が3個以上であった人数が、2年生で1年生より多いことが示された。このことから、外遊び、室内遊びのいずれにおいても、1年生より2年生の方が、多くの遊びを選択していることがわかった。

上級生との交流については、「④サンキッズで遊ぶとき、3年生から6年生のお兄さん、お姉さんとよく遊びますか？」に対して、「1. よく遊ぶ」と回答した児童が15名（1年生8名、2年生7名）、「2. まあまあよく遊ぶ」が4名（1年生0名、2年生4名）、「3. あ

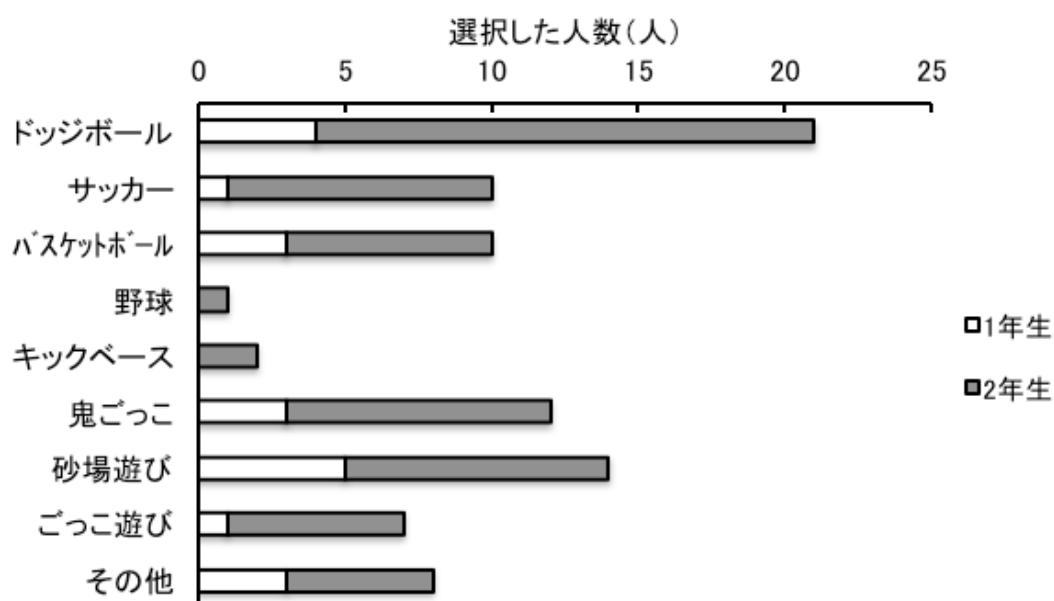


図1 よく行う外遊びの種類

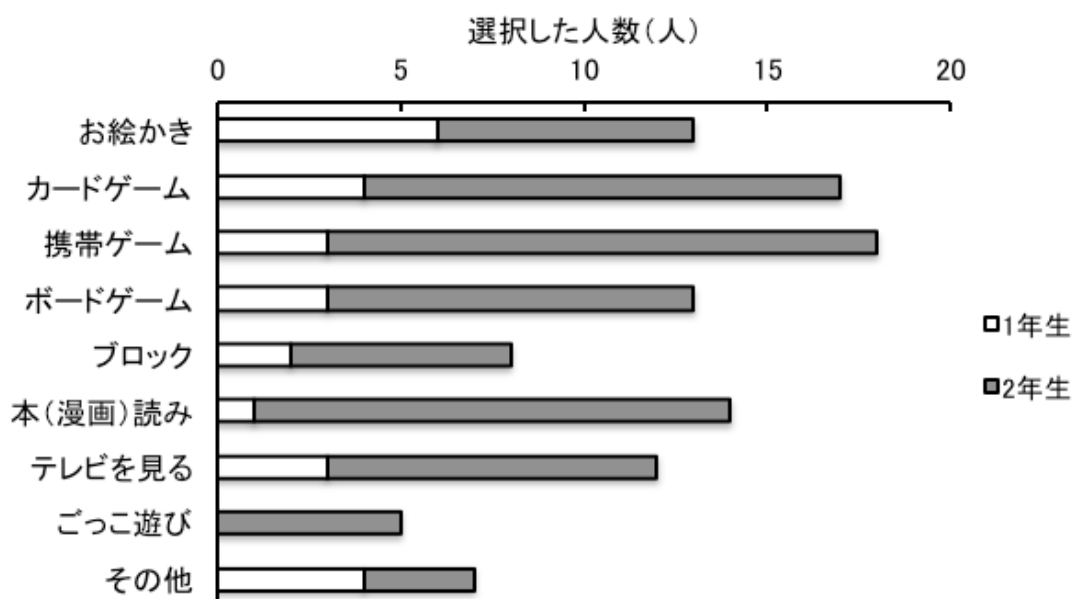


図2 よく行う室内遊びの種類

んまり遊ばない」が6名（1年生1名，2年生5名）、「4. ぜんぜん遊ばない」が7名（1年生3名，2年生4名）であった。「よく遊ぶ」「まあまあ遊ぶ」という肯定的な回答が、「あんまり遊ばない」「ぜんぜん遊ばない」という否定的な回答よりもやや多かったが、Fisherの直接確率検定を行ったところ、両者の間に有意な偏りはみられなかった。

続いて、「⑤3年生から6年生のお兄

さん、お姉さんと遊ぶとき、どんな遊びをしますか？」という質問に対し、外遊び、室内遊びについて、各遊びを選択した人数を学年ごとに割り出し、図3、4に示した。外遊びでは、ドッジボールを選択した子どもが最も多く、続けて鬼ごっこ、サッカーの順であった。1年生では、野球、キックベース、ごっこ遊びを選択した者がいなかった。「その他」が選ばれた場合には、なわとび（1年生2名）、バレーボール（2年生2名）、虫取り（2年生1名）が挙げられた。一方、室内遊びでは、カードゲームを選択した子どもが最も多く、続いてお絵かきとボードゲームが同数であった。「その他」が選ばれた場合には、シール交換（1年生1名）、うつし紙（1年生1名）、折り紙（2年生2名）が挙げられた。1年生では、ごっこ遊びを選択した者がいなかった。

図3をみると、外遊びの結果は図1とほぼ同じで、上級生との交流の有無にかかわらず、同様の遊びを行っていることがわかった。しかし2年生では、野球やキックベースを選択する人数がわずかに増えるなど、遊びの幅がいくぶん広がる傾向がみられた。他方、図4をみると、室内遊びの結果は図2と概ね同じであった。このことから、外遊び、室内遊びとも、遊びの種類に、上級生との交流が大きな影響を与えない可能性が示唆された。

また、各人が選択した遊びの個数をそれぞれ算出し、学年ごとに分けて、表3に示した。外遊びの結果について、カイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りに有意な違いは認められなかった。室内遊びの結果についても、同様の分析を行ったが、人数の偏りに有意差は認められなかった。このことから、上級生との遊びにおいては、外遊び、室内遊びのいずれにも、学年による遊びの個数の違いはみられないことがわかった。

3. 1. 2. 第3回目調査（2012年11月20日）

第1回目の調査時に、「①外で遊ぶのは好きですか？」という問いに対して、すべての対象児が「1. とっても好き」「2. まあまあ好き」と回答したため、今回の調査ではこの

表3 ⑤選択された異年齢での遊びの個数

外遊びについて			室内遊びについて		
選択数	1年	2年	選択数	1年	2年
1個	8	8	0個	2	3
2個	2	7	1個	5	4
3個以上	2	5	2個	1	5
			3個	2	4
			4個	1	3
			5個	1	1

質問を省いた。

「②サンキッズでの外遊びは、何をすることが多いですか？」「③サンキッズでの室内遊びは、何をすることが多いですか？」という質問に対し、各遊びを選択した人数を学年ごとに割り出し、図5、6に示した。外遊びでは、ドッジボールを選択した子どもが最も多く、続けてサッカー、バスケットボールの順であった。「その他」が選ばれた場合には、

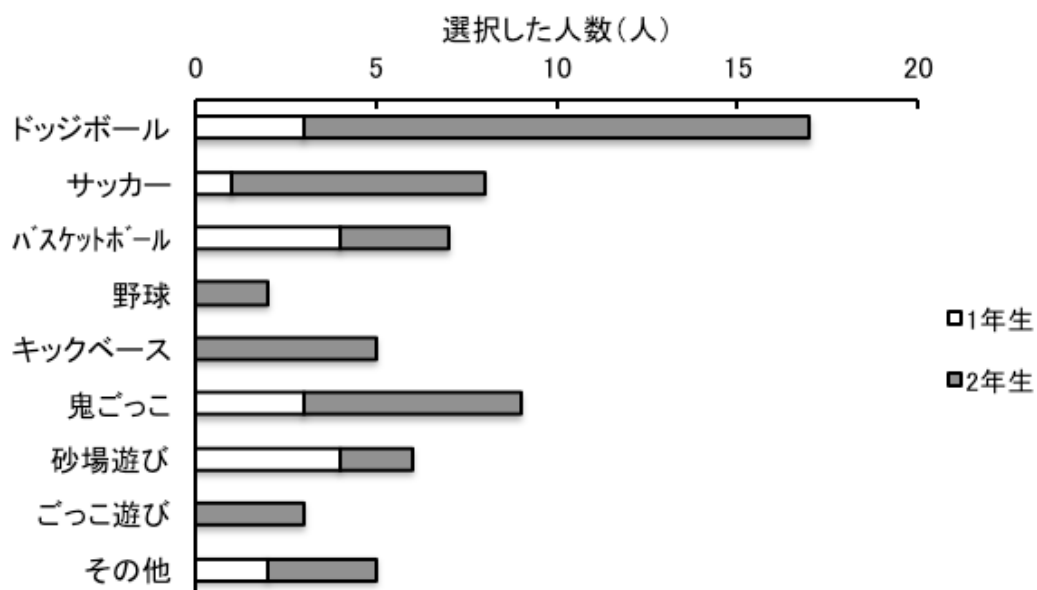


図3 上級生との外遊びの種類

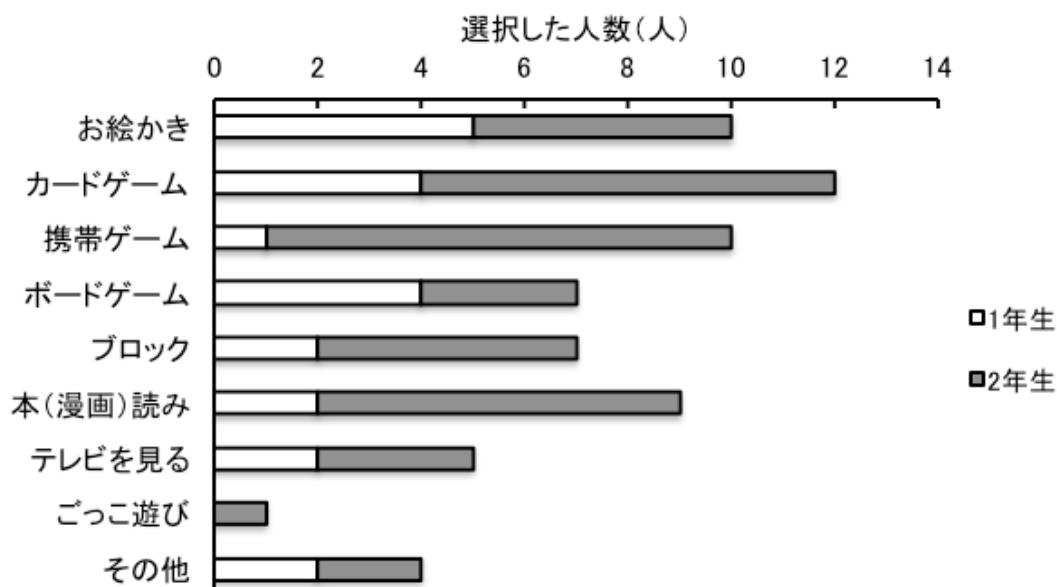


図4 上級生との室内遊びの種類

なわとび（1年生1名）、大なわとび（1年生2名、2年生1名）が挙げられた。一方、室内遊びでは、お絵かき（ぬり絵を含む）を選択した子どもが最も多く、続いてカードゲーム、ボードゲームの順であった。「その他」が選ばれた場合には、シール遊び（1年生2名）、ドミノ（2年生1名）が挙げられた。

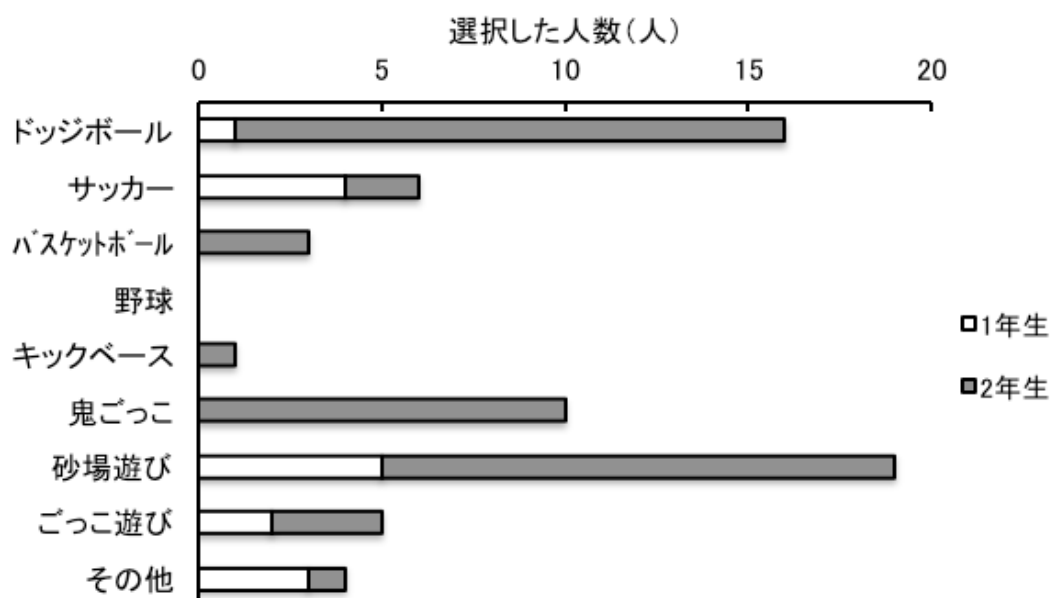


図5 よく行う外遊びの種類

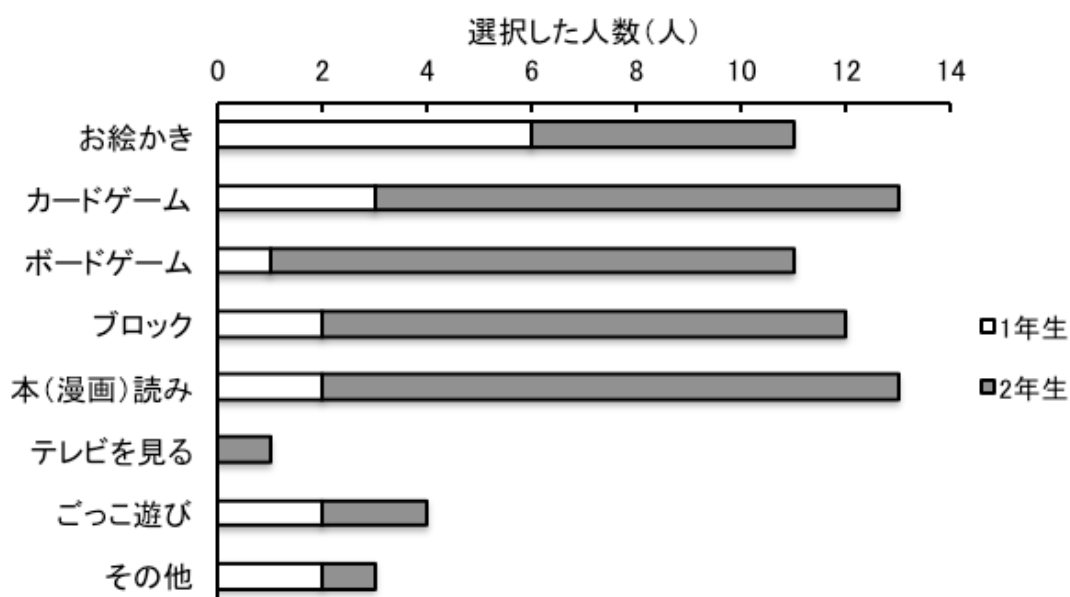


図6 よく行う室内遊びの種類

また、各人が選択した遊びの個数をそれぞれ算出し、学年ごとに分けて、表 4 に示した。②の結果について、カイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった ($\chi^2(1)=6.497$, $p < .05$)。残差分析の結果、遊びの個数が 1 個以下だった人数が、1 年生で 2 年生より多く、

遊びの個数が 2 個以上であった人数が、2 年生で 1 年生より多いことが示された。同様に、③の結果についてカイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りが有意であった ($\chi^2(2)=8.604$, $p < .05$)。残差分析の結果、遊びの個数が 1 個だった人数が、1 年生で 2 年生より多く、3 個以上だった人数が 2 年生で 1 年生より多いことが示された。このことから、外遊び、室内遊びともに、1 年生より 2 年の方が多くの遊びを選択していたことがわかった。

上級生との交流については、「④サンキッズで遊ぶとき、3 年生から 6 年生のお兄さん、お姉さんとよく遊びますか？」に対して、「1. よく遊ぶ」と回答した児童が 6 名（1 年生 2 名、2 年生 4 名）、「2. まあまあよく遊ぶ」が 10 名（1 年生 1 名、2 年生 9 名）、「3. あんまり遊ばない」が 6 名（1 年生 4 名、2 年生 2 名）、「4. ぜんぜん遊ばない」が 10 名（1 年生 5 名、2 年生 5 名）であった。「よく遊ぶ」「まあまあ遊ぶ」を選択した人数が、「あんまり遊ばない」「ぜんぜん遊ばない」を選択した人数と同数となり、前回の調査よりも上級生と遊ぶ子どもの人数が微減した。

続いて、「⑤3 年生から 6 年生のお兄さん、お姉さんと遊ぶとき、どんな遊びをしますか？」という質問に対し、外遊び、室内遊びについて、各遊びを選択した人数を学年ごとに割り出し、図 7、8 に示した。外遊びでは、ドッジボールを選択した子どもが最も多く、続けて鬼ごっこ、サッカーの順であった。1 年生では、サッカー、バスケットボール、野球、キックベース、鬼ごっこ、砂場遊びを、2 年生では、バスケットボール、野球、キックベース、砂場遊び、ごっこ遊びを選択した者がいなかった。「その他」が選ばれた場合には、なわとび（1 年生 2 名）、大なわとび（2 年生 1 名）が挙げられた。一方、室内遊びでは、カードゲームを選択した子どもが最も多く、続いてカードゲーム、お絵かきの順であった。1 年生ではボードゲームを、2 年生では本（漫画）読み、ごっこ遊び、その他を選択した者がいなかった。テレビを見る、は該当者がいなかった。「その他」が選ばれた場合には、シール遊び（1 年生 2 名）が挙げられた。

図 7 を見ると、外遊びの結果は図 5 と大きく異なっており、上級生と交流するときには、遊びの種類が減り、ドッジボールが中心になっていた。また、学年による違いに注目すると、ドッジボールには 1 年生も参加するが、鬼ごっこやサッカーには参加しないことがわ

表4 選択された遊びの個数

②外遊びについて			③室内遊びについて		
選択数	1年	2年	選択数	1年	2年
1個以下	11	3	1個	10	6
2個以上	1	17	2個	1	5
			3個以上	1	9

かった。一方、図 8 を見ると、室内遊びの種類は、上級生のいないときと同じくらい多かった。選択者数が多かったのがカードゲームで、上級生とはゲームによって、交流が行われているように見受けられた。

また、各人が選択した遊びの個数をそれぞれ算出し、学年ごとに分けて、表 5 に示した。外遊びの結果について、カイ二乗検定を行ったところ、人数の偏りに有意差は認められな

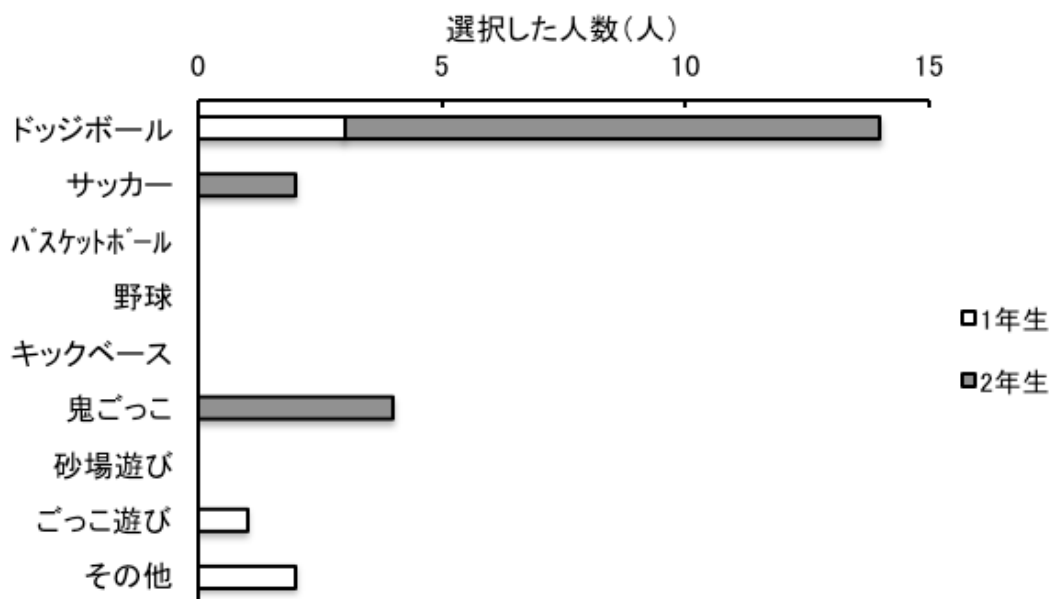


図7 上級生との外遊びの種類

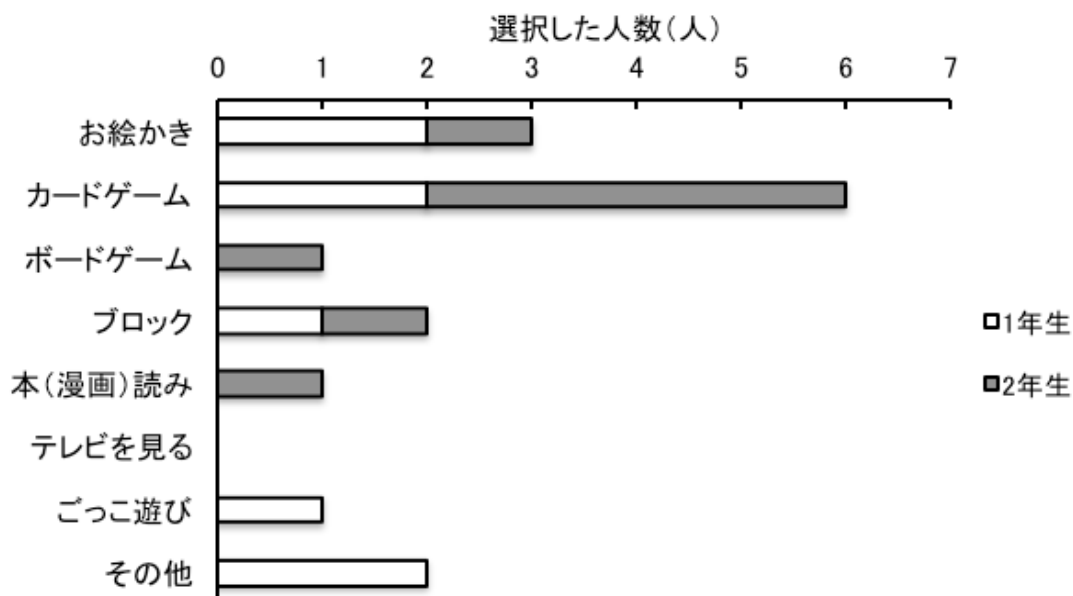


図8 上級生との室内遊びの種類

かった。室内遊びの結果についても、同様の分析を行ったが、人数の偏りに有意な違いは認められなかった。このことから、上級生との遊びにおいては、外遊び、室内遊びのいずれにも、学年による遊びの個数の違いはみられないことがわかった。

表5 ⑤選択された異年齢での遊びの個数

外遊びについて			室内遊びについて		
選択数	1年	2年	選択数	1年	2年
0個	7	7	0個	7	13
1個	4	10	1個	2	6
2個以上	1	3	2個	3	1

3. 2. MABC

MABC は、下位検査から得られた粗点を 0～5 点までの得点に換算し、その数値によって協調運動に不全がみられる子どもを割り出すことができる (Henderson & Sugden, 1992)。しかし本調査の目的は、協調運動の遂行の発達過程をとらえることであり、児童のアセスメントではないことから、粗点をそのまま用いることにした。

3. 2. 1. 第 1 回目調査 (2012 年 7 月 24 日)

粗点の平均値を表 6 に示した。「静的・動的バランス」領域の下位検査である「ツル形開眼片足立ち」「連続両足とび」「つま先・かかと歩き」は、それぞれ 20 秒、5 回、15 歩が上限となっており、対象児らの成績がほとんど上限に近い、すでに上限を超えていることが示された。また、学年による違いがほとんど認められなかった。一方「ボールスキル」領域の下位検査である「片手ボールつき捕球」「お手玉の投げ入れ」では、2 年生の方が 1 年生よりもわずかに粗点が高かった。いずれも 10 回が上限だが、上限に近い粗点を示した「片手ボールつき捕球」に比べ、「お手玉の投げ入れ」は成績が伸びなかった。

表6 第1回MABC調査の粗点の平均値 (SD)

表1 第4年度HBC新年度種別テスト結果（2022）											
	ボールスキル領域						静的・動的バランス領域				
		片手ボールつき捕球（回）			お手玉の投げ入れ（回）			ツル形開眼片足立ち（秒）		連続両足と	つま先・かかと歩き（歩）
n		左手	右手			左足	右足	び（回）			
1年生	12	7（3.0）	6（4.0）	3	（1.4）	18（4.9）	17（2.9）	5（.6）	23（5.7）		
2年生	20	8（2.9）	8（2.5）	5	（2.5）	19（2.7）	17（5.5）	5（.0）	22（4.8）		
全体	32	8（3.0）	7（3.4）	5	（2.3）	19（2.8）	17（5.3）	5（.4）	23（5.2）		

3. 2. 2. 第 2 回目調査 (2012 年 9 月 20 日)

第 1 回目の調査結果を受けて、ほとんど上限に達していた「静的・動的バランス」

表7 第2回MABC調査の粗点の平均値 (SD)

ボールスキル領域				
		片手ボールつき捕球 (回)		
	n	左手	右手	お手玉の投げ入れ (回)
1年生	12	9 (1.2)	9 (.9)	4 (2.0)
2年生	20	9 (.7)	9 (.9)	4 (1.6)
全体	32	9 (.9)	9 (.9)	4 (1.8)

領域の下位検査を除いて、「ボールスキル」領域の 2 検査のみを実施した。粗点の平均値を表 7 に示した。「片手ボールつき捕球」は、どちらの学年においても、第 1 回目調査よりも成績の向上がみられ、ほぼ上限に達したことが示された。一方、「お手玉の投げ入れ」では、1 年生はわずかに粗点が上昇したが、2 年生ではむしろ 1 回目よりも粗点が下がる結果となった。学年による違いはなかった。

3. 2. 3. 第 3 回目調査 (2012 年 11 月 20 日)

第 2 回目の調査結果を受けて、ほぼ上限に達したとみられる「片手ボールつき捕球」を除き、「お手玉の投げ入れ」のみを実施した。粗点の平均値を表 8 に示した。1 年生はわずかに粗点が下がり、2 年生はわずかに上がる結果となった。

表8 第3回MABC調査の粗点の平均値 (SD)

	n	ボールスキル領域	
		お手玉の投げ入れ	
1 年生	12	3	(1.7)
2 年生	20	5	(1.8)
全体	32	4	(1.9)

4. 考察

4. 1. 質問紙調査

第 1 回目の調査では、全員が「外遊びが好き」だと答えていた。これより、調査対象となったサンキッズ I・II の低学年児童においては、児童期前期の課題である「身体を動かすこと自体を楽しむ」(森, 2003) ことが達成されていたと考えられる。

遊びの内容をみると、学年による顕著な違いはみられないが、遊びの種類という点では、外遊び、室内遊びのいずれにおいても、2 年生の方が 1 年生よりも豊富であった。これは、第 3 回目の調査でも同様であった。このような結果が生じた背景として、学童保育での経験の多少や、同学年集団の規模など、複数の要因が考えられる。また、質問紙中に選択肢として挙げた遊びが適切であったかどうかも含め、さらなる検討が必要である。

続いて、遊びの中での上級生との交流をみていく。「よく遊ぶ」「まあまあよく遊ぶ」を選んだ子どもの人数と、「あんまり遊ばない」「ぜんぜん遊ばない」を選んだ人数との間に、有意な偏りがみられなかったことから、上級生との交流が特別多いわけではないことが示唆される。上級生と遊ぶことで、遊びの内容に変化が生じたかどうか確認したところ、2 年生では野球やキックベースを選択する人数が、わずかに増えていた。しかし、室内遊びの方は、学年を問わず、ほとんど変化がなかった。第 3 回目の調査では、上級生との交流がある場合には、外遊びの種類がかなり減少し、ドッジボール中心となっていた。ドッジボールは、なるべく多くの人が参加した方が楽しめる球技であるため、互いに必要に迫られて、異年齢での集団遊びが成立しているのかもしれない。それほど人数を必要と

しない、砂場遊びや鬼ごっこなどは、同学年で楽しむものになっている可能性もある。このように、異年齢での集団遊びは、必要に迫られてはじめて実現するということが考えられる。異学年間の交流を促進していくには、何らかの特別な仕掛けが必要なかもしれない。

4. 2. MABC

身体が静止しているときと動いているときの身体のバランス機能を調べる、「静的・動的バランス」領域の3下位検査においては、第1回目の調査時より、いずれの学年でも成績が上限に達していた。このことから、対象児らにおいては、バランス機能とかかわる協調運動スキルがよく発達していたことが示された。

一方、全身での対象操作を調べる、「ボールスキル」領域の2下位検査においては、第1回目調査と第2回目調査の間に、「片手ボールつき捕球」の粗点が伸び、両方の学年においてほぼ上限に達した。「お手玉の投げ入れ」は3度調査した中で、1年生、2年生ともに粗点が上がったたり下がったりを繰り返したが、成功回数が、全10試行中の半数を超えることがなかった。

この課題は、2m離れた箱の中にお手玉を投げ入れるというものだが、お手玉を投げる力加減が強すぎると、お手玉は箱を通りすぎ、弱すぎると手前で落ちてしまう。こうした投球動作における力加減を調整することが、低学年児童にはまだ難しいのかもしれない。また、第1回目の質問紙調査で、外遊びの種類「その他」に「キャッチボール」と回答した2年生が1名いたが、「野球」を選択した児童は、1、2年生ともにほとんどいなかった。今回の「お手玉の投げ入れ」の結果は、野球などの投球動作を含む遊びの経験が不足しているところからくるものとも考えられる。

4. 3. まとめ

質問紙調査とMABCの結果から、本調査の対象となった、サンキッズⅠ・Ⅱの低学年児童は、外遊びの中で「身体を動かすこと自体を楽しむ」ことができおり、静的・動的バランス機能が、十分に発達していることが示された。また、捕球動作については、夏休みの前後で改善がみられ、1年生、2年生とも、ほぼ上限に達した。一方、投球動作については、いずれの学年とも、成績が向上しないままであった。この原因として、野球などの遊び経験の不足が考えられた。

学童保育における異学年との遊びの交流は、特別多いとはいえず、遊びの種類もドッジボールなど特定の遊びに偏る傾向があった。また、1年生は2年生より、選択する遊びの種類が少ないことが示唆された。こうした特徴は、低学年児童の遊びを考える上で、いくつ

かの考慮すべき観点を提出しているといえよう。今後の課題としたい。

文献

- 波多野 義郎・中村精男 (1981). 運動嫌いの生成機序に関する事例研究. *体育学研究*, 26, 177-187.
- Henderson, S. E., & Sugden, D. A. (1992). *Movement assessment battery for children*. London: Psychological Corporation.
- 文部科学省 (2008). 子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告.
- 森 司朗 (2003). 幼少年期における運動の好き嫌い. *体育の科学*, 53, 910-914.
- 岡澤祥訓・木谷博記・木谷真佐美 (2001). 小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成. *奈良教育大学紀要*, 50, 91-95.
- Smyth, M. M., & Anderson, H. I. (2000). Coping with clumsiness in the school playground: Social and physical play in children with coordination impairments. *British Journal of Developmental Psychology*, 18, 389-413.

第6章 学童指導員の語りにみる「遊びと成長」

川又 俊則・渋谷 郁子

本章では2人の指導員へのインタビューを収録している。多岐に亘る話題のお話だったが、そのなかで「遊びと成長」という共同調査のテーマに関する部分だけを抽出した。全インタビューの逐語録のうち、編者2人が自らの視点で小テーマごとに編集し直したものを話者に確認、修正していただいたものである。

語りの臨場感を出すことを目指し、1節では川又が、調査者の質問を削除し、問わず語りの形式で、2節では渋谷が、調査者の質問を織り込んだインタビュー形式で再構成した。いずれも、読者の読みやすさを考えた方法だが、その違いも編者の視点の差ということで見えていただきたい。

なお、本章では指導員2人の語り以外、編者らの独立した考察はあえて加えず、記録として示す意図を持って収録したことも付け加えておきたい。

1. 末廣充子先生（育生地区放課後児童クラブくるみ会指導員）

調査日 平成25年11月30日（金）

調査者 川又俊則・渋谷郁子

1. 1 クラブの人数と遊び

くるみ会では、100人を超えた時期が10年くらい続いたんです。人数が増えると縦割り（＝異学年、異年齢）ではなく、横（＝同学年）の集団で十分遊びが成立してしまう。だから、上の子が下の子の面倒をみるより、同年代ですぐに遊びが展開できる意味では、上下の関係が希薄になってしまうんです。

全体の人数が少ないと、同年代で集団が作れないから、上の子が下の子たちにいろいろ教えて、その子たちと一緒に遊べるように工夫する。私がくるみ会に入ったときは、（人数が多くなかったの）で）そういうのをすごく感じました。

昔にしてみれば高学年が多い学童だったのですが、あるとき、4年生が男子で10人くらいいたんですが、そのなかでも、興味がある子ない子いますでしょう。たとえば野球でも、人数が足りないと試合ができない。そこで、2年生とか3年生を入れて試合をする。同じ学年だとやりやすいけれど、人数が足りないから面白くない。人数を揃えるために、小さい子にルールも教えて試合ができるようになる。子どもたちは、どれだけ人数が少なくとも、ゲーム的に勝負をするっていうのが好きなんです。練習だけで遊びっていうのは成り立ちませんからね。スポーツだったら最終的に試合をするという目標を持つ楽しみから、下の子たちを教え込んでいく。

下の子たちと一緒にだと、大きい子は我慢することが多いですね。上の学年だけだったらツーカーでいく遊びが、なかなかうまくいかない。たとえば野球だと、フライが上がって守備に取られたら、ランナーは次に進めないというルールも、下の子はなかなか理解できない。でも、怒ったらあかんし、泣かせてはいけない……。そういうところから始まって、大きい子たちがやっているから自分たちも……。って、下の子たちが継承するようなこともありますね。関係ができて下の子が上の子に「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」って甘えるようになると、上の子が下の子をすごくかわいいなと思うようになる。それは、私たちが指導者としてやったのではなくて、子どもたち自身が集団を作ったというか……。

でも今は、横のつながりの方が強くなってきています。

100人以上の頃、3年生までが各学年20人ぐらいいると、横の学年で遊べるので、下（の学年）とも上（の学年）とも遊ばなくなるんです。自分たちが好きなように、気の合った者同士で遊びたいんですよね。上の子がいると「命令されるから嫌」、下の子たちがいると「かったるい」。大きな集団になったことで、横だけで遊べるのは、（逆に新たな）課題だなと思いますね。大きい子同士や同学年では成り立っても、下の子たちを受けとめる力量というかが欠けてきているのかなと思うこともあります。

そこで、私たち指導員と一緒に遊ぶことで、下の子たちが入るようにうながしているんです。指導員が（遊びの輪の中に）入っていると、結構、下の子たちも、「入れて」って言うてくるんです。でも、電話とかトイレとかで指導員が少し遊びから抜けたりすると、その用事が終わって戻ってきたときに、下の子がいなくなっていることもあります。「さっき、『入れて』って入ったんじゃないの」って聞くと、「やめた」って。

1. 2 伝承遊びとその良さ

私が入った頃、女の子は、「リズムゴム跳び」とか「まりつき」とかしていたかな。「お手玉」はしていなかったけど、「まりつき」とかは、よくしていましたね。

それ以外に、みんなで遊べるものとして、「陣取り」とか「ケンパ」があります。

昔ながらの伝承遊びみたいなのは、男女が一緒にやることができる。たとえば、「ダルマさん転んだ」とか「つるかめおやじ」とか「鬼ごっこ」とかもあります。

男の子は、「まりつき」は全然できません。それにはまる子も、一人二人いますけど。「ケンパ」はスポーツ感覚でできるからか、男の子も乗ってきてやっています。

スポーツ系以外は、昔なら、「ケイドロ」（警察と泥棒の鬼ごっこ）。私が小学校のときにすごく楽しかった「陣取り」は、体育館の端と端を陣地にしてやりました。「ゴットン」は、地面に「田」という字を書いて、二人鬼がいて、鬼は一方向しか走れず、スタートの枠にいるときはタッチされないけど、タッチされるとダメ。一周したら「イットン」、その後、「ニトン」「サントン」「ヨントン」「ゴットン」。「ゴットン」で一人助かる。みんないなくなったら鬼の勝ち。30何人いたときに考えたのが「スーパージョットン」、人数少なくとも3人くらいだと「おにぎりゴットン」。

子どもに合わせて工夫しながら、変化させる。それが、伝承遊びのいいところ。基本はあるけど、人数に合わせて変化させられるのが良さだと思う。

スポーツ系も人数が多くできるけど、サッカーだったら、ドリブルだけでなく、フュイントとかの技術が必要になってくる。でも、伝承遊びは、身一つです。せいぜい、石とかそこらにあるものと身体を使うので、足腰が鍛えられる。「ゴットン」なんかだと、鬼に捕まらず、どうすり抜けるか、体勢を低くするとか、隙を見つけるとか、自分で考えて感じて動く。

すると、ふだん、ボーっとしている子が、遊びでも目立たないので、逆に有利なんということもあるんですよ。鬼に捕まらず、回ることができる。いつもは、いるかいはいかわからないような影の薄い子が、そういう遊びではヒーローになったりヒロインになったりすることもある。その子が回ったおかげで、アウトになった子が助けられて、その子を認めていくわけです。スポーツ系の技術をとまなう遊びより、相手を見て動き、積み重ねられてきた伝承遊びって、そんなところがあるんですよ。毎日やっていたら、必ずうまくなったり、習得できたりするのも、伝承遊びの良さだと思います。

1. 3 サッカーの工夫と対応

2年生の子が、私に「やろう」って言ってきたので、ハーフ（サッカーコートを半分利用）で6人いたので3対3でチームを作って、私がキーパーになってやりました。

楽しくやっていたら、違うコートでサッカーをしていた6年生の男の子とスポーツできる女の子が、こっちのゲームに「入れて」って言ってきたんです。私は「あんたら入ったらさー」って言ったんですね。そしたら「わかった」って向こうに行ってくれたんです。（自分たちが入るとバランスが崩れると）わかってくれたんだと思いました。その後、1年生や2年生が「入れて」「入れて」って言うので、みんなで楽しみました。

しばらくすると、3年生の男の子が、「スエ（指導員の愛称）、入れて」って言うので、「うーん」ってなって。やっぱり、3年生だと下の学年が委縮するじゃないですか。それで、「あんたキーパーになりな」って提案し、3年生をキーパーにしたんです。そうしたら、1、2年生は自由に伸び伸び楽しんでいました。

おやつのときに、その3年生の男の子が「おやつ終わってからサッカーしよう」って言うので、「わかった」って言ったんです。それから、6年生の2人がやってきて、「スエ、おやつ終わってからサッカーやろう」。それで、「下の子が楽しめるサッカーだったら一緒にやろう」って言ったら、「やれる」って言うので、一緒にやりました。

最初10人ぐらいだったんですよ。それが、みんな一杯入ってきて、結果的には20何人になったかな。終わったとき、「大勢でやると楽しいやろ」って言いました。10人でやっていたら1チーム5、6人じゃないですか。そのときは、20何人いて、女の子も一杯入ってすごく楽しかったんですよ。

その途中で、『ボール触るな』と、サッカーやっている4年生の子に言われた」って、ちらっと聞いたので、私はその場では「わかった」と応じて、ゲームが終わってから、そ

の4年生に向かって、「こんなこと聞こえてきたけど」って注意したんです。「そんなこと言ってないで」ってその子は言ってたけど、もちろん、そんなことはない。それ以上は、追及しなかったけど、大事なのは、(良くない行動は指導員が)ちゃんと見ているよってわからせることだと思う。

私ら指導員が入っていると、ケンカがないでしょう。サッカーも「くるみ独自ルール」なんですね。(低学年は)わざとファウルしているわけではないので、他の(スポーツ団などの)ゲームで通用するルールを(この場では)かざさないように(サッカー団に入っている上級生に)言っています。

通常、イエローカードやレッドカードがありますよね。でも、私が審判するときは、それ以外に、「ピンクカード」を作って出しています。それは、目上に対して態度が悪いと出すカードなんです。その子が態度を改めるようにわかるまで私が抱きしめ続けるんです。レッドカードはその場で5分間座る。「注意」のイエロー2枚でレッド。ピンクが出たら、私がその子を「かわいいな」って抱きしめる。「それは嫌や」っていう子もいたけど、まあ、みんな、楽しそうにやっていました。

1. 4 ドッジボールの工夫

私ら指導員が入っていると、大きい子が入ってくるんです。でも、そうすると1,2年生が楽しくないじゃないですか。上の学年は左で投げるとか、コートでサイズで広い方を1年生、狭い方を5,6年生と変えてやってみるなどの工夫もしました。こうでなければいけないという概念を外し、その遊びをしている子どもたちに合うようにする。

面白いのは、途中から入る強い子は、必ず、強い子のいるチームに入るんですよ。ドッジが好きな子は勝ちたいから。

あるとき、私は弱い方に入っていたんですが、試合してもすぐ負けるんですよ。それで、コートチェンジして3回ぐらいやったんです。試合には勝っても、強い子のチームにいると活躍できない強い子もいるんです。すると、その子(さっき途中から入った強い子)が、「チーム替えしよう」って言う。でも、「えー、だって、楽しいもん、この分けた方が」って、弱い側をあおるわけです。「みんな活躍できるな」とか言って。するとその子が「おもしろくない」って言うので、「自分が選んだんやろ、そっち」って言って、絶対チーム替えしない。

おやつの後、また、ドッジボールの途中で「入れて」って言うとき、「好きな方に入りな」って言うと、今度は、弱い方を選ぶ。(さっきのように、強い方を選んだとしても)「なんで、そっちに(強い子たちが)固まるのさ」とは言わない。ドッジボールなどのゲームは、チームの力関係が均等になる方が楽しいんだということを、こんな経験を通じて子どもたちが実感するんですよ。「勝って楽しい」のではなく、「相手が強い方ほど自分が頑張れたりするのが楽しい」って言うこともある。そういうことは、指導員が頭ごなしに言って強制するのではなく、遊びを通して、自分で楽しいと実感する方がいい。だっ

て、勝ってオリンピックに行くという競技じゃないわけですから、みんなが楽しくなる方法を考えたいですね。

今の中3の子たちが（小）5年のときでしたね。すごくおもしろい子たちで、女の子対男の子でドッジの試合をしたんです。

男の子は女の子が弱いと思っているから、地面に座っているような子もいたんです。なめているんですよ。私は女の子の方に入っていたので、「ちょっとタイム、作戦タイム」って言って、女の子を集めた。「今からさ、5分間、私らだけ、『5分間だけ全滅しない』って決めて、そうになったら、私らだけで『勝ち』って決めよう」と提案したんです。

そうしたらこの子たちが盛り上がったんですよ。「よしやろう」って言って。（男子側は）何を作戦したかわからないけど、普段と変わらないわけです。

でも、「上手に逃げてる！」って言いながら、私も入ってゲームが進んで3人くらい残ったんですけど。向こう（＝男子側）は、どうもおかしいって気づきはじめた。「スエ、後、何分？」って聞いてくる子もいるので、「言うたらあかん」ってわざと言ってたんですよ。「言うたらあかん」「何分？」「あと1分」なんて感じで。そうすると、男の子たちも何かおかしいと気づく。（ドッジが弱いと）なめていた子が、今度は、真剣勝負で全滅させにかかるわけです。

結果的には、向こうも当てることができたけど、全滅にはならず、いい勝負になったんです。弱いチームでも「5分間全滅されなかったら勝ちにしよう」とっていう話で、「よし」という気持ちになって、女子もそれまでは、「向こうが強いから嫌や」って言っていた子もいたんですけど。そういうパターンでお互いが前向きになれることもある。

遊びってというのは、決まった物ではなく、そのときの人数やそのとき参加者の様子や、違う意味で展開できるんでおもしろいんですよ。ちょっとした工夫ですよ。

同じドッジボールでも、異年齢だと、上の学年と下の学年とでは技量に差がありますが、同じ学年や男女でも上手い下手ってあるじゃないですか、そういうときには何か目標を立てるといい。「向こうがわからんでもいいやん。私らだけで勝ちにしよう」とっていうチームだけの内緒でしょ。それが楽しいんですよ、女の子らには。

ドッジボールは相手を当てるだけではなく、「残った」「絶対に残ろう」とって逃げるのがうまいだけでもいいんですよ。そういう持っていき方っていうのがありますね。

1. 5 誕生会の遊び

くるみ（会）の誕生会は、毎月第3か第4水曜日にしています。夏休みに入ってしまう8月は、お盆があるので、夏休みに入っすぐにプールでします。12月はクリスマス会もあるので第1週ぐらいにしています。基本的には、毎月水曜日の行事です。とくに4年生以下は、楽しみにしているみたいです。そのときの遊びの基本は、1年生が楽しめる遊びっていうことにしています。

そこでよくやる遊びは、「ケイドロ」、「しっぽ取り」、「木と氷と石」、「王様ジャンケン」（二つに分かれて、誰が王様かお互いに探り合う。ジャンケンで負けたら座り、その人は王様しか助けられない。男女対決は男子の作戦がうまい）。

高学年になると、そういう遊びが「つまらん」、「くるみつつまらん」という子もいるんです。でも、全体的に「みんな遊び」は好きですね。

1. 6 室内での遊び

室内では、人生ゲームとかブロックもします。

チェスもあるんですけど、チェスとしてのルールじゃなく、自分たちの作ったルールで戦いをやっています。たぶん、キング、クイーンだと思うけど、先が折れているので種類がわからないものをコロコロと、逆さまコマみたいに回している子たちがいて、良く回るなとも思ったけど、6年生が、ビオトープにあったドングリを拾ってきたので、それを刺してみたんです。逆さまって難しいから、「見て」って子どもたちに見せたら、「俺も」「俺も」って飛びついてきて、10個くらい作りました。そういうのもやったりとか。

今年は、手先を使うっていうことで、暑いときに部屋の中でミサンガ作りをしたら喜びました。ミサンガ作りに、かまぼこ板と釘をあげるんです。そこに自分の好きな絵を描きます。簡単なキャラクターを探していたら、若い指導員がナメコ（人気アプリのキャラクター）を教えてくれて、ナメコを描いたら大人気。2年生の厳つい感じの顔でスポーツやってる男の子は、面白くて何本も作りました。

私もこだわるのが好きだから、絡まないように厚紙を斜めに切り、そこに切れ込みを入れて三角形を作ったんです。それに「カラマラン」と名前を付け、一人二つあげたんです。くるっと巻いて、短くなったらほどいて。シューシューと四の字にする編み方なんですけど。

去年の冬は、指のマフラーを作りました。牛乳パックで凸凹を作って、リリアンのように出すようにして、（各家庭から）牛乳パックを持ってきたら作ってあげて、百均で買った毛糸を持ってきたら、百均では8種類とか12種類とかもあるんですね。「それは買っておいで」って言って。そのときに使った刺繍糸（の残り）は、まだ学童の棚に入っています。

かまぼこ板も一個しかあげないんですけど、「かまぼこ落とし」もよくやっています。雨が降っていたりすると、折り紙をしたり・・・。

1. 7 コマ回し認定会

部屋ではコマもします。コマが流行る時期は、自分の技を磨いたり、ケンカゴマしたりとか。コマの技は、手のせができたなら綱渡りをやるとか、縦技をやるとか。いろんなことを、それぞれ練習したりしています。

私が（くるみ会に）入ったときには、まだコマ回し認定会をやっていませんでした。私はコマを回せなかったんです。2年生の男の子が、綱渡りをお父さんから教えてもらってきて、それを初めて見て、（その子が）できてて、「すごいなあ」って。

そこに私の勝ち気さが出て、コマの技の本を読んで練習して、ようやくその年に手のせができるようになった。次の年には綱渡りができるようになったんです。

そしたら周りの子たちが、「なんや、先生もできるやん。じゃあ、俺らもできるかな」「どうやるの」「こうやるん」。それでみんなが練習し始めた。

綱渡りの往復は、非常に難しいんですけど……。本を見てやって、手のせしたら、そのまま何メートル走れるかとか……。コマの技にはいろいろ級がある。コマが巻けて何級、回すことができ何級。何十秒回せて何級。私は指導員たちと話してて、巻ける前に、「やりたい」というので級あげようって言って、「やりたい」で何級って決めました。

(壁に貼ってあるコマの級ポスターを見て) これ、10 年前の紙をそのまま貼ってあるんです。

くるみ会では「コマ回し大会」ではなく「コマ回し認定会」なんです。「コマ回し大会」だと、誰が一番うまいとか、どこまでできるとか、すごいってなるわけです。でも、回せない子が回せるのをみんなで認めようっていうこと。(コマ回しを) やりたくない子はいらんです、必ず。だから、「やりたくない子は悪いけど、見て応援して」って言っています。技はなかなかできないけど、参加した人は何級でも、最後は「あなたは何級です」って参加賞をあげるんです。

その後、技によって、カンのせや綱渡りは木かプラゴマ、縦技ができればベーゴマをあげています。(認定会の賞品として) もらうものは、どれか(一つ) は自分で選べるんです。そういう賞品を、見て参加する子にもあげて。最初は見ているだけの何人かは、しばらくやっていくうちに、これだけ回せなかった子が頑張っているのを見て、それを見ていた子が、自分もやってみようかなと思うんです。

大きい子には「(小さい子に) 教えたってな」って言っています。すると、「俺が教えたら回せるようになった」とか、「私が教えた子が(会に) 出ると言った」って嬉しそうに言っている。そしてそれを「おたより」に載せるんです。「誰々くんが『回せない』と言って困っていた子に、一生懸命教えてくれたら回せるようになった」「誰々くんが、毎日練習している」なんて。

それこそ、本当に縦割りのいい関係ですよ。「おたより」に自分が載ったこともうれしくて、ますます頑張る。それで、誰かがコマをヒューっと投げて、誰かのひもに載せてとか。そんな、遊びはそういうことですごく盛り上がりました。

子どもたちが要求しないとやらないけど、だいたい毎年、1 月の終わるか2 月くらいにコマをやっています。「今年はやらへんの、コマ回し認定会」って言われると。「先生が決めることちゃうやろ」って言って返す。そうすると、子どもたち自身が、「コマ回し、やりたい」って、みんなに提案するんです。去年は2 年生が提案したんです。もちろん、やりたくないという子は必ずいます。「嫌や、やりたくない」っていうので、「なんでやりたくないの」「だって、回せないもん」「わかった。回せたら好きになれるよな」って。

そこですよ。やりたくない子たちの理由は「うまくないから」「技ができやんから」。でも、回せて技ができるようになったら、はまりこんでしまうのが伝承遊び。

認定会までが一つの流れ。「つまらない」って言う子やなかなかとけ込めない子もなかにはいます。「教えてほしい」と言えない子もいる。そういう子には、細やかかって言ったらへんですけど、指導員がグーッと引っ張らずに、誰にも聞こえないようにこっそり「やってみる」と言ってみる。プライドの高い子もいますのでね。いきなり、みんなの前で回せない。1年生はとくにそうですね。高学年ともなると、「できやんもん」って開き直っています。練習し出したら、(高学年の上達は)とても早いです。

1. 8 電子ゲームへの対応

私が入ったすぐくらい・・・25, 6年くらい前なので、入って2, 3年たって問題になったのは、ファミコンなどゲーム系です。

くるみ会では、電子ゲームは一切持ち込み禁止です。学童内では(電子ゲームを)使わないという方針は、旧津市内の学童では共通で、皆さんたぶんさせていないと思いますよ。指導員の研修会もあるので、ほとんどそういう感じじゃないかと思います。

ただ、親がどう理解しているかはわかりません。夜に父母会をしますよね。そのとき、子どもたちが持ってくることも、なかにはあるんです。父母会をやってる脇でピコピコやっている(子もいる)。でも、それはくるみ(会)の保育ではないし、夜っていう楽しみがあるのか、家でお父さんがいるなら、子どもは留守番してほしい。そうこっちが思っている(父母会などでは)そういうゲーム機を持ってくる場合もないとは言えない。

でも、ゲーム機を(学童などに)持ってくると、ソフトのカセットとかカードを、「貸して壊れた」、「貸して無くなった」という問題は、必ず起こるんです。だから、くるみ会では、そういうものは一切持ってこさせていません。ここ(=学童)では、一人だけが遊べる物ではなく、みんなで遊べる物で遊ぶ、そういうルールできました。

ゲームソフトで5000円とか、ゲーム機本体は2万円前後するわけでしょう。そういう高額なものを外出先に持って行って遊ぶ。児童公園などに自転車を止めて集まって、みんなが一人ひとりでゲームをしているっていうのを、見かけることもあります。そういうときに、破損したとかトラブルになるんでしょう。

くるみ会の(ゲーム機を持ち込ませないという)方針は、利用者の方には理解してもらっていると思います。ゲーム機で遊びたければ、家で遊んだらいいって。無くしたら親だって困るんじゃないかなと思います。学童でそんなのを許可したら、絶対、外に遊びにいきませんよね。

1. 9 手作りカードゲームと「時代遅れの保育」

カードゲームは男子の間で、ちょっと前からずっと広がっています。あれは難しいですね。波があるんです。いま下火ですけど、人気は根強くあると思うんです。表面的に出てくる時期は、一年のなかで1回ぐらいはあります。期間は長いですけどね。いまは、あまりないですけど、盛り上がる時っていうのは、2, 3ヵ月は続きます。そうすると、これも、「あげた」「貸した」「無くなった」などの問題が出てきます。

昨年3月に卒業した子が6年生のとき、自分たちで絵を描いて色塗ってカードを作っていたんです。私は、そういうことは大歓迎です。透き通った写し紙（＝トレーシングペーパー）をいっぱいもらってきて、それをカードサイズに切って、これを使っていいよって言って渡したら、その子たちは一生懸命作って、それで遊んでいました。

カードゲームのキャラクターは、欲しいものが当たるまで買い続けたりすることもあるけど、「よし、お父さんが描いてあげるからな」と言って、写せるかどうかわからないけど、インターネットで見たり、本でも買ってきて見て、手作りで描いて作ってもいいわけでしょ、厚紙に。そういうふうにすると、また、違いますよね。そうすると、「僕の好きなこれをお父さんが作ってくれた」。

学校の（宿題で国語の教科書の）音読カードがあるんですよ、厚紙でできていて。昔、そこに、（誰かの）お父さんかお兄ちゃんが「ドラゴンボール」のスーパーサイヤ人を描いていたんですよ。色も塗ってくれていたんですよ。私は「すごいなー」って言いましたね。やっぱり、私は幼い頃から、ひと手間かけたことで子どもに響くっていう関係があると思うんです。当然、（子どもの成長のなかでは）響かない時代は来ます。でも、その経験がなかったら（親子で距離が出る時期が）早いです。保育園のときから、手作りのものを与えて、売っているものは買えないけども「お父さんが作ったろ」「お母さんが作ったろ」「一緒に作ろうかって」作るという経験があるかないか。その価値観が、大きくなっても、親と一緒に作るという喜びと、自分たちの手作りの良さっていうそういうものが、子どものなかに違う意味で育っていくんですね。

そういうやさしさや大切さや温かさが大事じゃないかなって。

私、よく言うんです。「三つの間（カン、仲間・時間・空間）には、もう一つ『手間』も入れたい」って。「手間」っていうのはすごく大事だなんて思いますね。料理でも下ごしらえでひと手間かけると、とても美味しくなりますものね。

手間をかけるっていう意味では、さっきのチェスを回していた子に、ドングリでコマを作って・・すごく固いんですよ。大きなドングリだったんですけど、自分でやっても痛いんです。「ちょっと待ってな、固いんさ。やってみ」って言って、子どもたちにさせるんだけど、全然、入らないんです。でも、自分でやってみることで、どれだけ力を入れているかわかる。

買ったらずぐ手に入るかもしれないけど、そういうことが大事だと思ってるんです。私は、遊びで、自然にあるものしか使えないけど、でも、工夫して同じものができたらいいなって思ってます。もちろん、これ（ケータイ）は無理ですけど、これは作れませんけど、そういうことを大事にしてきました。昔、ある親御さんに「時代遅れ」って言われたことがあるんですけど、（胸を張って）「時代遅れの保育をしています」って言っています。（手作りという）こだわりはもちたいですよ。

1. 10 学童期の遊び

私は、学童期に学習することは、知識の上ではすごく大事だと思う。でも、身体を使って汗をかいて、思い切り遊ぶことは、ストレスをためないことになると思っています。勉強するときも、イライラするんじゃなくて、疲れているんじゃなくて、思い切り遊んで、家では早く熟睡して寝れることが重要で、だから、切り替えて集中もできる。

ゲーム機で遊んでばかりで、深夜までそれをしていたりとか、朝起きられないとかではなく、外で遊んで汗をかいて疲れて、お腹も空いてよく寝て朝ぱっと起きられる・・・そういう生活のリズムを、学童期には（子どもたちに）つけてほしいなと思っています。そういうことは、（保育方針として）大事にしています。

だから、1年生はかけっこや鬼ごっこなど、関節を伸ばしたり縮めたりするような遊びを思い切り・・・高鬼とか、ジャングルジムに登って逃げたりとか。

鬼ごっこっていうのは、鬼から逃げることっていうことでは、同じ方向じゃなくて、機転利かせて、身をかわしたりするじゃないですか。あれは、足首をものすごく、腱を伸ばしたり縮めたりしているんだと思うんですよね。バランス良く、いろんなところが、「ごっこ遊び」を通じてつけられる。そういうことじゃないかなって感じるんですけどね。

塾に行くことも大事だけど、塾に行くんだったら、せめて5, 6年ぐらいの高学年にしてもらって、1, 2年の間は、思い切り遊ばせてほしいなと思っています。もちろん、それぞれの保護者の考えですから、そこまでは、私は立ち入れません。

でも、やっぱり、学童期は思い切り遊んで、先ほど言いましたように、不器用な友達関係なかで、ぶつかってケンカして・・・。

遊ぶことは、人とコミュニケーションとることじゃないですか、ケンカであっても。小学6年間のなかで、自分に合うタイプの子を探してほしいんです。すべての人と気が合うなんてことはないんで。そうすると、中学校に行ったら、初対面の子たちとでも、小学校のときのこういう子と一緒にだなど（思える）。

私は、何よりも、遊びを通して相手を知るっていうことができるのが学童かなって思っていて。そのなかで探って、合う子合わない子も出てくるだろうし、そういうことが自然に身につくのが、この6年間だと思います。

中学校行ったら、進学のことが入ってきますもん。中学校行った子がみんな言ってます。「小学校は楽しかった。何も考えなくていいから」って。中学にいと、その次に進路があるわけです。これからの人生の肩に掛かってくる重いことが。わくわくすることだってあるかもわからないけど、（子どもたちにとって）負担になることもあるので。

保育園は、親が送り迎えして守られている。でも、小学校は、自分の足で登校下校して、危険にもさらされながら、いじめられたり、いじめたり、悪い子にもなりながら・・・。そんななかで6年間の学童期のなかで、色々なことを学ぶ。

財産ってお金じゃなくて人とのつながりだなんて思うんです。人って孤独ですよ。だから、わかり合える仲間の基礎が、遊びで作られていけばいいなと思うんです。

2. 中根大佑先生（藤水地区放課後児童クラブ藤っ子会指導員）

調査日時：2012年12月4日（火）

調査者：川又俊則・渋谷郁子・石川拓次

2. 1 クラブで人気のある遊び

渋谷：人気のある遊びについて教えてください。

中根：クラブでの遊びには、勝手にはやるものと、指導員が仕掛けるものがあります。

これからの時期だったら、たとえば1月ならコマで遊ぼう、とかね。季節感のある遊びなどは、こちらからはたらきかけないと、子どもだけではやりません。まずは指導員が遊び始めてみて、興味をもった子どもが1人2人と集まってきて、だんだんとその輪が大きくなっていくという具合に、遊んでいます。

屋外だったら、今はやっているのは、一人でこつこつ作る泥だんごです。寒い中でも子どもは、やっていますね。あとは、チームとりや、ドッジボール、サッカー、一輪車など、道具を使う遊びが多いと思いますね。

2. 2 遊びと集団づくり

中根：みんなで遊ぶという場面を作るか作らないかは、指導員のさじ加減ひとつだと思います。指導員が「みんなでしようか」と声をかけるのと、「みんな好きな遊びをしましょう」と声をかけるのでは違いますね。

ちょっと話が脱線しますが、ある有名な指導員の先生に会ってから、学童保育の中の遊びの重要性というものを、強く感じるようになりました。それまではなんとなく、遊んでいたんですよ。まだ指導員になって3年目くらいだったかな。子どもに「ナカ（注：中根先生の通称）の仕事は何？」と聞かれても、「遊びにきている」としか答えられなかったんです。でもその先生が、津の研修に来てくれて、遊びは子どもをつなげるものだと教えてくれました。たとえば、ひとつの遊びををするとしても、「ローカル・ルール」って言うのでしょうか、「得意な子が得意な力を制限されないように、そして苦手な子がその場においても、あんたがいてよかったわ、って言ってもらえるように、遊びを工夫しないといけない」という話を聞いて、大きな衝撃を受けました。あとは、「入れて一、と言う子に、待って一、と言わなくていいような工夫も必要」と聞きました。「それや！」と思って、1,000点ドッジボールとか1,000点サッカーとか、四人将棋とか（注：中根先生の考案した「ローカル・ルール」。詳細はp. 34を参照）、考えました。

川又：そういうアイディアは、ぽっと出てくるものなんですか？それとも考えて考えて、出るものなんですか？

中根：ぽっと出ますね。でもやっぱり、毎日子どもと遊んでいるから出るんですよ。1000点ドッジやサッカーにしても、自分が毎日していなかったら、たぶん出なかったでしょうね。ほかに一輪車が得意な指導員がいるので、自分はあまりやりませんが、やっぱり、その一輪車が得意な指導員は、一輪車を使ってする遊びを思いついたりしますから。指

導員が遊びに関わらないと発展がないと思います。

指導員として遊びを導入しないといけないと思っています。それがね、子どもにとって納得のいくもので、楽しかったら根づいていくし、「また明日もしよう」ってお互いに言える。そして、「明日も一緒にしよう」って言い合った子たちが、それまでは関わりがなかったのに、部屋に戻った後も名前を呼び合って、何かしゃべったりしている。そういう、前には見られなかった光景というのが、遊びから生まれてくるのかなと思います。

渋谷：それが「子どもをつなげる」遊びの機能ということなんですね。

中根：どうしてもね、人数が 100 人を超えているので、それぞれの学年で、横の関係だけで遊べちゃうんですよ。周りの子なんか関係なし、「自分の同級生だけで遊べるわー」となる。人数が少なければ、何か遊びをしようと思ったら、いろいろな子を集めないで遊びが成立しないけれど。

川又：100 人だと結構多いですね。1 学年が低学年だと 20 人くらいですよ？本当に同級生だけで、遊べてしまいますもんね。

中根：意識して遊びに誘っていかないと、そのまま横の関係だけで、大きくなっていってしまう。そうすると、たとえば集団下校にしても、みんなで一緒に帰れないで、同級生やご近所だけで帰ってしまうんですよ。ところが、人数が 10 人いるかいないかという地域の集団下校になると、ちゃんと「はい、並べ」とか「集まれ」とか言ってやっていますから。藤っ子（会）でもね、土曜の保育は 10 人くらいなんです、あとは 17 時半以降の延長保育、それも 10 人ちょっとなんですけれど、全然雰囲気違いますね。いつもの顔ぶれが 1 年生から 6 年生まで集まって、ファミリーみたいな、きょうだいみたいな感じが、あったかい雰囲気ができてくる。だから、人数の規模のようなことを考えると、小さい方が良くときも多いなと思います。クラス替えは年に一回しますけどね。

渋谷：クラブのお部屋が二つあって、完全に二つの集団というかクラスに分かれているんです。

川又：それはいつやられているんですか？

中根：年度末に。3 月の終わりに、4 月になったら新しいクラスでさっとやれるように。閉塞しているな、滞ってきたなという集団がいるときに、空気を変えるためにも役に立っていると思います。

2. 3 縦割り班

川又：縦割りのグループのようなものはあるんですか？

中根：班を作っているんですけど、そこに、1 年生から 6 年生までが、必ず入るように作っていますね。

川又：何かルールがあって決めた班なんですか？それとも自由に？

中根：くじ引きです。

川又：学年で何人かずつ入るように、くじ引きするんですか？

中根：はい、男女や学年も、なるべく同じ数になるように縦割りです。好きなものどうして

班を作ると、結局は、普段から一緒に遊んでいる子たちで集まってしまう。遊ぶのも同じメンバー、部屋に帰ってきて同じメンバー、下校するときも集団下校のメンバーを守らないで、また同じメンバーで帰る、これではクラブに100人以上の子どもがいても、一緒にいるのはつねに6、7人の同じ顔ぶれだけで、それ以外の子どもについては名前も知らない、ということになる。

川又：それはもったいないですね。実際にそうした縦割りグループを作ってみると、それなりに関係ができあがりますか？

中根：できてきますね。遊ぶきっかけにもなるし、何ヶ月にいったんかくらいいで、班替えもしています。班でご飯作ったりなどの活動もあるので、その中で上級生が下級生に教えたりという場面もあります。教えてもらった下級生も「その子に教えてもらってうれしかったー」というのもあると思うんですよ。そういう場を作っていくのが指導員の仕事だと思っています。そういう場面は、放っておいたら生まれないんですよ。

2. 4 年中行事の中で育つもの、生まれる関係

渋谷：クラブの外で行う行事も盛んですよね。キャンプに行ったりサイクリングに行ったり。

川又：青春18切符の旅行の話を伺いました。それは中根先生の発案ですか？

中根：青春18切符の旅行は、藤っ子（会）が伝統的にやっているものです。

渋谷：どこからどこまで、旅をさせるんですか？

中根：まずは津駅に集合して、それで、自分たちのグループで決めたところまで行きます。今年は遠いところで姫路とか、神戸の動物園とかに行っていました。昔は富士山を見るためだけに静岡まで行って、富士山を見て帰ってきたというグループもありました。あとは、奈良に行ったり岐阜に行ったり名古屋に行ったり。なかなか、子どもだけで旅行というのは、経験ないでしょうね。

渋谷：制限時間は設けているのですか？

中根：夜8時までです。8時に津駅に集合。

渋谷：心配ですよね？

中根：心配ですよ。電話がかかってくるたらドキッとしますよ。今年は、電車事故のせいで当初の目的地にたどりつけないというハプニングがありました。結局、行き先を京都に変えて、水族館に行ってよかったみたいですけど。

6年生はキャンプにも行きますけど、キャンプはもう現地集合です。引率はしません。「18切符で遠いところまで行っているのに、松阪まで行くのに引率はいらないな」って言っています。キャンプ場まで電車乗ってバス乗って歩いて来ます。困った時は、まわりの大人に聞くというのも良いなと思っています。とにかく、怪我しない程度に困って見るのもいいという考えです。

川又：青春18切符の旅行は、1グループ何人くらいですか？

中根：5人から10人くらいまでです。

川又：これは同じ学年でグループを作るのですか？

中根：18 切符の旅は、もともと 4、5、6 年生だけの参加です。このときは自分たちの好きなどころ好きなメンバーで行ったらいい、ということで、4 年生だけ、とか女の子だけ、とか言うこともありますけどもね。ちょっとそこはもったいないかな、と思ってはいます。

川又：3 回行けるので楽しみでしょうね、子どもたちは。

中根：あと、保護者がやっぱりね、送り出す時はすごい心配されていますが、帰りに津駅に迎えに行き、元気に帰ってくるのを見ると「涙が出る」とおっしゃいますね。「朝の子どもとは違う、旅をやり遂げて戻ってきた顔になっている」と言いますね。保護者さんの理解があつてこそ、できている行事です。「危ないから、そんなんしたらあかん」って言われたら、もう続けられないですしね。

渋谷：あと、自転車でどこかサイクリングに行くんですよ。

中根：先々週かな、自転車で 6 年生は、藤水から石山観音まで行ってきました。

川又：健脚ですね、みんな。パンクとかもありうるでしょ？

中根：修理道具とかも持っています。でも、去年は雨が降って、一人が転んで自転車が壊れて、治そうと思ったけど工具がなかったんです。近くにいたおじいさんに頼んで、スパナーを借りまして、事なきを得ました。地域のお世話になるというような、「こんな方法もあるんやぞ」というのを、子どもに見せているんだと思っています。

去年のキャンプのときには、6 年生の男子が、一般のお客さんも使うお風呂に、水をだーっと入れて水風呂にしまったんですよ。その子は、一人で集団を仕切っていたんです。子分みたいな仲間も二人いて、そこにまた人が集まって、結局 7 人くらいを引き連れていた。それで、「こんなこと最初にしようって言うたんは誰やー」って順番に尋ねていったね、犯人はわかっているから心の中では笑いそうでしたけどね、説教してやりました。それで、「そこに並べ」って、別の女性の指導員がその場で写真を撮ってね。キャンプから帰って保護者が迎えに来たときに「ちょっと見て、お母さんこれ」って言うと、お母さんは「こんな写真、二度と撮れへんな」っておもしろがっていました。あの子たちも大人になったら、「こんなことしたらあかん」って子どもを する立場になるんですよ、こんないたずら、僕たちもしていましたしね。これはいい思い出になると思います。

渋谷：キャンプといえば、花火もおもしろいんですよ。

中根：指導員が「おもしろい」と思うような遊びに変わっていくものもある。夜の肝試しなんかもそうで、男女ペアで行かせるんです。さっきのボスの男子なんか泣きましてね、こわくて一人で行けないんです。キャンプから帰って、今度はお父さんに言いましたら、お父さんは「あいつ、『ちゃん行った』って言いました」って。

石川：それは、小学校ではできないですよ、絶対に。学童だからできることですよね。

小学校の中ではできない関係だと思います。

中根：それを帰ってきたら、下級生に話しますよね、「めっちゃこわかった〜」とか。そう

すると「私は〇〇と肝試し行きたい」とか、もう決めてるんですよ。好きな子がいる子はそうやってわくわくしてて。「絶対学童やめんといてよ。一緒にキャンプ行こう」って言います。

石川：5、6年生でも続けている子は、結構多いんですか？

中根：多いですね。5年も6年も15人ずついます。

石川：一般的には4年生くらいでやめる子どもが多いみたいですね。

中根：そうですね。高学年が残ってくれるのはありがたいことですが、それも保護者さんの理解なしには難しいと思っています。中には「やめたい」っていう子がいたけれども、「あんたがやめたら私が学童行けへんやんか」っていうお母さんがいて、結局やめなかったという家もあったし。お母さんやお父さんが「学童好き」って思っていてくれたら、続くこともあるんですね。保護者も参加する行事とかも、大事にしています。12月には、もちつきをするので、そのときに、またお父さんやお母さんに来てもらいます。他にもドッジボールやサッカーをしたり。

川又：1年間で、どのくらいの頻度で保護者とかかわりはあるんですか？

中根：祭りは2回あって、餅つきが1回、あとは懇談が何回もあります。

2. 5 得意なことを見つけていく場としての遊び

中根：ルールのない遊びもあると思います。それで、日頃ルールのある遊びや、道具を使っている遊びなんかで、あんまり脚光を浴びない子が、妙にザリガニとるのが上手とか、セミを上手にとるとかっていうことがあると、その季節はその子が主役になれます。

渋谷：遊びというのは、自分の得意なことを見つけていく場でもあるんですね。

中根：そう、「これやったらあいつや」って言われて期待されるし、「とってよ」「すごいやん」「ありがとう」って言われる。学校で全然勉強ができなくても、夏のシーズンは人気があるんです。「学校にはな、国語算数しかないし、虫取りっていう授業があったら、優等生やのにな」ってその子に言っています。

渋谷：そうやって、得意なことを遊びの中で見つけていこうと思ったら、多様な遊びがあった方がいいですね。いっぱい、いろいろな遊びがあって、それをやっている中で、「これはこの子が得意」とかわかっていく。

中根：そうですね。だからいろいろな指導員がいた方がいいんだろうなと思います。ぼくのように、ドッジやサッカーを得意とする指導員ばかりだったら、そういう遊びがそんなに好きじゃない子は寄ってこられないですよ。中には、折り紙が得意な指導員とか編み物が好きな指導員なんかもいて、そういうのが好きな子はその指導員のところにいって、「上手やなー」って言ってもらっている。だからぼくは、子どもに「教えて」って言われても、「おれよりあの子の方がうまいよ、あの子に言うて、あの子やったら何でも教えてくれる」って言います。そこでまた関係が生まれてきますよね。何年かしたら、教えてもらった子は言いますよ。「私は〇〇ちゃんに教えてもらってこんなうまくなったんやー」って。これからも、中学も高校も同じようなところに行くんだし、そういう教

えたり教えられたりの関係はできていた方がいいと思っています。

2. 6 電子ゲームへの対応

川又：電子ゲームについてのご対応などをお聞かせください。

中根：いっさい、持ち込み禁止です。学童でしかできない遊びとかあるんで。家帰ってもできるからここではするなって。マンガもカードも。

渋谷：それは、先生が来られる前からそうでした？

中根：違いました。マンガとかはOKでした。でもね、やっぱり持ってくると、3、4人の仲間でこそこそと集まって貸し借りして、なくなったやらどっかいったやら、もめたりしていた。あと、人と遊ばず、マンガを読み回すだけで時間を過ごし合っていたりもしたので。

渋谷：抵抗はなかったですか。

中根：言ったらわりとみんなすんなりと納得してくれました。さっきの縦割り班のこともそうですが、抵抗があるだろうと思ったけど、「自分はこういうふうに思っているのこうさせてもらう」って伝えると、わかってくれました。

2. 7 子どもの運動面の不器用さ、体力低下

渋谷：子どもの運動面での不器用さについて、何か気になることがありますか？

中根：歩いているだけでこける子がいましたね。ボールをけるとか投げるとか、コマを回すとか、そういうことをするとき最初できないから教える、練習する、だんだんできるようになっていく。ボールもね、今日1年生の子がやってて、「上向きに蹴れない」っていうんですよ。それで蹴り方を教えてたら、あ、ちょっと上がったって。

自分のイメージしたように自分の身体を使うっていうのが、運動神経の問題だとしたら、不器用な子っていうのは、経験がないからイメージできないのかなと思います。経験がないのは、これまでせずに済んできたのか、まわりにそういうのを教えてくれる人がいなかったからなのか。たとえばリンゴの皮むきです。小学生でも妙にうまい子がいる。それはやっぱりお母さんがやっていて、私もやっているっていうことがあるからで。そういうふうに練習して習熟していく、っていうのが、この問題には関係しているかなって思います。

不器用っていうのは、何歳くらいまでのことを言いますか？

渋谷：大人でもあるかなとは思っているんですけど。経験不足というのはもちろん、練習したらうまくなっていくんですけど、それまでにすごく時間がかかる、というような個人差って感じますか？

中根：一輪車とか縄跳びとかはあるかなと思います。一輪車については恐怖心が入ってくるので気持ちの部分が大きいかな。

川又：体力の低下についてはどうですか。

中根：「学童クラブにいる子は、体育のときなんか全然違う、強い」って学校の先生にも

言われます。

石川：(多くの遊びを) 経験していることが大きいんでしょうか。

中根：おおむねサッカー、キックベースくらいですけど、夏休みのプール遊びで、4、5、6年生は自分に挑戦ということで、1時から5時まで泳ぎ続けるということをしています。今年是新記録で7000mが出ました。低学年の中でも2000mとか、自己ベストを100倍更新した子もいます。

渋谷：7000m！すごいですね。

石川：学校の限られた時間の中ではなかなか実現できないことです。

川又：学童ならではの取り組みですね。

渋谷：貴重なお話をたくさん聞かせていただき、本当にありがとうございました。

補章 教育制度改革と放課後児童クラブに関する一考察

—養護教諭志望者がクラブ指導員を経験する意義を中心に—

川又 俊則

キーワード：教育制度改革,放課後児童クラブ,養護教諭

はじめに

2007年6月に改正教育職員免許法が成立し、2009年4月から教員免許更新制が導入された。それから3年を経て、免許状更新講習も各地で定着しつつあるなか、2012年8月、文部科学相の諮問機関たる中央教育審議会（以下、中教審）から、教員養成に関する答申が出された¹⁾。鈴鹿短期大学は、養護教諭の養成を40年以上続けてきたが、このような背景の中で、2011年には専攻科「健康生活学専攻」を設置し、1種免許状と学士号が取得可能な制度を導入した。

さて、養護教諭志望者にとって小中学校等での養護実習は、免許状取得のための必須科目である。その経験は同時に、児童生徒と触れ合い、教育現場の実態を知る良い機会にもなっている。近年、学生アシスタントやボランティアとして学校現場で経験を積む機会は開かれている²⁾。その体験で多くを得る学生もいる。筆者は、学校ではないものの、放課後児童クラブ（以下、クラブ）は、養護教諭志望者たちにとって、放課後の児童の生活を知り、保護者と接点を持つよい機会ではないかと考えている³⁾。

筆者は、養護教諭志望者のクラブ指導員経験者へインタビュー調査を行った。そしてその語りから、クラブが養護教諭志望者にどのような経験をもたらす場であるかを本稿で考察する⁴⁾。2011～2012年度、筆者は共同調査において、クラブ指導員への聞き取り調査やクラブの見学等も実施している⁵⁾。考察の際、それらの知見も参照する。

1. 教育制度（教員養成・免許制度）改革の議論

本稿のテーマに沿って、まず、教員の質を上げる方策の検討を続けてきた先の中教審答申を確認しておこう。

この答申は「学び続ける教師を継続的支援するための一体的な改革」という内容である。そのなかで、「大学での養成と教育委員会による研修」が有機的に機能していないことを憂慮し、改善案の策定が要請された。また、従来の「大学における教員養成」と「開放制の教員養成」の原則は「基本的に尊重する」ものの、「教員養成の高度化・実質化」の推進が重要な視点として打ち出された。そして、教員養成の改革の方向性として「教員養成を修士レベル化し、教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」ことが述べられた⁶⁾。

2006年7月には、「今後の教員養成・免許制度の在り方について」という中教審答申が出されている⁷⁾。この答申は、教員養成・免許制度改革の具体的方策として、「教職実践演習」「教職大学院」「教員免許更新制」などが述べられ、同時に、「大学の教職課程を、教員として最小限必要な資質能力を確実に身に付けさせるもの」などの改革の方向性も示されている。

その後、中教審に「教員の資質能力向上」特別部会などが設置され、2012年8月28日の総会で、教員養成課程を現行の大学4年から大学院（修士）を含めた6年とする方向性が確認された⁸⁾。ここで想定されている免許は次の3つである。まず、学士課程修了レベルの「基礎免許状」（仮称、以下同じ）、次いで修士レベルの課程を標準とする「一般免許状」、さらに、特定分野（学校経営、進路指導、特別支援教育等）での高い専門性を身に付けたことを証明する「専門免許状」である。

ただし、現在の実態も留意すべきとされた。たとえば、「幼稚園教諭については、現職教員の二種免許状保有者の割合が7割を超える現状、今後の幼児期の教育・保育の総合的な提供に関する制度設計等の状況を踏まえ、新しい時代における質の担保・向上という観点から適切な制度設計を検討することが必要」だとされている⁹⁾。養護教諭養成に関する指摘はとくにない。

2. 放課後児童クラブの概要と筆者たちの調査

さて、本章でクラブの概要を確認しておこう¹⁰⁾。

クラブは「学童保育」の名称で、大阪や東京で1950年代頃から、働きながらの子育てを実現するために、設置運動が展開された。共働きやひとり親家庭を支援するために、厚生省は、1963年に放課後留守宅の子どもたちを対象とする学童保育補助事業を開始した。1970年代から幅広くさまざまな層から、国の制度化を求める署名活動などが展開された。そして、1997年6月に児童福祉法が改正され（1998年4月施行）、厚生省所管の「放課後児童健全育成事業」として、法律のなかに位置付けられることになった。以後、行政の枠組みとしては、「放課後児童クラブ」との名称が用いられ、指導員の位置づけもなされた。

一方、文部省は、1966年に留守家庭児童会補助事業を始め、1970年からはそれを校庭開放事業に統合、放課後施策として「放課後子どもプラン」を進めた。その後、2002年からは「新子どもプラン」、2004年度から「地域子ども教室」が進められてきた。

これら行政の動きを促進すべく運動を続け、また、実質的にクラブの運営等を支えたのは、保護者や指導員、そして地域関係者たちである。その大きなグループとして、全国学童保育連絡協議会がある¹¹⁾。この組織は、東京で1964年に第1回研究集会を開催、1967年に第2回目、そして、全国組織へ発展し、毎年1回全国大会として研究集会が開催されている。2012年は埼玉県で第47回大会が開催された（2013年は岡山県での開催が予定されている）。

2007年に提示された「放課後子どもプラン」の基本的な考え方は、厚労省所管の「放課後児童健全育成事業」と文科省所管の「放課後子ども教室推進事業」を一体的あるいは連携実施を目指すことである。だが、この方向性には、クラブ関係者からは反対意見が多く出された。

2008年の「新待機児童ゼロ作戦」では、学童保育利用児童を10年間で3倍に増やすことが目標とされた¹²⁾。その後、政権交代があり、2010年1月に閣議決定された「子ども・子育てビジョン」では、学童保育利用児童を5年間で30万人増やすことや質の向上が目標とされた。そして、子ども・子育て新システムが検討され、2012年3月の少子化社会対策会議では、「子ども・子育て新システムに関する基本制度」が決定され、いわゆる子ども・子育て関連3法が2012年8月に成立した¹³⁾。

2012年5月1日現在、学童保育数は2万843ヵ所、入所児童数84万6919人、「潜在的な待機児童」は約50万人と推定されている¹⁴⁾。

厚労省は2007年10月、「放課後児童クラブを運営するに当たって必要な基本的事項を示し、望ましい方向を目指す」、「放課後児童クラブガイドライン」(以下、「ガイドライン」)を策定し、地方自治体へ通知した¹⁵⁾。これは現在に至るまで、学童保育の基礎資料・参照資料とされている。「ガイドライン」には、「対象児童、規模、開所日・開所時間、施設・設備、職員体制、放課後児童指導員の役割、保護者への支援・連携、学校との連携、関係機関・地域との連携、安全対策、特に配慮を必要とする児童への対応、事業内容等の向上について、利用者への情報提供等、要望・苦情への対応」など、厚労省の指針が示されている。

筆者らは、このようなクラブの現況と諸問題を把握していくために共同調査を続けている。

2011年度は、「異学年交流」「食育」というテーマで、3つのアプローチ(①三重県下すべてのクラブの現況と異年齢交流や食育に関する質問紙調査、②幾つかの特徴的なクラブでの参与観察や指導員へのインタビュー調査、③あるクラブでの食育教育の実践アクション・リサーチ)から報告書をまとめ、地域の特性と指導員の力量、および保護者たちの協力が、児童の発達に大きな影響を与えていることと、三重県下のクラブの実態を明らかにした¹⁶⁾。

筆者自身は拙稿で、異年齢児童との交流、小学校教員ではないクラブ指導員との交流が、児童にとってどのような意義を持つのかを検討し、「第二の学校」ではない「生活力」を身につける場所としての放課後児童クラブという見解を持つに至り、『放課後に育つ』という視点¹⁷⁾で論じた。

2012年度は、「遊びと成長」に関して共同調査を展開している。

3. 指導員をめぐる課題

「ガイドライン」は「職員体制」の項目で、指導員に関して、「放課後児童クラブには、放課後児童指導員を配置すること。放課後児童指導員は、児童福祉施設最低基準第38条に規定する児童の遊びを指導する者の資格を有する者が望ましい」としている。その「児童福祉施設最低基準第38条」は、「児童厚生施設には、児童の遊びを指導する者を置かなければならない」と明記され、「児童の遊びを指導する者」として、「児童福祉施設の職員を養成する学校等の卒業者」「保育士」「2年以上児童福祉事業に従事した者」「小学校、中学校、高等学校、中等教育学校又は幼稚園の教諭」などが該当するとされている。ここには、養護教諭についての記述はない。

「ガイドライン」ではあくまでも「望ましい」とされているだけであり、クラブ指導員の資格要件は現在まで、全国で統一されたものはない。幾つかの調査報告によれば、保育士や小学校教諭経験者のみならず、さまざまなキャリアを持つ人びとが指導員になっているのが実態である¹⁸⁾。これまでの一般社会のクラブへの無理解を背景に、「放課後の安全な見守り程度では足り」ず、「子どもの成長発達を促す専門職としての指導員の存在が求められている」という主張もある¹⁹⁾。

「ガイドライン」には、「放課後児童指導員の役割」として、「①子どもの人権の尊重と子どもの個人差への配慮 ②体罰等、子どもに身体的・精神的苦痛を与える行為の禁止 ③保護者との対応・信頼関係の構築 ④個人情報の慎重な取扱いとプライバシーの保護 ⑤放課後児童指導員としての資質の向上 ⑥事業の公共性の維持」が掲げられている。さらに、指導員の「活動」として「学習活動」「基本的生活習慣」などの援助など7項目が提示されている。その第一番目には、「子どもの健康管理、出席確認をはじめとした安全の確保、情緒の安定を図ること」が挙げられている。

既存の資格所持や障害児とのかかわり経験の有無が、障害児の受け入れに対する意識に影響しているか否かを分析した西木は、決して有資格者や経験者が受け入れを肯定的に捉えているとは言えない結果から、障害に関して、指導員への働きかけや有効な研修の充実、支援などの必要性を論じた²⁰⁾。

2000年に設立された学童保育指導員専門性研究会は、その後、活発に展開し、専門誌や学会・研究会等で、指導員の専門性に関する議論を提出してきた²¹⁾。とくに、2000年から刊行している『学童保育研究』誌は、毎号特集が組まれているが、拙稿では同誌12冊を検討し、指導員に関しても論じた²²⁾。同誌5号は「学童保育の専門性と指導員の資格化」が特集されたが、特集に関する座談会では、「子どもたちが求めているのは、『弱みを見せられる大人』だと思うのです。それは、『受け止められている』という一つの実感なんだと思います」という発言も見られた²³⁾。これは、養護教諭が児童生徒に求められている一つの側面とも思われる。

同誌には、指導員の資格化の論点として、①国家資格か技能検定かという構想および養成機関の想定の問題、②独自の構想か既存の制度の改良・追加かという整理をした論考が掲載され、「学童保育に関する運動団体が組織を超えて共同し、研究者の協力を得ながら英知を結集し、学童保育指導員の知識と技能に関する技能検定制度と運営組織をつくりあげていく」と主張されていた²⁴⁾。

同研究会は、2008年から学童保育指導員資格研究会を発足させ、2010年には「学童保育指導員資格要件とカリキュラム」を発表したという。その後、岡山県にNPO法人「日本放課後児童指導員協会」、愛知県にNPO法人「学童保育指導員協会」、福岡県にNPO法人「学童保育協会」が設立され、それぞれ独自の活動を進めている。各法人ではそれぞれ独自の資格を設定したが、全国共通の資格とはなっていない²⁵⁾。しかし、これらの展開は、先の主張に沿ったものとも見なせよう。

全国各地にあるクラブは、規模の大小、地域、運営主体など、大きな差異がある。したがって、求められる指導員像も多様なものが想定される。だが、宗像市35名の指導員たちへの調査によれば、事故、切り傷・打撲・骨折などのケガ、腹痛・発熱・頭痛等の病気を経験した指導員たちは、重傷度・緊急度の判断が困難、手当の仕方が分からない・手当に確信がもてないなど、処置に関して困った経験を持っている人が多く、イライラ、心の発達、食生活、頭痛などの訴えが多いなどの健康面や心に関する点でも気になっているという²⁶⁾。これは一事例だが、決して例外的なことではない。

クラブの事故報告もある²⁷⁾。平成22年10月1日～平成23年9月30日に、全治1ヵ月以上の事故は35都道府県、261件あった。骨折(215件)、打撲・ねんざ(21件)、歯の骨折(17件)、おやつを喉に詰まらせた死亡(1件)などである。1年生(98人)が多く、学

年が上がる（2年生 75 人、3 年生 69 人）につれ少ない。児童が活発に活動する場所（校庭など 126 件、体育館など 45 件）での発生が多い。事由としては、遊具からの転落など（75 件）、球技中の転倒など（51 件）、階段などにおける転落など（47 件）が多かった。

これらは小学校で起きる事故の状況と乖離するものではない。むしろ、養護教諭が日常的に接しているものと言えよう。この報告は全治 1 ヶ月以上の重篤なものだけだが、それ以外の、すり傷・切り傷、風邪他の病気なども多数あるだろう。国民生活センターが 2008 年に実施した市区町村担当部署対象の全国郵送調査を見ると、「ケガ・事故」の発生場所は、「施設屋内」が 42.7%（1976 件）、「施設屋外」が 42.3%（1958 件）、「園外活動」が 5.1%（234 件）となっており、屋内などでも事故が多いことがわかる²⁸⁾。

もちろん、ケガ・事故はないことが望まれるが、実際は不可避であろう。したがって、クラブでの健康や安全面へ対応の準備は必要不可欠となる。その際、養護教諭志望学生や同免許状保持者は、十分その任に堪えうると思われる。

4. 指導員経験者たちの事例

4. 1 方法

筆者は、クラブ指導員経験者に対してインタビュー調査を試みた。本稿ではそのうち 4 人の語りを抽出して考察する。

養護教諭免許状保持者（卒業生）2 人、養護教諭を目指す学生（在校生）2 人に、それぞれ約 1 時間程度の半構造化面接を実施した。主な質問項目は（自分自身のクラブ経験の有無、指導員アルバイトをした理由、日々の仕事内容、小学生への対応で発見したこと、他の指導員を見て学んだこと、子どもたちはどのような遊びをしているか、後輩たちにはこの仕事をすすめるか）などである。卒業生には 2012 年 1～2 月、学生には 2012 年 12 月に実施した。その他、本調査以外の場面で、経験した方々数名にヒアリングも実施した。

面接に際しては、本調査の目的、および答えたくない質問には答えなくてもよいこと、調査の途中いつでも辞めることができることなどを文書・口頭で述べ、了承して調査を続けることで許可を得た。

面接時、録音はせず、メモ書きでまとめた。一人ひとりの内容を確認、加筆修正した。その面接資料をもとに、以下の考察を進める。

4. 2 インタビュー対象者

A さんと Bさんは、短期大学在学中に同じ W クラブで指導員アルバイトをした。Aさんは短大卒業後も続け、合計 5 年ほど勤めた。Bさんは在学中および卒業後と約 2 年の勤務だった。Bさんはさらに X クラブで土曜日のみの勤務を 1 年経験している。Cさんはクラブ指導員を 2 ヶ所で経験した。1 ヶ所目は Y クラブで夏休み期間、約 30 人の小 4 をみた。2 ヶ所目（現在）は、約 100 人の大所帯 Z クラブに週 1 日通っている。D くんは W クラブで週 1 回の勤務を半年以上続けてきた。この 4 人の語りを 4 つの観点でまとめた²⁹⁾。

4. 2. 1 小学生の世界を垣間見る

小学生相手の仕事は、4 人ともクラブが初めての経験だった。また、自分自身が小学生のとき、クラブに在籍した経験もないという。養護教諭を志望した C さんは、苦手だと思っ

ていた子どもへの対応を克服すべく働き始めた。

皆、自分たちの小学生時代とは異なる現在の子どもたちの状況がわかったと言う。絵の得意なCさんは、子どもたちに「描いて」「描いて」と男女問わずリクエストされ、そのなかで流行っているキャラクターを知った。そして、Cさんは、子どもと遊びながら、「案外嫌いじゃない」自分に気づいた。

Dくんは、出勤する前、園庭で遊んでいる子たちに「D せんせい」とつかまる。そして少し遊び、「タイムカードを押したらすぐ来て」と言われる。これは、彼の勤務開始時間がちょうど宿題時間にあたり、終わった子たちから遊ぶため起こる現象だ。1, 2 年生とよく遊ぶ彼は、「おやつの後、遊ぼう」と言われ、約束した子たちと園庭等で一輪車や「ごっこ遊び」などを含めた様々な遊びをする。そもそもDくんに対して指導員は、勤務内容の説明として「子どもたちと遊ぶ」ことが中心だと言っていたという。「せんせい」と言われるもの、彼自身は子どもたちから「先生」ではなく、言わば、友達感覚で接せられているような感覚を持つ。

Bさんは女の子中心に遊び、校庭での鬼ごっこや、室内での塗り絵、折り紙などをよくしたという。Aさんの場合、長きに亘って子どもたちと一緒に過ごしていたため、子どもたちの成長を見た喜びも語られていた。Bさんも、長く勤めてキョウダイで通ってくる子たちに対応したとき、そのキョウダイが、触れあったり離れたりという様子が、わかるようになり、それに応じた対応ができるようになったという。

このように、クラブでの仕事が、子どもたちとかかわるよい機会となったとは口々に語られた。学生時代に子どもたちとかかわれるアルバイトとして、家庭教師・塾講師もある。だが、それらは、あくまでも「先生と生徒」の関係である。小学生たちの「遊び相手」が仕事の中心となるクラブ指導員アルバイトは、その名の通り「遊び相手」として小学生たちと向かい合う。Cさんのように絵や手芸が得意でそれを披露したり、Dくんの同僚のようにトランプゲームを教えるような場合、子どもたちから「尊敬」もされ、より深くかかわることができることもある。

自分の小学生時代とは違う、いまの小学生の実態がわかることも重要である。友達のようにお姉さん、「先生じゃない」立場だからこそ、子どもたちが気持ちを伝えてくれるとCさんは思っている。クラブでは、小学校1年から6年まで、男女、性格も異なる小学生たちと丸ごと接することになる。こうして、彼女たちは、小学生たちのいまの世界を直接見ることができた。Bさんの「とにかく楽しかった」との回顧は、指導員経験を言い得ているだろう。

4. 2. 2 ベテラン指導員と子どもたちを叱ること

AさんやBさんは、とくにベテラン指導員から数多く学んだことがあると述べていた。

指導員には20歳代、30歳代はもとより、経験豊富な40歳代、あるいは、子育てをひと段落した50～60歳前後の方もいる。そのようなベテラン指導員は、クラブに子どもを迎えに来る保護者から、子育て相談を受けることもある。

また、あるベテラン指導員が「家でこれを作ったのでこれで遊んでみて」と児童たちに手作りの玩具を渡す場面などを見かけ、勤務時間以外も子どもたちのために行動している様子、誠心誠意子どもたちに接する姿から、有形無形の様々なことを学んだという。

介助員の経験もしている B さんは、問題行動を起こす子への対応について、他の指導員との連携を意識し、毎日の様子をノートに書いて、口頭だけではなく文章での連絡をしっかりとっていたという。指導員は毎日毎時間、同じメンバーで対応しているわけではない。ローテーションで交替制となることもある。子どもたちに関する申し送り事項の徹底は、当たり前であるが、そのことを彼女は勤務の中でしっかり学んでいた。

子どもと接するのは、楽しい場面だけではない。(女子の間で)陰口が見られたり、他学年と言ひ合ひしたりという場面に遭遇し、それを諫めることもあるだろう。ときには、その行動に対して叱ることも必要になる。4 人とも、それまで、子どもたちを叱った経験はなかったという。

C さんは、男女のケンカへの対応で、子どもたちから「もっと本気で叱って」と言われ、そのとき自分が「叱れない」ことに気づいたという。説得するような言い方だったのだ。叱ることの難しさに気づいた。D くんも、宿題などを放って遊んでいる子に早くやるようには言うが、声を荒げては叱らないと言う。このクラブでは正規指導員が厳しいが、それ以外のパート指導員は厳しくはない。全体指導を考え、自ら逸脱できないと思っている。ケンカの場面では、話し合わせ、自分たちで原因を確認させ、謝らせ仲直りさせているという。その際、声を荒げずに止めているという。

A さんも指導員として当初は、叱り方がわからなかったという。しかし、年上の先輩で、叱れて遊べるという人がいたので、その行動を見て学び、指導員全体で統一した指導ができないと子どもたちが戸惑うと気づき、やがて、自らも叱れるようになったという。そうすると、C さんも D くんも、まだ経験不足ということになる。A さんや B さんのように 1 年以上の経験を経ると、やがて、叱れる指導員になれるのかもしれない。

4. 2. 3 養護教諭(志望者)としての対応

A さんや B さんは、養護教諭志望者および免許状保持者として、保護者から病気やケガに関する専門的知識や技術を期待されたこともあったという。「(あなたが)いて良かった」などと言われ、病気やケガ、発達のことなどの相談を受けるときもあった。もちろん、彼女たちにとってそれはプレッシャーがかかることであった。だが、その期待に応えるべく、自分なりに学び、応じ、行動してきたという。実際に、切り傷やすり傷、インフルエンザや風邪等のときは、自らの知識経験等で対応できたようである。ただし、免許状取得前の学生時代は、経験値も少なく、ベテランの指導員に頼ってしまった部分がかかなりあったとも述べていた。

C さんも勤務直後、まだ養護教諭の勉強をし始めた段階で、砂場の枠に顔をぶつけ、出血し、服も血だらけになった子に遭遇した。そのとき他の指導員から、「養護教諭志望だから」として、処置をたずねられた。たいへん驚いたものの、C さんは冷やすなどの処置をし、保護者を呼んだ。ほとんど何もできなかったという思いの後、救急処置については、自ら積極的に学んだという。クラブではケガも多いから、その対応のため自ら勉強した。すると、その後、「緊急時の対応を教えてほしい」とも言われた。

また、子ども達からは「××先生(指導員)には内緒」「親にも言わない」と自分だけに話してくることもある。本人にとって内緒話だが、実は誰もが知っている話ということも

ある。このような、話を聞く場面するとき、養護教諭の実践と似ているとも思っているという。

Cさん、Dくんも、「ヘルスカウンセリング」等の授業で学んだ「傾聴」の姿勢を、その後の対応では意識したという。Cさんは、よく話しかけてくる子の対応を実践で学んでいるという。Dくんは、それまで子どもたちを否定していた場面もあったが、「受容する」というカウンセリングマインドを使っていこうと意識したという。

すりむき、切り傷などのケガの対応は、皆、経験している。近年では湿潤療法もあるが、他の指導員同様、水で洗って消毒液、絆創膏が（子どもや保護者たちからは）望まれており、そうしているという。他の指導員たちも、ケガの時には救急箱を利用してその場でできる対応をし、その後、保護者に連絡というのが基本である。

4. 2. 4 クラブで見る食生活、実習前の経験、異年齢交流

夏休みや土曜日など、子どもたちが一日クラブにいるときは食事がある。Wクラブはお弁当持参である。なかにはカップ麺とお湯を持参する子や、コンビニ食品を頻繁に持ってきている子もいたらしい。Aさんたち自身の小さい頃と比べ、学校では見えない子どもたちの食生活を考えるきっかけになり、健康についてより広く考えることができたという。また、おやつなどを通じ、子どもたちの好き嫌いや家庭での食生活や生活リズム、保護者の子どもへの対応へと子どもたちの生活全体を考えられるようになったという。

たしかに、保健室内では個別指導が中心で、その子の家庭環境のみならず食生活にまで視野が広げられるかという点、経験値の足りない彼女たちには容易なことではあるまい。しかし、クラブの仕事で気づき、その後、臨時採用として保健室の現場で働く機会が得られたAさんなどは、とても大きい経験となったという。

臨床実習（1年次春休みに行う2週間の病院での実習）の前に指導員経験があったため、病院の診察場で、子どもが医師の前で自分のことを話せなくても、それは当たり前だと気づき、（緊張その他で）しゃべれない子にどういうアプローチをすればいいかなど、事前に考えることができたAさんは述べていた。

規模によっても異なるだろうが、ふだんの学校生活では異年齢での交流は決して多くはない。だが、クラブでは縦割り（異年齢）でのグループ行動や、ふだんの遊びにおいて異年齢での交流も少なくない。Bさんは「学年の違う男女と一緒に見るのができた」、Aさんは「子どもたちが、自分たちより年上の子（年下の子）に気遣いできるかなどの様子を知ることができた」などと、子どもたちの多様な側面を見たことも述べていた。

4. 3 若干の考察

上記の通り、4人の事例を扱った。それ以外にも、筆者は、クラブ指導員の経験を持つ数名の養護教諭免許保持者たちにヒアリングした。すると異口同音に、その経験は自分には役立ったと述べられた。それは子どもたちへの対応の慣れであったり、救急処置の経験であったり、保護者との関係だったり、子どもたちの放課後の元気な様子を見たという知見の深まりだったり、様々だったが、それらは、上記でまとめたことに含まれるだろう。

ある養護教諭が、自らの大学時代の体験を踏まえ、「先生と児童という関係ではない場面で子どもたちと接することは、とても重要だと感じた」と述べていたが、それはDくん

が現在味わっている感覚に近いだろう。また、ある指導員は「子どもたちと一緒に遊ぶ」ことで得られるものがとても多かったと言う。「遊ぶ」だけで得られるものも多い。週1日の勤務であるCさん、Dくんは他の指導員から「子どもたちと遊ぶ」役割を求められ、それを続けてきた。まだ、自ら新たなアイディアを提示し、遊びで子どもたちをリードしていくようにはなっていないが、遊びをめぐる子どもたちの様子は十分に観察し、対応している様子が見えてきた。

養護教諭志望者のクラブ指導員体験について、以下のようにまとめられるだろう。

養護教諭を志望し、将来、小学校や中学校の保健室での勤務を希望する学生やその卒業生たちにとって、多種多様な子どもたちとの触れ合い、子どもの健康の背景にある家庭環境、キョウダイの差異の理解、他のベテラン指導員のスキル、異年齢交流など、学校現場では見ることでできない機会を経験しているのである。

「子どもと合意形成を行いながら、養護し、ケアし、教育するかかわりのプロセス」が「学童保育実践」だという説明もある³⁰⁾。「どれが正解でどれが不正解ということにはならない」ということであれば、指導員として日々の活動のなかで、子どもとどのように向き合うかによって、得られるものは全く違ってくるということになるだろう³¹⁾。そして、彼女たちにとって、そこがゴールではないものの、そこで得られた経験は本来の目標への貴重な経験となるだろう。

5. まとめ

前節で述べたように、養護教諭免許状保持者が現職になる前、クラブ指導員という経験は大いに奨励されるべきだと思われる。放課後の子どもたちの様子を見、ともに遊び、子どもたちの生活や社会の視野を広げることは、養護教諭を目指す彼女たちにとって大事であり、そこでの経験は、本稿での4人それぞれにとっても大きいように思われる。

本稿では、少なくとも半年、長くても5年程度の指導員経験者の語りを中心に議論した。クラブ指導員として、長期間勤務する人もおり、その場合、様々な困難も考えられる³²⁾。また、今回の語りからは、指導者を継続することの困難さはあまり見られなかったが、実際には様々な場面であることも推察される。

4人の養護教諭志望者たちにとって、いずれもクラブ指導員はいい経験だった。しかし、彼女たち自身の将来の職業の一つの選択肢として考えた場合、クラブ指導員は、塾講師や臨時的任用での教育関係の仕事と比べ、待遇面ではたいへん厳しく、その仕事だけで一人で生活できないと彼女たち自身は理解している。つまり、彼女たちは、自らの養護教諭採用試験合格までの勉強を兼ねての勤務には、とても意味がある仕事だと考えているが、あくまでもその就職までの経験としての位置づけである。その上で、いわゆるアルバイト指導員として経験を積むのは、後輩たちにも是非お勧めしたいという。

今後筆者は、先の「児童の遊びを指導する者」として、他の教諭は該当するにもかかわらず、養護教諭免許が該当しない理由等を検討し、同時に、養護教諭が放課後児童クラブで指導する資格要件となり得るかどうか判断する材料を、本研究のような実証調査を進め、より多く提供するようにしたい。

謝辞

本稿作成にあたって、インタビュー調査に協力してくださった方々、調査でお世話になったクラブ指導員の方々、担当部署の方々に、記して感謝申し上げたい。

脚注

- 1) 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」、2012年8月28日、説明用資料 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/1326877.htm 2012.12.5 閲覧)。鈴鹿短期大学では同年から教員免許状更新講習をしてきた(その3年間のまとめとして、鈴鹿短期大学教職キャリア開発センター編, 2012, 『受講者が求める教員免許状更新講習をめざして』鈴鹿短期大学も参照)。筆者も4年連続で「保健室経営のための調査統計の進め方」という講習を担当している。
- 2) 中教審は、「学生ボランティアや学校支援地域本部、児童館等での活動など、教育実習以外にも一定期間学校現場等での体験機会の充実を図る」と提案している(中央教育審議会, 前掲, 14頁)。
- 3) 「学童保育」と「放課後児童クラブ」の差異は、本稿では以下のように扱う。「学童保育」は、1950年代頃以降、共働きやひとり親家庭の小学生の放課後の生活の場として始められたものであり、その後、様々な経緯の後、1997年に法制化され、現在、「放課後児童クラブ」の語が用いられている。本稿で筆者は、基本的には「学童保育」と「放課後児童クラブ」を同義とし、後者を用いる。ただし、先行研究等において歴史的な背景を持つ用語として、あるいは通称で「学童保育」が親しまれてきていることを鑑み、引用その他、必要に応じてこの語も用いることとする。なお、2012年8月に改正された児童福祉法(未施行)では、6条の3で「おおむね十歳未満の」という文言が削除され、クラブの対象者は小学生全員へ拡大された。
- 4) 本稿は、日本教育保健学会第9回年次大会の口頭報告「放課後児童クラブと養護教諭志望者——三重県における調査を中心に」(2012年3月30日、於：東北学院大学)を全面的に改稿したものである。
- 5) 2011年度の調査全体は、拙編著, 2012, 『三重県の放課後児童クラブの現在——鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学研究所共同調査報告』黒川印刷、を参照。2012年度の調査全体は、現在作成中の報告書を参照。
- 6) 中央教育審議会、前掲、1-5頁。
- 7) この答申は、文部科学省のサイトに掲載されている (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm、2012.12.5 閲覧)。
- 8) 中央教育審議会、前掲、5-12頁。
- 9) 中央教育審議会、前掲、12頁。
- 10) 本章は、拙稿(2012a, 「放課後児童クラブと学校教育に関する一考察」, 『鈴鹿短期大学紀要』32, 51-69頁)をより簡略化して記述した。放課後児童クラブの歴史と諸問題については、一般向けに書かれた、田丸敏高他編, 2011, 『子どもの発達と学童保育——子ども理解・遊び・気になる子』, 福村出版の4章が平易で分かりやすい。
- 11) 同協議会のウェブサイト (<http://www2s.biglobe.ne.jp/Gakudou/> 2012.12.5 閲覧)には、全国各地の催し物の連絡などが示されている。

- 12) 「待機児童ゼロ作戦」「新待機児童ゼロ作戦」の失敗については拙稿(2011, 「人口減少時代のなかの子育て——揺れ動く制度のなかで」, 小堀哲郎編, 『社会のなかの子どもと保育者』創成社, 132-139 頁) も参照。
- 13) 基本制度についてはウェブサイト参照 (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/10motto/08kosodate/pdf/kihonseido/sl-bl.pdf> 2012.12.5 閲覧)。なお、関連 3 法の予算想定を見ると (<http://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomo3houan/pdf/s-about.pdf> 2012.12.5 閲覧)、放課後児童クラブは認定こども園・幼稚園・保育所の 30 分の 1 に過ぎない(平成 29 年度の利用者は半数という想定にもかかわらず) が、同じ仕組みのなかで議論が進んでいることも確認しておきたい。
- 14) 全国学童保育連絡協議会, 2012, 『学童保育情報 2012-2013』, 18 頁。2012 年調査では福島県内 9 町村は含まれていない。「潜在的な待機児童」は、保育所卒園生の 6 割弱しか入所できていない推測にもとづく。
- 15) 全国学童保育連絡協議会, 前掲, 93-96 頁。厚労省のウェブサイト (<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/10/d1/h1019-3a.pdf> 2012.12.5 閲覧) 等。
- 16) 拙編著, 前掲。
- 17) 拙稿(2012b, 『放課後に育つ』という視点」, 拙編著, 92-103 頁) は、3 名のインタビューを考察した。本稿はそのうち 2 名とその後調査した 2 名の語りを扱っている。この視点に立った、鳥羽市答志島の寝屋制度を含めた議論も参照されたい(拙稿, 2012c, 「答志の寝屋制度と『放課後』」, 『生活コミュニケーション学』3, 35-42 頁)。
- 18) 2007~2008 年に全国 5000 カ所を対象にした調査(回収率 51%) では、資格なし 25%、幼稚園教諭 33%、保育士 32%、小学校教諭 13%、中学校・高等学校教諭 20%、その他 19% という結果だった(大谷直史, 2010, 「学童保育指導員の労働と意識——2007 年度全国調査報告」, 『地域学論集』6(3), 252-253 頁)。
- 19) 森洋子, 2009, 「子どもの健全育成と学童保育 K 市学童保育の実践」, 『岐阜女子大学紀要』38, 76 頁。
- 20) 西木貴美子, 2010, 「学童保育における指導員の資格や体験の有無が障害児受け入れに対する意識に及ぼす影響」, 『四天王寺大学紀要』49, 413-223 頁。
- 21) 同研究会の活動は、同研究会のウェブサイトで詳しく報告されている (<http://senmonken.net/> 2012.12.5 閲覧)。
- 22) 拙稿, 2012b, 前掲。
- 23) 浅井晴夫他, 2004, 「座談会 学童保育指導員の専門性にもとづく資格化にどう迫るか」, 『学童保育研究』5, 35-65 頁。
- 24) 石原剛志, 2004, 「学童保育指導員の資格化問題——現状と課題」, 『学童保育研究』5, 10-25 頁。
- 25) 単位互換の連携や最終的には日本学童保育学会(2010 年 6 月設立) が認定する資格に統一することも検討しているとのことである(山陽新聞、社会欄、2012 年 12 月 3 日、日本放課後児童指導員協会サイトでこの取材記事が読める http://ja-acc.jp/images/topics/1354512251/1354512251_11.pdf 2012.12.10 閲覧)。
- 26) 江藤節代, 2003, 「学童保育における子どもの健康と安全に関する指導員の学習ニーズ」, 『小児保健研究』62(1), 96-103 頁。

- 27) 全国学童保育連絡協議会, 2012, 『学童保育情報 2012-2013』, 149 頁 (平成 23 年 10 月 21 日「放課後児童クラブの事故報告集計」)。
- 28) 国民生活センター, 2009, 『学童保育の安全に関する調査研究』, 100 頁。その他、国民生活センター, 2008, 『学童保育の実態と課題に関する調査研究』と国民生活センター, 2010, 『学童保育サービスの環境整備に関する調査研究』の各調査も参照。
- 29) Dくんは男性養護教諭を目指している。男性養護教諭については幾つかの拙稿がある。それらを収録した報告書に、拙編著, 2012, 『養護教諭の複数配置に関する社会学的研究——セルフエスティームとジェンダーの観点から』(平成 22・23 年度学術研究振興資金研究報告書), 黒川印刷がある。
- 30) 中山芳一, 2012, 『学童保育実践入門——かかわりとふり返りを深める』, かもがわ出版。
- 31) 中山, 前掲, 107 頁。
- 32) 嘉村友里恵, 2012, 「学童保育における支援者の『危機』とその克服に関する一考察」, 『地域環境研究 (環境教育研究マネジメントセンター年報)』4, 51-67 頁。

おわりに

渋谷郁子

「児童クラブで小学生の遊びの調査をしてみないか」と声をかけていただいたとき、「やります、やります」と二つ返事で答えた。これまで私は、幼児期を中心に研究を進めてきたので、卒園していく年長さんの次の姿を見る機会がなかった。ランドセルを背負って澄まし顔で歩いている姿をたまに町で見かけると、「立派になったな」と親戚のお婆さんのような気持ちになるが、どうやって彼らが「幼児」から「小学生」になったのか、内実は知らないままだった。

そういうわけで、本調査においても、自ずと関心は低学年児童に向かった。特に、小学生になったばかりの1年生が、怒濤の1学期を終え、夏休みの開放感の中でどのように遊んで成長していくのか、とても関心があった。結果として、体力、協調運動のいずれの調査においても、飛躍的に伸びるということはなかったものの、特に協調運動の調査では、1年生は2年生と比べて遜色ない成績を示した。また、遊びについての質問紙の結果から、ドッジボールやサッカー、バスケットボールなどの球技をはじめ、鬼ごっこ、砂場遊びなど、さまざまな種類の遊びにおいて、上級生に混じって、たくましく遊んでいる様子がうかがえた。分刻みのスケジュールを柔軟に変更して、調査にご協力いただいた「郡山地区児童クラブサンキッズⅠ・Ⅱ」の先生方に改めて御礼を申し上げたい。そしてなにより、真夏の日差しの中、一生懸命頑張ってくれた、1、2年生の皆さんに心から感謝したい。

今回、さまざまな児童クラブを訪問し、指導員の先生方に質問紙に回答していただいたり、インタビューに応じていただく中で、子どもと遊びについて、改めて考える機会を得た。中でも、くるみ会の末廣先生のおっしゃった「生活の中に“楽しい”を見つける」「子どもに与えたいものは、時間・空間・仲間、そして手間」ということばは、ずしりと胸に響いた。子どもの遊びが乏しくなった、貧しくなったといわれる。それはすなわち、私たち大人の生活が、乏しく、貧しくなっていることの裏返しなのであろう。「手間暇かけて生活を紡いでいるか」と問われたように感じた。次世代に伝えていけるような、生活を紡ぐ技を、今の私たちは持ち合わせているだろうか。不意に不安におそわれる。

また、津市内の3つの児童クラブの活動を拝見して、現代の子どもたちに、昔ながらの遊びや異年齢集団での人間関係を経験させるためには、一種の強制というか、「まあ、だまされたと思って食べてごらん」というような関わりも必要ではないかと考えるに至った。子どもに必要なものを、子ども自身が欲するとは限らない。次々と発売される電子ゲームやカード、塾に習い事、時代の波はどんどん押し寄せてくる。積極的に遊びをリードしていくところもあれば、枠だけ決めて子どもに任せるところ、提案はして子ども自身が入れるのを待つところ、やり方はいろいろだが、いずれも、大人側の信念と粘り強い働きかけなしには、実現し得ないものである。豊かな遊び文化を守る防波堤として、児童クラブが機能している現実を知った。

調査にご協力いただいた指導員の先生方、関係者の皆様に、深く御礼を申し上げます。

2013年2月

放課後に成長する子どもたち

三重こどもわかもの育成財団

平成 24 年度 青少年育成調査研究事業

「放課後児童クラブの『遊びと成長』に関する研究」報告書

発行日 2013 年 2 月 28 日

著 者 川又俊則・渋谷郁子・石川拓次

発 行 鈴鹿短期大学生活コミュニケーション学専攻川又研究室

〒510-0298 鈴鹿市郡山町 663-222 鈴鹿短期大学

059-372-3900 (TEL) 059-372-3903 (FAX)

kawamatat@suzuka-jc.ac.jp

印 刷 黒川印刷

〒514-0008 三重県津市上浜町 2 丁目 1 1

059-226-4877